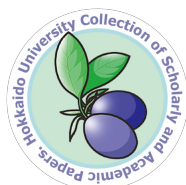




HOKKAIDO UNIVERSITY

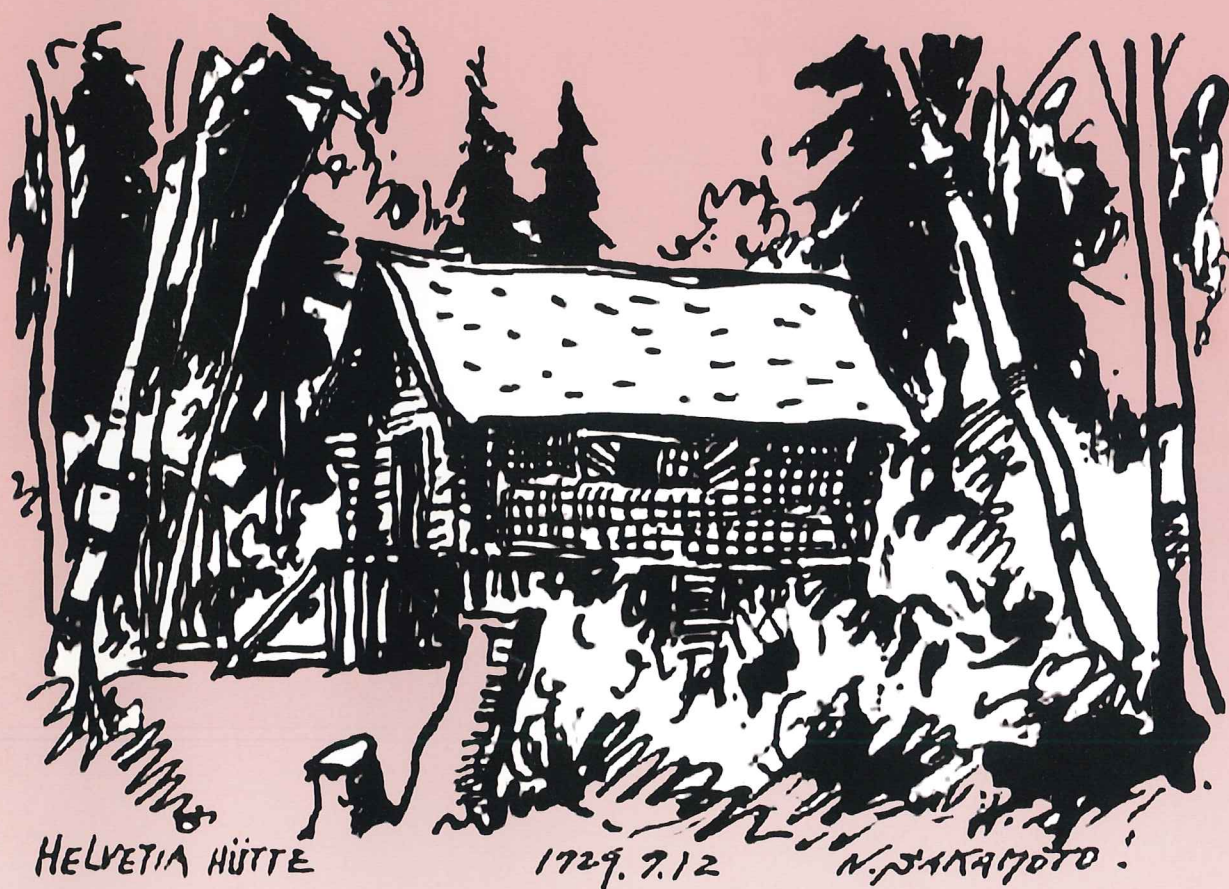
Title	北海道大学の山小屋
Author(s)	在田，一則；小河，建伸；佐々木，尚三 他
Citation	北海道大学総合博物館第33回企画展示 北海道大学の山小屋， 5-83
Issue Date	2006-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60202
Type	book
File Information	201511041510.pdf



北海道大学創基130周年記念

北海道大学総合博物館 第33回企画展示

北海道大学の山小屋



2006

北海道大学の山小屋展実行委員会

北海道大学総合博物館

北海道大学創基130周年記念
北海道大学総合博物館 第33回企画展示

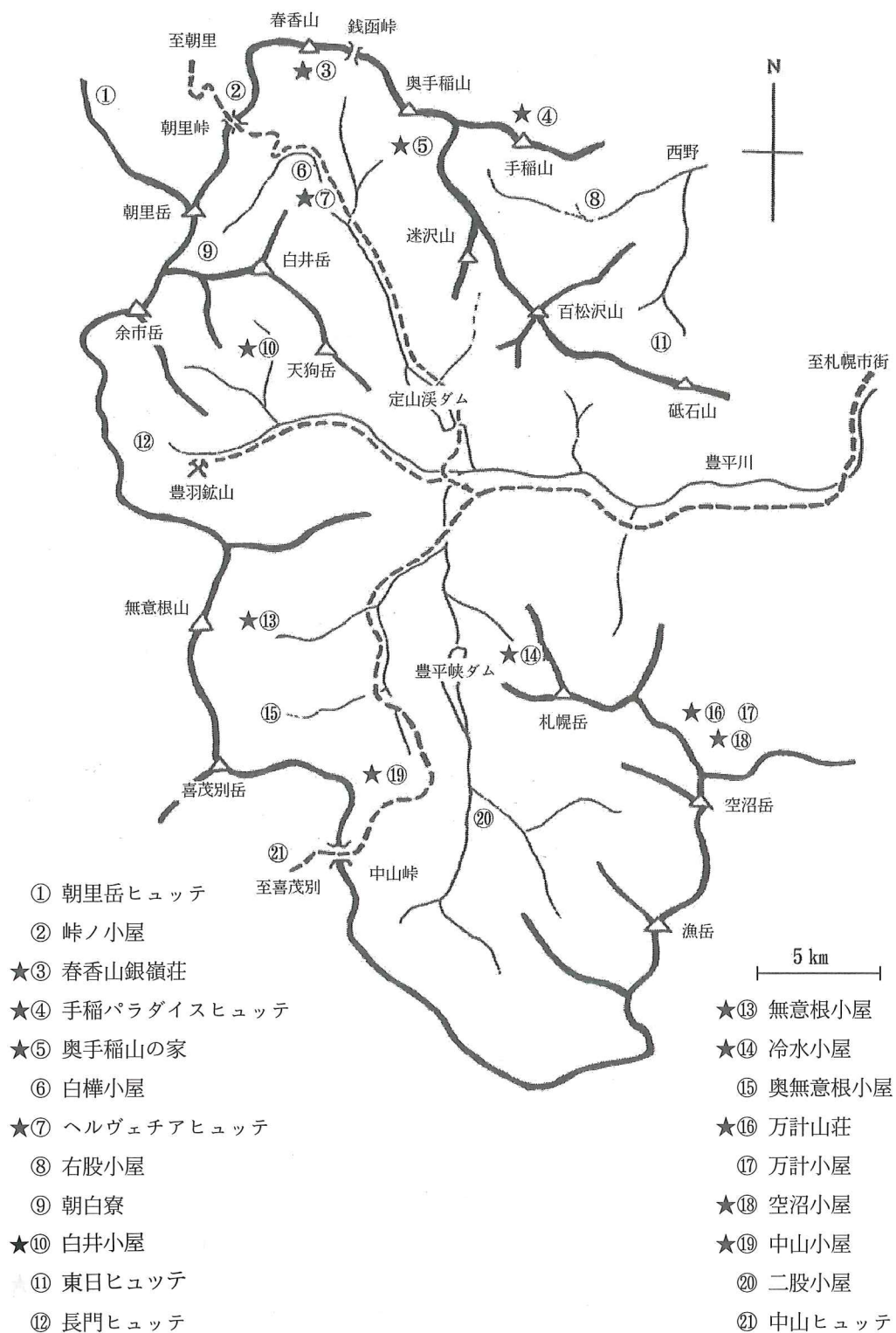
北海道大学の山小屋

－ 山は厳父 小屋は慈母 －

2006

北海道大学の山小屋展実行委員会
北海道大学総合博物館

札幌近郊山小屋配置図



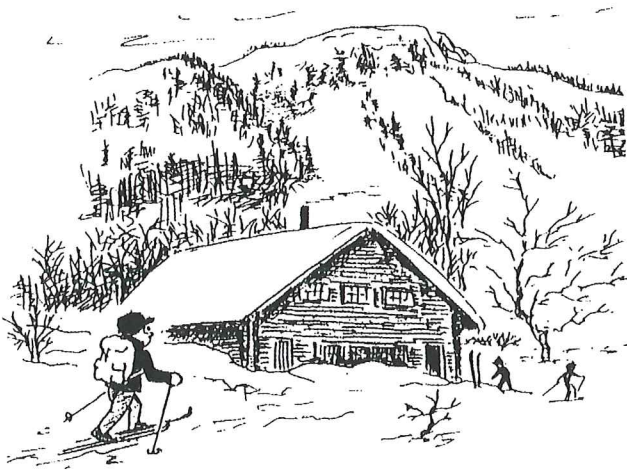
注 ★は現存しているもの

巻末資料3にはここで未掲載の山小屋もある(山崎英雄氏作成)

テイネ・パラダイス・ヒュッテ



再建された手稲パラダイスヒュッテ（1995年2月）



和田 晴 画



倒壊前年のテイネ・パラダイス・ヒュッテ（1994年）



手稲パラダイスヒュッテ

ヘルヴェチア・ヒュッテ



清水啓三（1904～46）画（山崎英雄氏蔵）

ヒュッテは綺麗な白樺林に立っている。－中略－ 子供の時に「ヘンゼルとグレーテル」を読むと、何か魔女の小さな家のようなものを思い浮かべる。そこでの一番近い隣人は森の熊など動物たちなのである。最初の頃の熱心な客の一人、東京の絵画専門学校の清水という学生もヒュッテの風景をそのように見たのだった。彼は陽光を浴びた冬の絵の中で、ヒュッテの周りの人々に加えて、穏やかに楽しげに踊っているかに見える熊たちを描きこんだのである。

（アーノルド・グブラー著「日本に旅した者の体験と思い出」、吉田恵治氏訳）



建設から60年経って老朽化したヒュッテは、
1985（昭和60）年山の会会員の手により建設当時の姿に蘇えた。

空 沼 小 屋



5月の万計沼に映える空沼小屋。老朽化したが歴史を背に静かなたたずまいである。



老朽化が進む空沼小屋、早急に修理が望まれる。

奥手稲山の家



玄関にかかる表札
1978年に卒部したワン
ダーフォーゲル部員の
手作りの記念品



1987年 3月 星の夜



小屋の周辺に設置
された指導標

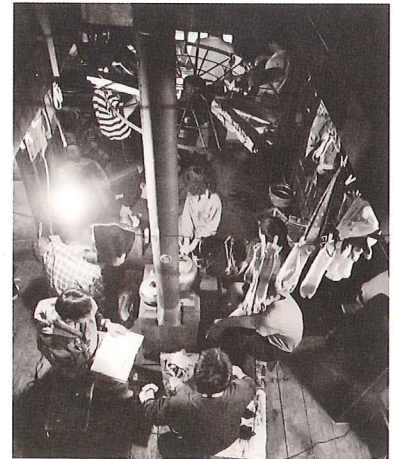


2004年 4月 春の朝

無意根小屋



紅葉にうまる無意根小屋（1989年10月）



ランプの灯のもとで



大勢の山スキー部員とOBが無意根小屋の還暦を祝った（1991年5月）

札幌附近のコーススー

(改訂版)



—— 指定コース
—— 右回りコース
—— 左回りコース

—— 下回りコース

五万分地形図参照



(昭和十一年一月一日発行) 北大コース編

はじめに

北海道大学は、札幌近郊に手稲パラダイスヒュッテ（旧テイネ・パラダイス・ヒュッテ）、ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋、奥手稲山の家、無意根小屋）の5棟の山小屋を所有しています。これらの山小屋は、山岳系クラブの活動や学生・教職員の研修、レクリエーションに活用されるとともに、市民の皆さんにもご利用いただいています。このように多くの山小屋を有する大学は他になく、北の大地に根ざす本学のオリジナリティー溢れる貴重な資産です。

大正末期から昭和初期にかけて建設されたこれらの建物は、我が国で最初の本格的スイス式ヒュッテで、北海道の貴重な建築遺産でもあります。山小屋は、本学の特色でもあるフロンティア精神を育み、自然をフィールドとする科学や文化を育ててきました。これからも、札幌近郊の自然を足がかりに世界へ羽ばたくベースキャンプとして、多くの人々に活用してもらいたいものです。

本学の山小屋の歴史は、約100年前の1908（明治41）年に予科ドイツ語教師として赴任したハンス・コーラー先生が学生にスキーの存在を教えたのに端を発しています。1920年代のはじめ、医学部教授となった大野精七先生・山崎春雄先生、予科ドイツ語教師として赴任したスイス山岳会員のアーノルド・グブラー先生、スイスの建築家マックス・ヒンデル氏が札幌で会遇し、山とスキーを介して交流を深めました。先生方は、ドイツ留学中に体験したヒュッテンレーベン（Hüttenleben、山小屋生活）やスキーツアーの楽しさを学生や市民に広めるべく、定山溪を中心としたHütten kette（山小屋の鎖）を構想し、学生たちの協力を得て実現しました。テイネ・パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋の3棟は、ハンス・コーラー先生の義兄であり、札幌の北星女学校教師館や函館のトラピスチヌ修道院などを設計したことで知られるヒンデル氏の設計によるもので、日本の近代建築史においても貴重な建造物です。

1928年には、テイネ・パラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテに秩父宮殿下が宿泊され、大野・山崎両先生やスキー部員、山岳部員たちの案内で山スキーやヒュッテンレーベンを楽しまれました。宮様は大野先生らの構想に賛同され、自ら秩父宮小屋（現在の空沼小屋）を建てられました。その流れは、現在も続く宮様スキー大会、大倉シャンツェの建設、冬季オリンピック札幌大会（1972年）などにつながっています。また、山小屋で育った若者たちは日本スキー界の指導者や日本最初の冬季オリンピック選手（1928年第2回大会）、世界最初の8000m峰冬季初登頂隊員（ダウラギリ峰、ネパール）として活躍しています。

札幌周辺では、約25棟の山小屋が建設され、本学所有の5棟を含め、10棟が今も健在です。しかし、残念ながら近年は、これらの山小屋の存在や歴史、自然に抱かれたヒュッテンレーベンの楽しさなどが十分に継承されていない状況にあります。

北海道大学創基130周年記念事業として開催する本総合博物館企画展示は、本学の特色ある資産である山小屋の歴史・価値・魅力を多くの方々に知っていただき、自然への興味や人格形成など、様々な形で山小屋の有効な活用を促進することを意図しています。

青少年の野外活動など、広く市民の皆さんにもさらに「北大の山小屋」を利用していただく契機となれば幸いです。

－山は厳父 小屋は慈母－

未来に引き継ごう 北大の山小屋

も く じ

はじめに

第1章 北大におけるスキー登山の歴史（大正から昭和初期まで）	5
1. スキーの渡来と普及	5
2. スキー登山の発展と山小屋の建設	7
3. 山小屋の建設に貢献した人々	10
（1）ハンス・コーラー先生	10
（2）大野精七先生	11
（3）山崎春雄先生	12
（4）秩父宮雍仁殿下	14
（5）マックス・ヒンデル氏	15
（6）アーノルド・グブラー先生	16

第2章 北海道大学の山小屋	20
1. 定山渓を中心としたHütten Kette構想	20
2. 秩父宮殿下と山小屋・札幌オリンピック・宮様スキー大会	22
3. テイネ・パラダイス・ヒュッテ	24
4. ヘルヴェチア・ヒュッテ	30
5. 空沼小屋	35
6. 奥手稲山の家	39
7. 無意根小屋	44

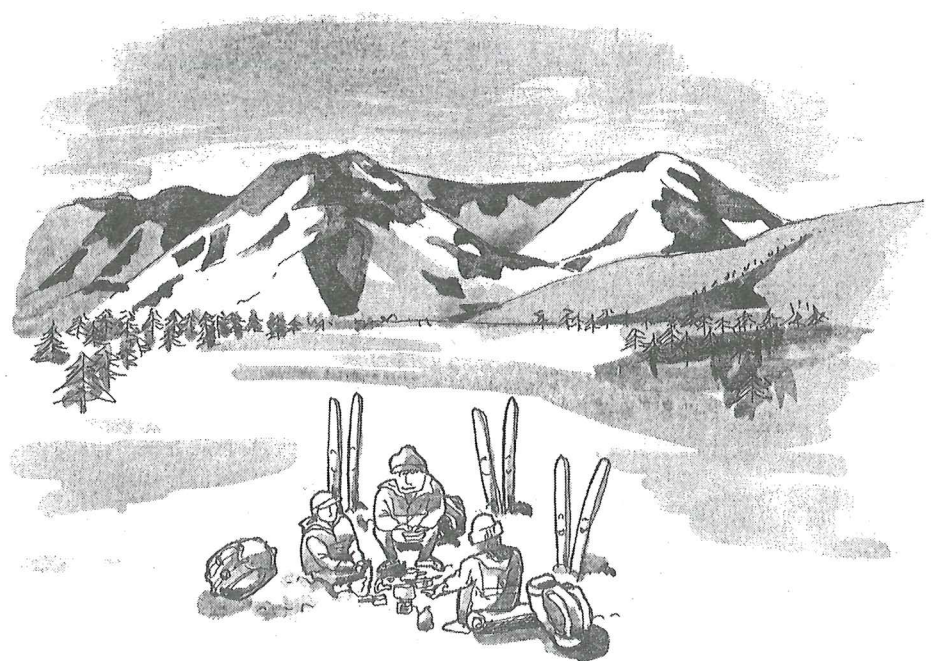
第3章 山小屋とその周辺の登山とスキーコース	48
1. 手稲パラダイスヒュッテと周辺のコース	48
2. ヘルヴェチア・ヒュッテ	51
3. 空沼小屋	53
4. 奥手稲山の家と周辺のコース	55
5. 無意根小屋と周辺のコース	57

第4章 各クラブの歴史と現状	60
1. 北大スキー部と山スキー部（HUSV）	60
2. 北大山岳部（AACH）	62
3. 北大ワンダーフォーゲル部（HUWV）	64
4. 北大山岳館	68

資料編

1. 関連年表	69
2. 参考文献	73
3. 札幌周辺の山小屋一覧	81

あとがき	83
------	----



第1章 北大におけるスキー登山の歴史

(大正から昭和初期まで)

1. スキーの渡来と普及

日本にスキーがいつ導入されたかについては諸説がある。1895（明治28）年に松川敏胤大尉⁽¹⁾が北欧視察の折、スキーを持ち帰ったとか、1906（明治39）年に英国公使館付武官デルメーランド・キーフが北海道視察の際、月寒25連隊にスキーを寄贈したとか言われている。キーフは1909年まで駐勤し、月寒で将校にスキーを教えたという話もある。

スキー術を組織的・系統的に教えたという意味では、日清・日露の戦争に勝った日本の軍事視察のために、1910（明治43）年11月に来日したオーストリア陸軍参謀テオドル・エドレル・フォン・レルヒ少佐（Theodor Edler von Lerch、1869～1945）⁽²⁾が、翌年1月に高田の第13師団の将校14名にスキー講習を行ったのが、スキー導入の嚆矢と言える。レルヒ少佐は、山岳スキー術の創始者とも言うべきマチアス・ズダルスキー（M. Zdarsky）⁽³⁾の高弟であった。

1910（明治43）年、オーストリア人オゴン・フォン・クラッツァが秋田県小坂鉱山で3日間のスキー講習会を行い、その後山形県五色温泉でもスキーをしたという記録がある。⁽⁴⁾

北海道ではレルヒ少佐の講習会に先立ち、1909（明治42）年2月頃（？）に北大構内で初めてスキーが行われた。北大の予科ドイツ語教師ハンス・コーラー（Hans Koller）先生が、学生に紹介する目的で故国スイスから取り寄せたスキーをモデルにして学生がスキーを作り、これもコーラー先生が取り寄せたヘンリー・ヘーク（Henry Hoek）のスキー書“Der Schi”を参考にして練習したのが始まりであった。これが北大での最初のスキーイングであった。

昇進して中佐になったレルヒ中佐は、翌年2月旭川においても第7師団に講習をした。その時に習った月寒25連隊の将校から、前にコーラー先生から教わったヘークの本で悪戦苦闘していた学生6名が、月寒連隊で6日間の講習を受けた。学生達は講習が終わると、3月31日には藻岩山（531m）に北海道



1916（大正5年）年頃の北大スキー部のスキー大会、三角山付近、一本杖が多い。（北大スキー部班報Ⅰ、1941より）

初のスキー登山を試みた。これを契機に北大を中心にスキーが全道に急速に広まっていった。

1912（明治45）年6月、北大文武会に稲田昌植ら6名の月寒で講習を受けた先輩が中心となってスキー部を作った。初代スキー部長は予科の大井上義近教授であった。

1913（大正2）年2月11日、スキー部の稲田昌植ら8名が手稲山（1,024m）登山を行った。琴似から発寒の右股の小学校まで馬車で行き、午前10時半にそこから当時の夏道をスキーで出発した。標高400mの地点から吹雪かれて苦しんだが、午後2時半頂上に達した。4時間半での登頂は、シールのない時代の記録としては驚きである。これが北海道におけるスキーを利用した登山記録第1号である。帰途は登路を下り、琴似駅から登頂成功の電報を打った話は有名である。

1913（大正2）年12月31日、富士山登頂のために御殿場口の中畑を人夫3名と共に出発した北大スキー部の角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎は、零下9度5分の6合5勺の小屋で渋紙の寝袋に入って一泊、1914（大正3）年元旦の午後零時10分、頂上の野中至気象観測小屋に達した。3人の氏名と登頂の日時を記した板を壁に打ちつけて、零下17度の頂上を後にした。中畑の宿に帰り着いたのは午後八時半であった。宿には大井上スキー部長が待っており、お互いに成功を祝って感涙に咽んだ。満足の装

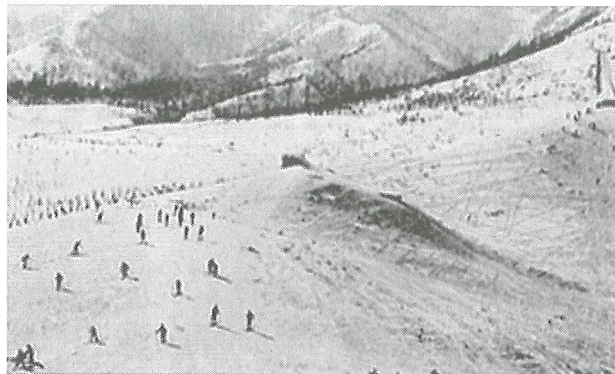
備のないこの時代に、わずか2日間で厳冬の富士山初登頂を成し遂げた快挙であった。

リリエンフェルト式アルペンスキーから始まった我が国のスキーであったが、1914（大正3）年、ノルウェーから帰朝した北大水産学科の遠藤吉三郎博士⁽⁵⁾が、フィットフェルト式締め具とともにノルウェー式スキー術を伝えた。当時の学生は書物で北欧のスキー術について多少の知識を持っていたが、実践は遠藤博士が先頭に立ってからであった。本場仕込みの軽快なノルウェースキー術を見せたことによって、学生達は憧れのクリスチャニアやテレマーク技術を本格的に研究し始めた。遠藤博士は「スキーは同じ斜面を何回も繰り返してすべるのが能ではない。山野を跋涉するのがスキーの醍醐味である」と主張、スキー部員と共に小樽付近の山々、毛無山から銀山あたりまでスキー行を楽しんだ。

遠藤博士のもう一つの貢献は、スキージャンプに対してであり、ジャンプ台がなければスキーのジャンプは進歩しないというのが先生の考えであった。このため先生とスキー部員で1917（大正6）年、小樽緑ヶ丘に18m級のジャンプ台を作り練習を行い、専らフォームを研究した。1923（大正12）年には我が国最初のジャンツェ「シルバージャンツェ」を三角山に造り、大矢敏範や木原均らを指導した。

1918（大正7）年、スキー部はノルウェースキーの技術的研究、それにアルペンスキー技術の長所を加味したスキー部独自のスキー術をまとめて「スキー術教程」（第1版）を刊行した。「スキー術教程」はその後2年ごとに改訂され、第4版まで刊行された。1919（大正8）年には遠藤吉三郎・木原均著「最新スキー術」が出版され、木原均博士⁽⁶⁾を始めとするスキージャンピングの組織的研究が始められた。1923（大正12）年には廣田戸七郎が「スキージャンピング」を刊行した。

1920（大正9）年頃には日本の各地でスキーが行われるようになり、日本体育協会は全国的なスキーの普及に対して全日本の競技会を主催することになった。しかし、距離競技もジャンプ競技も競技規則というものが無く、どうしていいやら分からないまま、その草案作りを北大スキー部に頼んできた。それより前、北大スキー部には国際スキー連



三角山山麓、札幌ジャンツェ付近、手前はアルファジャンツェ
（大正12年頃、北大スキー部70年史より）

盟（FIS）からいろいろ連絡が来ており、加納一郎⁽⁷⁾が中心になり国際協定を見ながらどうにか日本のスキー競技規定を作り上げた。

日本体育協会は、第1回の全日本スキー選手権大会を1923（大正12）年2月小樽で開催した。樺太を含む日本各地からスキーヤーが集まったのはこれが初めてであった。この時北海道以外の選手が履いていたスキーは、たいていアルペン式（リリエンフェルト式）であり、また会場の緑ヶ丘に設けられたジャンプ台を見てびっくりするという有様で、本州と北海道の違いがはっきりと現れていた。

日本体育協会のスキー大会は、その後も高田、大鰐、豊原（カラフト）と続いた。1925（大正14）年2月、青森県大鰐温泉でそれまでばらばらに活動しているスキー界の大同団結を目指して、全日本スキー連盟が創立された。各団体はこれに加盟することとし、連盟本部を東京に置き、事務所を札幌に置くことになった。北大スキー部関係では稲田昌植が初代会長、加納一郎、小川勝二、廣田戸七郎が常務委員となり、国際スキー連盟への加盟、大会規約の制定などに力を尽くした^{(8) (14)}。

レルヒ少佐の伝えたのは中欧に発達した山岳スキーだったので、柳沢秀雄や角倉邦彦博士らを中心にまず山岳スキーが盛んになった。それから後、毎年次々に新しい山がスキーで登頂されるようになった。すなわち1913（大正2）年に手稲山、1917年羊蹄山、1918年奥手稲、砥石山、1919年イワオ、ニセコ、チセヌプリの三山と百松沢山、1920年喜茂別岳、十勝岳、1921年昆布岳、無意根岳、余市岳、芦別岳、1922年にはついに北海道の最高峰旭岳と黒岳の初登

山に成功した。この時代に活躍した主な人たちは、六鹿一彦、福地義二郎、板倉勝宣、加納一郎、松川五郎、板橋敬一、後藤一雄らで、旭岳の初登山は板倉以下5名、黒岳の方はやはり板倉、加納、板橋の3名によってなされたものであった。



高根ヶ原より旭岳を望む、坂本直行画
(1926年6月18日、北大山岳部部報1号、1928より)

2. スキー登山の発展と山小屋の建設

登山小屋のない時代のスキー登山は主として山麓の造材小屋を根拠地として行われた。ノルウェースキー術が行われるようになった頃から山スキーも競技のほうも飛躍的に盛んになってきて、山岳スキーの基地としての山小屋が熱望されるようになり、ついに1926（大正15）年日本最初の本格的スイス式ヒュッテ、パラダイス・ヒュッテの実現となった。

1921（大正10）年にドイツ留学から帰国して北大医学部に赴任した山崎春雄教授、1924年に同じくドイツ留学から帰国して北大医学部に赴任した大野精七教授、スイス山岳会に所属する登山家の北大予科ドイツ語教師アーノルド・グブラー先生、ハンス・コーラー先生の義兄でスイス人の建築家マックス・ヒンデル氏らがたびたび会合し、スイスを語り、北海道を語り、スキーと山を語りしているうちに、札幌付近に山小屋を建設し、スキーツアーができる山小屋を造ろうという構想が盛り上がった。スキーツアーのためHütten Kette（ヒュッテン・ケッテ：山小屋の鎖）構想はこうして生まれた。それが最初に実現するのが、大野スキー部長が責任者となりスキー部員の手で、スキー部創立15周年記念として1926（大正15）年に手稲山に建設したティネ・パラ

ダイス・ヒュッテである。次いで1927（昭和2）年、両スイス人と山崎先生が、小樽内川上流にヘルヴェチア・ヒュッテを造る段取りになったのである。



パラダイス・ヒュッテ
(絵葉書、建設間もない頃、吉田恵治氏蔵)

1928（昭和3）年、北海道視察に来道された秩父宮殿下は、パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテを基地とするスキー登山を大野先生、スキー部と山岳部学生のご案内で挙行された。この旅行で山小屋生活を大変お気に入りに入られた宮様は、旅行中に大野先生が申し上げたスキーツアーの“山小屋の鎖”構想に共鳴されて、ご自身の山小屋建設をご下命になった。

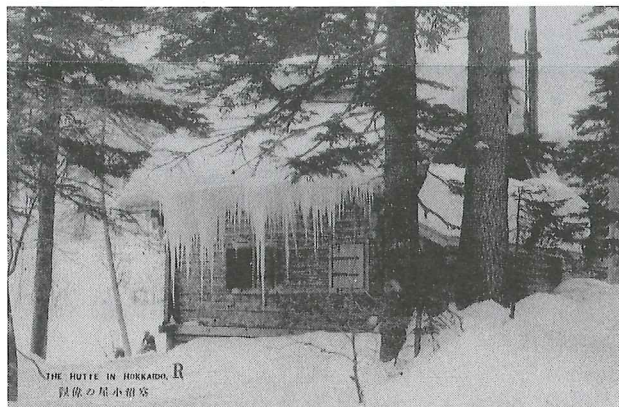
これが翌年ヒュッテにご宿泊になった高松宮殿下により、空沼小屋と命名された空沼岳中腹の万計沼の畔に建設されたヒュッテである。パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋の3つは、建設場所について大野、山崎、グブラーの先生方が相談して決め、ヒンデル氏が設計した。小屋



ヘルヴェチア・ヒュッテ
(絵葉書、建設間もない頃、吉田恵治氏蔵)

はいずれも丸太組のブロックヒュッテで、スイスの山小屋生活とスキーターの楽しさを知るヒンデル氏の設計である。

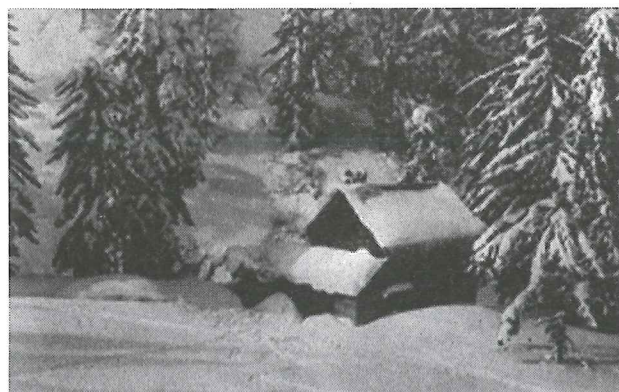
1930（昭和5）年、鉄道省（旧国鉄）札幌鉄道局は武居哲太郎局長⁽⁹⁾のもとで、奥手稲山ユートピアに本格的木造建築の営業用山小屋を建設した。



空沼小屋

（絵葉書、建設間もない頃、伊藤組土建株式会社蔵）

宿泊人数40～50人の大規模なものである。電話、屋外照明設備を備えており、旧国鉄初めての山小屋であった。武居は大野、山崎両先生と独逸学協会中学、第一高等学校、東京帝国大学の同窓生であり、札幌赴任後に彼らに小屋建設を薦められたものと思われる。



奥手稲山の家（札幌市写真帖、札幌市、1936年）

1931（昭和6）年スキー部創立20周年を記念して無意根山に建設されたスキー小屋も“山小屋の鎖”の一つである。この頃、資料1にあるように、北大の山小屋のほか、中山ヒュッテ（1928）、二股小屋（1928）、萬計小屋（1929）、朝里岳ヒュッテ（1930）、長門小屋（1931）、奥無意根小屋（1931）、右股小屋

（1932）、冷水小屋（1933）、東日ヒュッテ（1933）、白樺小屋（1933）、峠ノ小屋（1933）、春香山銀嶺荘（1934）、湯の澤小屋（1937）が相次いで建設され、大野先生や山崎先生たちが構想した定山溪を中心としたヒュッテの鎖が完成したのである。



無意根小屋

（絵葉書、建設間もない頃、吉田恵治氏蔵）

札幌付近に5つの山小屋が建設された時期は、北大スキー部の加納一郎、板橋敬一らによって我が国最初の月刊山岳雑誌「山とスキー」が刊行された時期と重なる（1921（大正10）年から9年間、100号を発刊）。この月刊誌は、スキー技術や競技の理論に多くのページを割いていたが、我が国の登山に対する貢献もきわめて大きく、榎有恒、松方三郎、大島亮吉なども常連の寄稿者であった。



山とスキー第1巻表紙

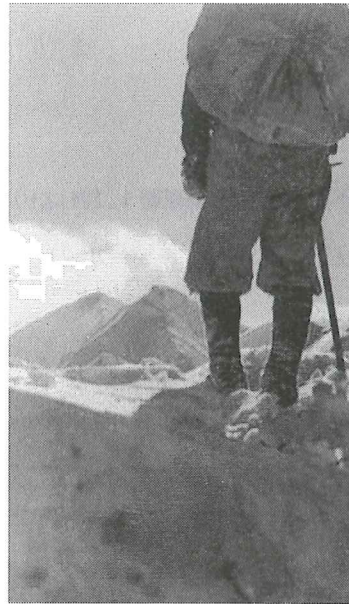
北海道のスキー登山が大きく飛躍するのも「山とスキー」の時期に当たる。山麓の造材小屋を根拠地として行われていたスキー登山は、野営の研究が進み、さらに夏スキーが盛んに使用されて、1923（大正12）年からはそれまでほとんど試みられなかった

4、5月頃の登山が盛んに行われるようになり、山岳縦走が行われて未踏の山が次々と登頂されていった。1923年4月下旬、松川五郎⁽¹⁰⁾のグループの無意根山から白井岳を皮切りに、5月には田口、小森、坂上の無意根山から余市岳、伊藤秀五郎らの暑寒別山群の縦走である。翌年5月には伊藤ら5名が、松山温泉から化雲岳を経て石狩岳に登ったが、吹雪のため頂上付近から追い返された。このスキー登山は失敗ではあったが、登山のスケールの大きさでは既に前時代をはるかに凌駕するものであった。

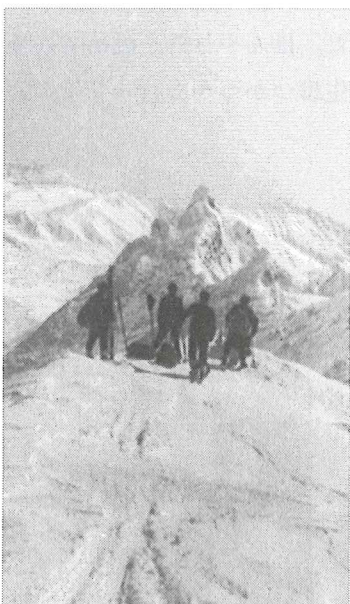
伊藤秀五郎⁽¹¹⁾が中心となってスキー部山班から分かれて山岳部が創立されたのは1926（大正15）年である。初代山岳部長は農学部教授の栃内吉彦先生であった。1928（昭和3）年2月に伊藤秀五郎ら6名の山岳部メンバーによって、数年来試みられながら達成することができなかった石狩岳の冬期スキー登山が成功し、北海道スキー登山史に一時期を画した。

石狩岳スキー登山成功以後は、山岳人の興味は夏冬共に日高山脈に集中されるようになった。その主役を担ったのが北大山岳部である。山岳部による日高山脈における冬期初登の主なもの、1929（昭和4）年幌尻岳、トッタベツ岳、1931年カムイエクウチカウシ岳、エサオマントッタベツ岳、1933年コイカクシュ札内岳、ヤオロマップ岳、1935年ルベシベ山、チロロ岳、1936年豊似岳、ピリカヌプリ、1938年神威岳などである。

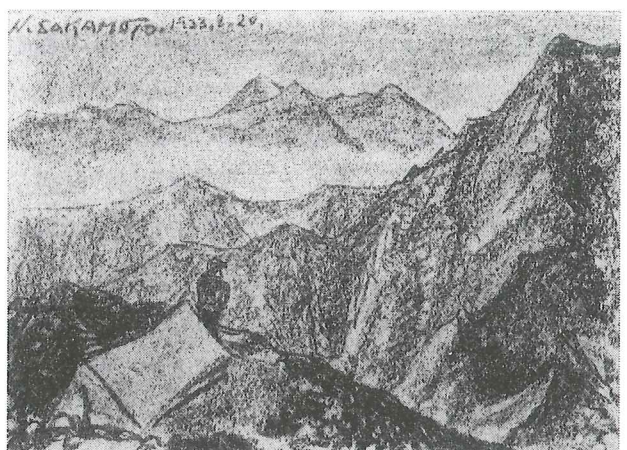
最後に残った日高山脈の盟主ペテガリ岳への冬期初登挑戦は、1937（昭和12）年から行われ、1940年には雪崩により山岳部学生8名の犠牲を出すという悲劇に遭ったが、ついに1943年1月今村昌耕、佐藤弘により登頂された。この年以降、第二次大戦のために学生の多くは戦場へ駆り出され、また物資不足のために活動は停滞し、本格的な登山活動は戦後まで待たねばならなかった。



ペテガリ岳冬期初登頂
（1943年1月5日、佐藤弘氏蔵）



トムラウシ遠望
（1927年3月、渡辺千尚氏撮影、北大山岳館蔵）



ペテガリ岳遠望
（1933年8月、坂本直行画、北大山岳部部報4号より）

3. 山小屋の建設に貢献した人々

(1) ハンス・コーラー先生

(Hans Koller, 1881~1925)



コーラー先生
(北大スキー部班報1、1941より)

1881 (明治14) 年10月4日 スイス、チューリッヒにて出生。

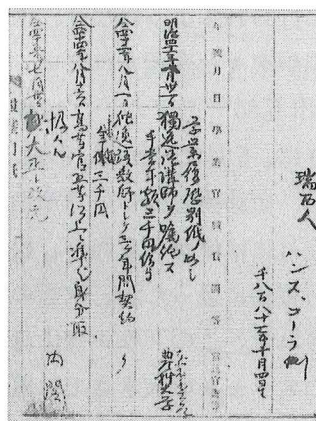
1904 (明治37) 年冬 チューリッヒ大学入学。

1908 (明治41) 年春 チューリッヒ大学卒業。同年7月31日、北海道大学予科にドイツ語教師として採用される。

1925年 (大正14) 年1月29日 札幌市にて逝去、43歳。

コーラー先生は、1908 (明治41) 年ドイツ語教師として北大へ赴任、以後1925年まで17年間予科で教鞭をとった。先生は、授業の中でお国自慢の一つとして語ったスキーの話に興味を示した学生たちにせがまれて、スキーと当時のスキー技術書であったヘンリー・ヘーク (H. Hoek) 著スキー (Der Schi) を、故国から取り寄せた⁽¹²⁾。1909 (明治42) 年の春のことであった。後になって分かったことだが、コーラー先生自身はスキーの経験がなく、故国ではただ見聞したに過ぎなかった。ところが探究心の旺盛な学生たちは、初めて見るスキーに熱中し、技術書と首っ引きで現在クラーク像が立っているあたりのスロープでスキーを試みたという。北大スキー部報には「それを試みたのは、初代全日本スキー連盟会長となった稲田昌植、宮部金吾博士の長男憲次、1914年に冬の富士スキー登山を行った角倉邦彦ら6人」と紹介され、スキーは1910 (明治43) 年頃、南3条通りの創成川畔の馬櫓屋に3台のスキーを新たに作らせた⁽¹³⁾とある。

コーラー先生は、学生がスキー部を創ってから



コーラー先生辞令
(北大附属図書館蔵)

スキーを履かなかった。しかし、1920 (大正9) 年12月、スキー部のニセコ青山温泉 (現在の昆布温泉) スキー合宿に初めて参加してからスキーに熱中しだした。クリスチャニアも出来るほど上達したという。しかし、1924 (大正13) 年12月スキー部の青山温泉合宿へ風邪を押して参加、そのためさらに体調が悪化して、翌年1月29日関係者に惜しまれながら逝去した。享年43歳という若さであった。

先生はその温容さとユーモアと優れた教授法とで学生に慕われ、亡くなられた後の2月4日付の北海タイムスに北大生の投書として次の一文が載せられている。「先生程日本の学生の性質を飲み込んでおられた外国人教師はいない。学生気質をあれ程理解されている人は、日本人の教授達にも珍しい。だから先生の授業は何時も愉快で愉快で堪らなかった。先生と生徒の気持ちが訳つたり (ママ) と合って、私達の国語が独逸語であるか日本語であるか、そんな事さえ忘れる程だった。ぼんやり外を眺めている生徒などがあると、先生はつかつかと行ってその窓をしめられた。」

(2) 大野精七先生 (1885~1982)



無意根小屋の油絵を背にした大野精七教授
(北大スキー部班報、1941より)

- 1885 (明治18) 年 8月17日 茨城県に生まれる。
- 1898 (明治31) ~1904 (明治37) 年 独逸学協会上学、第一高等学校、東京帝国大学医学部へ進み、
- 1912 (大正元) 年 卒業、直ちに東大助手となる。山際勝三郎教授の下で人口癌発生の研究にあたる。
- 1921 (大正10) 年 5月 北海道帝国大学医学部助教授に任官。
- 1921 (大正10) 年10月 ドイツ、フライブルグ大学病理学教室に留学。
- 1924 (大正13) 年 3月 帰国、前年 4月に開設された産婦人科主任教授として帰任。スキー部長となる。のち付属病院長、医学部長を勤めた。
- 1926 (大正15) 年~1938 (昭和13) 年 パラダイス・ヒュッテ・空沼小屋・無意根小屋の建設、宮様スキー大会の創設、第5回冬季オリンピック札幌大会招聘に尽力。
- 1948 (昭和23) 年 3月 北大定年退職、4月より道立女子医専に勤務、後同医専の札幌医科大学に昇格に伴い、初代学長に就任。
- 1972 (昭和47) 年 悲願の札幌オリンピック開催、オリンピック村名誉村長。
- 1982 (昭和57) 年 逝去、97歳。

大野先生は1921 (大正10) 年 5月に北大医学部教授に任官し、同年10月からドイツに留学した。先生は「寒くて雪の多い新任地札幌で暮らすためには、寒さを恐れず、むしろ雪に親しむべきであろう」と考えた。欧州がスキーの本場であると聞いていたが、それにはまず日本で手習いしよう」と、留学前に越後赤倉の東大スキー部合宿所で友人にスキーを習っ

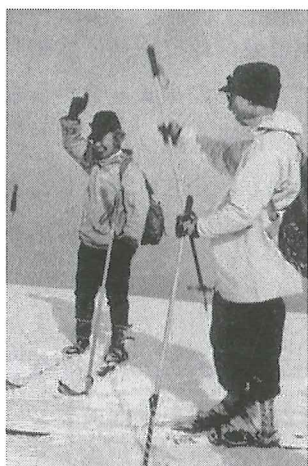
た。フライブルグ留学中はドイツスキークラブに入会するとともに、週末には友人たちとスキーツアーとヒュッテンレーベン (山小屋生活) を楽しんだ。先生は、「私は医者ですが、医者というものは病気を治すばかりが能じゃない。病気にかからぬ身体作り、これにはスキーがうってつけだ。フライブルグで学んだ一番の収穫はスキーでした」⁽¹⁵⁾と述べている。先生は、赴任先のスキー部がスキーの教程書をつくり、スキー競技や講習会などで活発に活動していることを知り、フライブルグのヒュッテからまだ見ぬスキー部学生たちに絵葉書を送ったりした。1924 (大正13) 年 3月に帰国し、北大に着任した先生は、10月には帰国を待ちかねていた人たちに第5代スキー部長に推された。

1926 (大正15) 年が北大創基50周年であり、またスキー部創立15周年にあたることから、その記念事業として大野先生は15周年記念部報や手紙にヒュッテを作ることを計画され、自らが建設委員長となった。予科のドイツ語教師アーノルド・グブラー先生から建設地などの助言をうけ、建築家のマックス・ヒンデル氏に設計を依頼し、1925 (大正15) 年 7月着工、建設途中で発生した多くの問題を学生と共に克服し、11月に見事完成した。このヒュッテはわが国初めてのスイス式登山小屋で、大野部長により「テイネ・パラダイス・ヒュッテ」と命名された。

1928 (昭和3) 年 2月には秩父宮殿下が御来道になり、パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテに御宿泊、ヒュッテ近くの山々に登られた。宮様はさらに青山温泉に3泊されてニセコのスキー登山を楽しまれた。大野先生はスキー部長として学生と共に随行した。この旅行の途中、大野先生から札幌近郊のスキーツアーのための「山小屋の鎖」構想に共鳴された宮様は、ご自身の山小屋建設を御下命になった。これが、翌年建設間もないヒュッテに御宿泊になった高松宮殿下により、空沼小屋と命名された空沼岳中腹の万計沼畔に建設されたヒュッテである。

宮様はまた大野先生に「冬季オリンピックは札幌で開くべきで、それには大型ジャンプ台が必要」と話された。これをきっかけとなり1928 (昭和3) 年、ノルウェーのヘルセット中尉の招聘と大倉シャ

ンツェの建設につながる。先生はヘルセット中尉の
 コルメンホール大会の話からヒントを得て、秩父
 宮、高松宮来道記念スキー大会（後の宮様スキー大
 会）を思い立ち、その運営母体として札幌スキー連
 盟を、当時の橋本正治札幌市長を会長に、1929（昭
 和4）年12月7日に創立した。1930（昭和5）年
 は、第1回宮様大会が開催された。

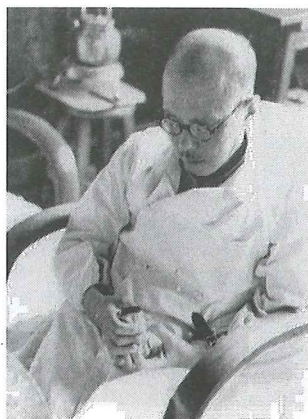


札幌岳の高松宮殿下と
 大野先生
 （スキー部70年史、1982より）

大野先生は1936（昭和11）年から全日本スキー連
 盟の副会長として競技スキーの発展に尽力され、つ
 いに第5回冬季オリンピック（1937（昭和12）年）
 の札幌大会が決定した。この大会は、日中戦争の泥
 沼化のために返上することになったが、当時大野
 先生らが熱心な活動をしていたことが基礎となり、
 1972（昭和47）年の札幌オリンピックが実現した。

大野先生は、子宮癌の研究などで国際的に知ら
 れ、産婦人科学の発達に貢献され、札幌医科大学の
 初代学長になるなど医学会をリードされ、昭和57年
 97歳で生涯を終えた。

（3）山崎春雄先生（1886～1961）



山崎春雄先生
 （札幌医科大学時代、山崎
 英雄氏提供）

1886（明治19）年2月4日 前橋市に生まれる。

1899年～1912年 独逸学協会中学、第一高等学校、
 東京帝国大学医学部に進み、卒業後解剖学教室に
 入る。

1913（大正2）年 熊本医学専門学校教授として赴
 任。狩猟を始める。

1919（大正8）年～1921（大正10）年 スイス、
 チューリッヒ大学に留学。

1921（大正10）年 北海道帝国大学医学部初代解剖
 学教授として赴任。

1927（昭和2）年 ヘルヴェチア・ヒュッテ建設に
 携わる。

1932（昭和6）年 スイスに留学、アルプス登山を
 行う。

1948（昭和23）年 北大医学部定年退職、創立され
 た札幌医科大学の解剖学教授となる。

1951（昭和26）年 白井小屋を設計。

1949（昭和24）年～1953（昭和28）年 日本山岳会
 北海道支部長。

1958（昭和33）年 札幌医科大学を退職。

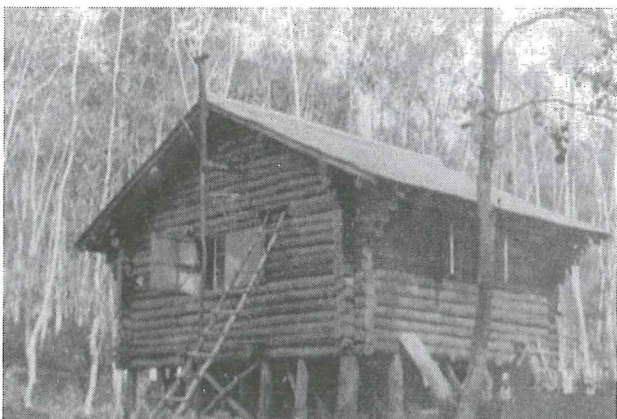
1961（昭和36）年10月21日 逝去、75歳。

先生は、学生時代より芸術に深い関心を持ち、当
 時の中央の文芸界諸氏との交流を持ち、特に中学か
 ら東大医学部まで同級であった木下杢太郎⁽¹⁶⁾との
 友情は極めて深いものがあつた。先生は文芸よりむ
 しろ絵画に興味を持ち、画壇では新進の画家として
 期待されていた。木下杢太郎が画家になることを断
 念したのは、先生が杢太郎より絵が上手であるにも
 拘らず、画家にならずに医学を志したことにあると
 いう。先生はまた、北原白秋や吉井勇や長田秀雄ら
 にとっても画才の所有者として多くの影響を与え
 た⁽¹⁷⁾。

先生は北海道に来るまで、スキーも山登りも経験なかったが、スキーや山登りに熱を上げるようになったのは、1921（大正10）年北大教授となって札幌へ赴任したのが動機で、北大スキー部山班の人々（松川五郎、植田 守、井田 清、伊藤秀五郎ら）からスキーを吹き込まれたのが、やみつきの始まりという。それからずっと、札幌付近、中央高地、日高の山などを、主として積雪期に、頼もしく気持ちの良い若者達と大いに歩いた⁽¹⁷⁾。この時期に交流した人々の中に、スイス人の登山家で北大予科ドイツ語教師アーノルド・グブラー先生、札幌在住の建築家マックス・ヒンデル氏がいる。松川五郎らの案内による小樽内川上流域の美林へのスキーツアーは、スイス人たちと共に小屋建設の夢を膨らませ、そしてついに1927（昭和2）年には彼らと共同でヘルヴェチア・ヒュッテを造った。

1928（昭和3）年冬の秩父宮殿下のスキーツアーでは佐藤昌介総長から準備委員長を仰せつかり、学生だけと行動したいという宮様のご要望を叶え、御満足のいくツアーができるように苦労した。以下はその時の一場面を先生独特の軽快な文章で綴ったものである⁽¹⁸⁾。文中に出てくる料理は、ヒンデル夫人と山崎夫人が学生に特訓したものである。

銭函駅に、殿下の一行よりも一足先に下山した宮家の事務官の前田伯爵が、まず出迎えの総長に丁寧な感謝の挨拶をされ、殿下が非常なご満足であったことを述べられた後に、総長の側にいた私に気づいた伯爵は、今度は私に向かって、



建設なったヘルヴェチア・ヒュッテ
（昭和2年、山崎英雄氏提供）

「山崎さん、今度は大変お世話になりました。学生の調理の上手なにはまったく感心しました。総長さんに先日札幌でご馳走になった豊平館の料理なんぞは、そう申しては何ですが学生の腕前には到底及びません。あの赤い色をした肉の料理……なんと申しましたかな。」

「グーラシュです。」

「そう、そう、そのグーラシュが大変結構なものでした。」

と言って加賀百万石の一門なる伯爵が、銭函峠の向こうの山小屋の一夜を、恋うるような眼付きと西洋風に言えば、口一杯水がたまる様な表情をされたのである。

勢い込んで話しかける貴公子と私の顔を半々に、呆然と立ち尽くした総長の顔を眺めた私も、旬日の苦心がいっぺんに吹き飛んだ感じを受けたのだった。

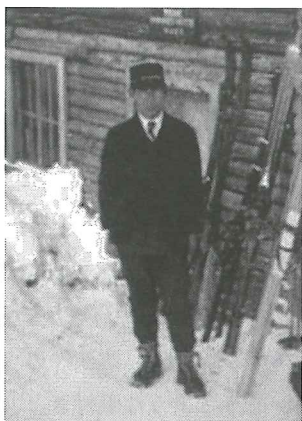
1931（昭和6）年3月にはグリンデルワルドに遊び、榎有恒と共にアイガー東尾根初登攀に加わった山案内人の一人、名ガイドのサミュエル・ブラバンドとマッターホルン、ユングフラウ、メンヒなどの峰々をむさぼるように登った。後日、ブラバンドがスイスから来日し、共にスイスアルプスの峰々を歩いた面々が集まり旧交を温めたが、山崎先生は26年ぶりの再会にことのほか嬉しそうであったという。

先生は地位や名声には恬淡としておられたが、同僚の先生に対する信望は厚く、1932（昭和7）年から1934年までと1939（昭和14）年から1941年までの2期を医学部長に推され、その他の期間も長く大学の評議員をしておられた。人嫌いで学会その他の集会にはほとんど顔を出した事がない先生であったが、山の連中は心おきなくお宅へ出入りした⁽¹⁷⁾。

山崎先生の狩猟や登山は、自然の中に身をおいて情趣を楽しむ態度であった。また専門の解剖学の分野においても、対象を素直に観察する姿勢であり、さらに先生の講義は見事な解剖図を自在に黒板に書き、学生に深い感銘を与えたものであった。

1949（昭和24）年から1953（昭和28）年には日本山岳会北海道支部長を務め、戦後低迷していた北海道山岳界の復興と発展に取り組んだ。

やすひと
(4) 秩父宮雍仁殿下 (1902~1953)



パラダイス・ヒュッテ前の
秩父宮殿下
(1928年2月、北大附属図書館蔵)

大正天皇の第2皇子、幼名は淳宮、陸軍少将、
1953(昭和28)年神奈川県藤沢市で逝去。

「スポーツの宮様」として親しまれ、スキー、ラ
グビーなどのスポーツの振興に尽くされ、秩父宮ラ
グビー場にその宮号を残している。楨有恒らとスイ
スアルプスを登られるなど「山の宮様」としても知
られた。

1928(昭和3)年2月、宮様は2週間の予定で北
海道視察に来道された。その間、1週間をスキー
ターに当てられる事になり、日程の前半に札幌付近
の山々、後半に青山温泉を中心とするニセコアン
スプリ連山を選ばれ、その間パラダイス、ヘルヴェ
チア両ヒュッテに各一泊された。このスキー登山の御
案内を松川五郎がリーダーでスキー部と山岳部の学
生が行なった。一行は、渡辺八郎御用掛、前田利男
宮内事務官、大野精七、新庄魏、木原均の先生方、
松川五郎スキー部OB、学生の小川玄一、小栗元二、
小森五作、伊藤秀五郎であった。

ヒュッテで若者に囲まれてすっかりくつろがれた
宮様は、大野先生が述べられる“山小屋の鎖”構想
に至極御同感で、殿下ご自身その何れか一つを建設
したいというご希望を洩らされた。これが同年12月
の俗に宮様ヒュッテと呼ばれる空沼小屋建設の動機
となった。

ヒュッテは殿下のご依頼によって、大野、山崎両
先生が中心となって候補地に空沼岳の中腹万計沼付
近を選び、設計は三度ヒンデル氏を煩わすことにな
った。ヘルヴェチア・ヒュッテをひと回り大きく
したといったものだが、経費も充分にかけ、用材そ
の他の手配も順調に運び、設計もまた極めて入念で

日付	姓 名	倶楽部 学校
25 II 1928	Yasuhito	
26 II 28		
"	Watanabe Hayiro	
"	Toshio Maeda	
"	H. Ohno	
"	H. Nihara	
"	J. Shingjo	
"	M. Ito	
"	Goro Matsumura	Nakamura
"	Gosaku Komori	A.A.C.H
"	Gorison Kobayashi	
"	M. Oguri	
"	G. Ogawa	
28-29	Jada, Tanaka	A.A.C.H.
"	Kennosuke Nagai	
"	Kiyoshi Jada	
"	Takashi Tabuchi	
"	Shuji Watanabe	

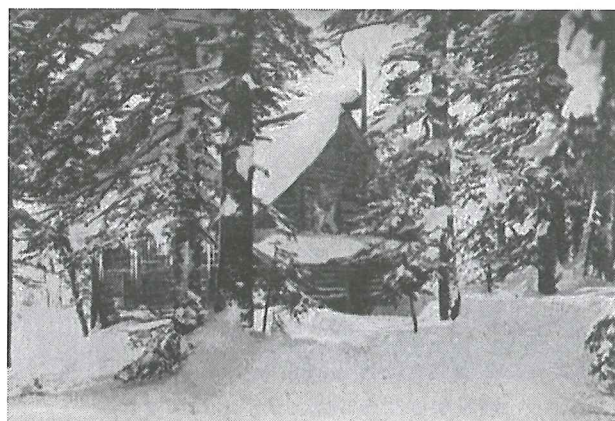
ヘルヴェチア・ヒュッテの第1号宿泊者名簿
(北大山岳館蔵)

最上段は宮様 (Yasuhito)、その下から渡辺八郎
御用係、前田利男宮内事務官、木原均、新庄魏、
伊藤秀五郎、松川五郎、小森五作、小林辰雄、小
栗元二、小川玄一の署名

精巧なことは前2者をはるかにしのぐものがある。
1928(昭和3)年9月28日着工、12月10日完成を見
た。

翌1929(昭和4)年1月22日、兄宮の造られた小
屋に高松宮殿下が3泊され、空沼岳、札幌岳にス
キー登山をされた。最後の夜、宮様は兄宮との打ち
合わせどおり宿泊者名簿に「空沼小屋」と署名され
た⁽¹⁹⁾。

宮様がスキー行を通して語られ残されたお言葉の
中に「将来日本でオリンピックを開催するとした



空沼小屋 (1929年1月、山とスキー96号)

ら、山が近い上、雪質に恵まれ、しかも大都会で大学もある札幌をおいて他にない。そのためにはオリンピック用のシャンツェが必要だ。良い場所を見つけ、設計をして送ってくれば、私が造れるようにお世話しよう」がある。

宮様の口ぞえにより大倉喜七郎男爵は、1929（昭和4）年ノルウェースキー界の重鎮でシャンツェ構築の世界的権威ヘルセツ中尉を招聘、大倉シャンツェを建設した。北海道のスキーヤー達は、ヘルセツ中尉から技術の手ほどきを受け、施設や競技運営のイロハは勿論のこと、スキーの何たるかを学び取る絶好の機会となった。

（5）マックス・ルドルフ・ヒンデル氏
（Max Rudolf Hinder, 1887-1963）



マックス・ヒンデル氏、1939年
8月ドイツ帰国を前にヘルヴェ
チア・ヒュッテを訪問した
（山崎英雄氏提供）

1887（明治20）年1月20日 スイス、フルンテルン
自治区に生まれる。

1903（明治36）年 16歳で下級ギムナジウム卒業、
以後4年間チューリッヒなどの設計事務所で製図訓練
を受け、さらにヨーロッパ各地の建築事務所で修行。

1916（大正5）年 スイスに設計事務所を開設。

1924（大正14）年3月 ハンス・コーラー夫婦の勧
めで来札。

1926（昭和元）～1929（昭和3）年 パラダイス・
ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋を
設計。

1927（昭和2）年10月 横浜に移転、設計事務所を
開設。

1939（昭和14）年 来札し、山崎春雄夫婦らと最後
のヘルヴェチア・ヒュッテ訪問。

1940（昭和15）年 ドイツへ帰国。

1963（昭和38）年 ドイツで逝去、76歳。



ヘルヴェチア・ヒュッテ、坂本直行氏 1929年
（札幌第二中学旅行山岳部ヌタック第2号、1930より）

マックス・ヒンデル氏は、1924（大正14）年妹
（コーラー先生夫人）とコーラー先生の勧めにより
北海道に永住する決心でアニー夫人を伴って来日
し、札幌に建築設計事務所を開いた。しかし1924
（大正14）年のコーラー先生の死去に伴い、1927（昭
和2）年、わずか3年半で横浜に事務所を移転し
た。札幌滞在期間中、柳 壮一、山崎春雄、大野精
七、アーノルド・グブラーらの北大教授達と交流し、
精力的な設計活動を行った。札幌市内では、札幌藤
高等女学校、同寄宿舎、北星女学校、同女教師館、
同寄宿舎、トラピスチヌス修道院、各地教会、個
人住宅などを設計した。1926～28年にパラダイス・
ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテ、宮様ヒュッテ
（空沼小屋）を設計した。

パラダイス・ヒュッテ建設から始まったヒンデル
氏の一連のヒュッテ作品は、いずれも札幌に現存し
ており、その後の全国のスキーヒュッテ建設に大き
な影響を与えた⁽²⁰⁾。



ヘルヴェチア・ヒュッテ建設中のヒンデルさん（右）と
ワーゼル先生（1927年、山崎英雄氏提供）

ヒンデル夫婦と深い交流のあった山崎春雄先生は、ヒンデル氏とヘルヴェチア・ヒュッテについて次のように回顧している⁽²¹⁾。

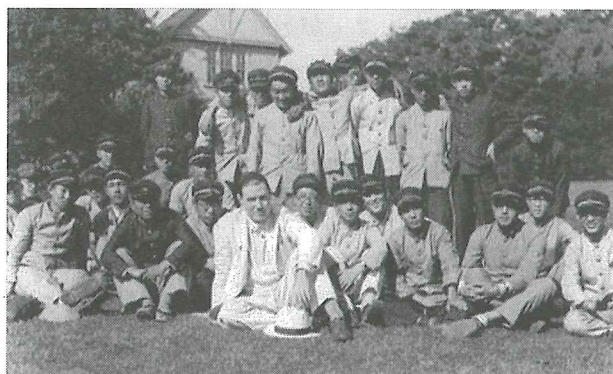
ヒンデル君は昨年10月に（註：1927年10月）札幌を去って横浜に移住された。同君のいわゆる故郷の第一歩を踏み出されたのである。ヘルヴェチア・ヒュッテは同君が北海道に残した最後の作品となった次第である。欧州では一流の建築家として知られ、日本でもたくさんの大建築を作った同君が、小さな丸木小屋の一つを建てることは我々が小さな木箱一つ作るよりも無雑作なことであつたろう。しかも我々はそこに同君の山の自然に対する思慕の情の底知れぬ深さと尽きぬ熱を見ることができた。ヒンデル君はウィーンの大銀行を建て、サンモリッツの大ホテルを建て、函館のトラピスト修道院、札幌のフランチェスカーネルの修道院、東京の上智大学、日本全国の旧教の大建築を一人で建てんとしている。ヒンデル君の足跡を印する所に魔術の如くに、その国その町の真の文化の宮殿が出来て行く。しかもヒンデル君は、王宮を建てるよりも1ヘルヴェチア・ヒュッテの建設が自分には深い喜悦であつたといっている。ヘルヴェチア・ヒュッテはヒンデル君の心血を注いだ「建築」のうちでおそらく同君が第一に指を屈するものではないかと自分は思っている。

ヒンデル氏が最後にヘルヴェチア・ヒュッテを訪問した時（註：1939年夏）、中学4年生だった山崎英雄氏（春雄の三男、元札幌大教授）は、その時のことを次のように回想している⁽²²⁾。

ヒンデルさんのことで忘れられないのは、第二次大戦の始めに丁度札幌に来ていた彼が、ドイツ宣戦の知らせを聞いて急に帰国の決心をし、父との別れともう一度小屋を見たいとの希望から、私の家族と共に、小屋に一泊したときのことです。（中略）夕方銭函駅のホームで別れたのですが、彼がナチス式に右手を上げて、ちょっと寂しげに去っていった姿を昨日のように鮮明に記憶しています。

（6）アーノルド・グブラー先生

（Arnold Gubler、1897～1983）



グブラー先生と予科生たち、北大植物園にて
（北大附属図書館蔵）

1897（明治30）年6月25日 スイス、チューリッヒ州ペフヒコン郡に生まれる。

1917（大正6）年10月 チューリッヒ大学に入学。

1922（大正11）年8月 チューリッヒ大学にてドクトルの学位を修得。

1923（大正12）年3月 来日し、6月大阪高等学校にて代理教授、7月 福島高等商業学校教授となる。

1925（大正14）年8月 北海道帝国大学予科ドイツ語教師となる。

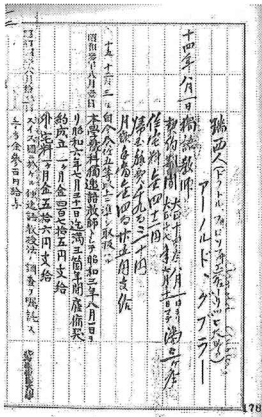
1932（昭和7）年7月 帰国、チューリッヒに住む。

1983（昭和58）年12月15日 逝去、86歳。北大山の会名誉会員。

子供の頃から極東、特に日本に強い関心を持っていたグブラー先生は、ジュネーブ大学で学位取得後、マルセイユから日本郵船「榛名号」に乗船、1923（大正12）年6月神戸に上陸した。来日後、大阪と福島で教鞭をとっていたが、1925（昭和元）年ハンス・コーラー先生死去に伴い、その後任として北大に招聘され、予科ドイツ語教師となった。剛健質朴な典型的なスイス人で、六尺豊かな頑丈な体つきであったが、予科の悪童連からスイスの恋歌を歌ってくれと攻められて顔を赤らめている人であった⁽²³⁾。

スイス山岳会に所属する登山家であった先生は、スキー部、山岳部の学生たちと山行を共にし、ことに小樽内川上流から朝里岳山麓にかけての針葉樹林と白樺の美林とそれに続く白い峰々を賛美した。北海道ばかりではなく、休暇を利用して日本全国、千島まで精力的に旅行した。例えば、1928（昭和3）年の記録を見ると、春は福島・吾妻地方をスキー旅

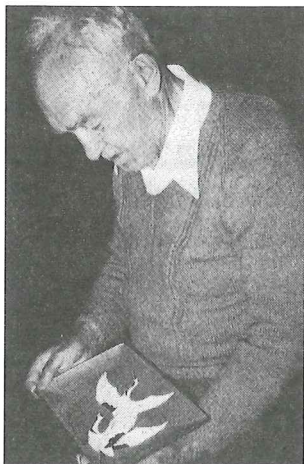
行、その後東京、夏は南千島、羅臼、根室、北アルプス、冬には台湾へ旅行している。あまり歩き廻ったので国際情勢が悪くなってからあらぬ嫌疑を受けることになり、これが契機で帰国されることになったのは気の毒なことであった。



アーノルド・グブラー先生の辞令
(北大附属図書館蔵)

先生は、パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテ、空沼小屋の建設のいずれにも関わっているが、中でもヘルヴェチア・ヒュッテは、小樽内川上流の美林を愛して自らの意思で作ったものであるだけに、愛着もひとしおだった様である。週末になるとヒュッテへ行き、外壁の修理や薪作りをコツコツとしておられたという。山岳部創立時の良き指導者の一人であり、山岳部の呼称A. A. C. H (Academic Alpine Club of Hokkaido) は先生の助言により命名されたものである。

先生は戦争中の1944 (昭和19) 年スイス、ベルンの出版社より日本滞在中の旅行や登山の体験を綴った著書⁽²⁴⁾を刊行された。戦争中に出版されたこの著書は、懐かしい日々を過ごした日本が世界の大国



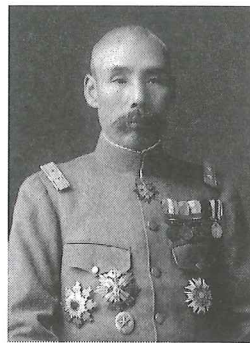
山岳部OBから贈られた陶磁器を見る晩年のグブラー先生
(1982年、和久田弘一氏撮影)

相手に苦戦中なのを見かね、自分が受けた好ましい印象など欧米と異なる日本の一面を世間に正しく伝えたいと考えから出版されたものである。

戦後、山岳部OBがチューリッヒの先生を訪問したり、先生が観光団を率いて日本を訪問したり、札幌の山崎春雄未亡人を訪問したりと昔の山仲間、教え子たちと交流した。

引用文献及び人名

(1) 松川敏胤大尉 (1859～1928)



松川大尉
(吉田恵治氏提供)

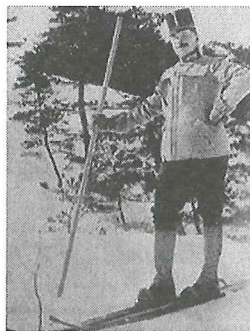
スキー部OB松川五郎の父。

陸士5期/陸大3期、仙台市土樋出身。1893 (明治26)～1895年ドイツ国留学。帰国の際、スカンジナビヤ製スキーを持ち帰る。

明治37～8年の日露戦争時、陸軍大佐、少将で満州総司令部参謀、遼陽、黒溝台、奉天等の戦闘に参加、大山巖元帥、児玉源太郎大将の下で活躍。大正6年朝鮮軍司令官、7年陸軍大将。

(2) テオドル・エドレル・フォン・レルヒ少佐

(1869～1945、Theodor Edler von Lerch)



ハンガリー生まれ、20歳で士官学校へ入学、ウィーン参謀学校を卒業し、軍人となる。34歳のとき、アルペンスキー術の創始者ツダルスキーからスキー術を教わる。

1910 (明治43) 年、オーストリア軍参謀として軍事研究が目的で来日した。

(3) マチアス・ズダルスキー (1856～1940、M. Zdarsky)



中浦皓至の著書⁽²⁵⁾より転載

オーストリア人、チェコの粉屋の息子。ウィーンの教員養成所を卒業して、小・中学校の体操教師をしていたが、34歳でリエンフェルトに棲み付き、アルペンスキー技術を開発。スプリング式金属締具 (リエンフェルト式) を考案、シュテムボーゲンによる滑降技術を確立した。その後スキーに半生を捧げて84歳で永眠した。

(4) 大野精七 「北海道のスキーと共に」 私家本 (1973)

(5) 遠藤吉三郎 (1874~1921)

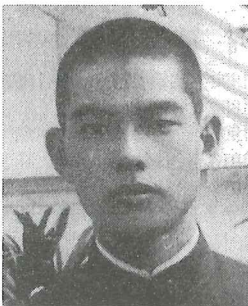


北大時代

(北大附属図書館蔵)

海産植物学、藻類学者、東京帝国大学理学部卒、北海道帝国大学教授。ノルウェースキーとその理論を持ち帰り、1本杖から両杖へと変化するきっかけを作った。両杖スキーの輸入により、距離競技、ジャンプ競技が発展した。

(6) 木原 均 (1893~1986)



学生時代の木原均

(中浦皓至の著書⁽²⁶⁾より転載)

コムギのキハラとして世界的に知られる遺伝学者。京都大学教授、文化勲章受賞(1948)、文化功労者(1951)。

1912(大正1)年から1920(大正9)年まで北大に在籍。北大スキー部初期の部員で競技スキーの研究と発展に尽くした。

1955(昭和30)年、京都大学カラコルム・ヒンズークシュ学術

探検隊長、1964(昭和39)年、第9回オリンピック冬季競技大会および1964年ユニバーシヤード冬季競技大会に団長として参加。

(7) 加納一郎 (1898~1977)



加納一郎著

「わが雪と氷の回想」

1969より転載

大阪生まれ、京都一中時代から山に親しむ。北大に進んでからは登山とスキーに打ち込み、板倉勝宣らと雑誌「山とスキー」を創刊し、一時期を画す。北大卒業後、北海道庁、朝日新聞、農林省林業試験場に勤務する傍ら、RCC同人として活躍。極地探検・雪と氷の研究、雑誌「ケルン」、「探検」などの編集に携わる。我が国探検ジャーナリス

トの草分けであり、第一人者。著書に「氷と雪」、「極地を探る人々」、「世界最悪の旅」、「極地探検」、「北海道の山とスキーの旅」、「我が雪と氷の回想」など多数。

(8) 加納一郎 「我が雪と氷の回想」朝日新聞社(1969)

(9) 武居哲太郎氏 (1883~1940)



東京鉄道局教習所時代
(1936年)(武居哲太郎
遺稿集、(1941)より)

長野県生まれ、東京帝国大学法科大学卒業、鉄道省に入り、1929~1932札幌鉄道局長、この間に奥手稲山の家の建設責任者、小屋開きにも出席、後に東京鉄道局教習所長として教育に情熱を傾け、「国鉄が生んだ偉大な教育者」として後世にその名を残した。

(10) 松川五郎 (1897~1977)

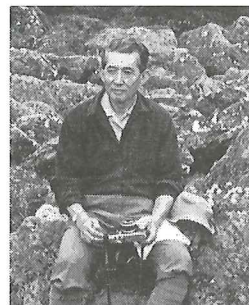


松川五郎

(吉田恵治氏提供)

松川敏胤の5男、1925(大正14)年北大農学部卒。加納一郎らと数々の山スキー初登頂記録を樹てる。1928(昭和3)年宮城県農業学校勤務時代に秩父宮殿下パラダイス、ヘルヴェチア両ヒュッテご宿泊の際、隊長を務める。北海道草地酪農の先駆者。北大山の会会員。

(11) 伊藤秀五郎 (1905~1976)



1968年8月トムラウシ付近にて
伊藤秀五郎さん最後の
山行(野田四郎氏提供)

1929(昭和4)年北大農学部卒業、米国ペンシルベニア大学へ留学。1934(昭和9)年北大講師、1940(昭和15)年北大予科教授、終戦後、中日新聞論説委員、才能教育研究会理事長、北海道学芸大学教授、北海道教育長、北海道教育研究所長、札幌医科大学教授を歴任。北大在学中雑誌「山とスキー」の編集に参画、1926(大正15)年北大

山岳部創立に尽力し、大正末期から昭和初期にかけて、北海道、北千島の山々に先駆的登山をした。麗筆家として知られ、著書に、「詩集山の風物詩」、「詩集風景を歩む」、「北の山」、「クラーク博士と札幌農学校」、「北海道の山旅」、「草原随想」など、他に多数の雑誌への寄稿。北大山の会会員。

(12) 中野皓至 「日本のスキー、もうひとつの源流(明治45年北海道)」北大図書刊行会(1999)

(13) 稲田昌植 「北大スキー部創立当時の回顧」北大スキー部15周年記念誌(1926)

(14) 大野精七 「北海道のスキーと共に」私家本(1973)

(15) 北大スキー部OB会、北海道大学スキー部七十年史、1982

(16) 木下杢太郎 (1885～1945)

本名太田正雄、静岡県伊東市生まれ。詩人、劇作家、医学者。東大医学部卒、パリのパスツール研究所に学んだ後、東北帝国大学、東京帝国大学教授を歴任。新詩社に加わり、明星、スバルなどの雑誌に耽美的かつ異国趣味豊かな作品を発表。キリシタン研究者としても知られる。

(17) 伊藤秀五郎、藤島敏男 「追悼」 山岳第57年 日本山岳会 (1962)

(18) 山崎春雄 「ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下」 山岳第48年 日本山岳会 (1953)

(19) 「高松宮日記第1巻」 中央公論社 (1996)

(20) 角 幸博 「マックス・ヒンデルと田上義也一大正・昭和前期の北海道建築界と建築に関する研究」 学位論文 (1996)

(21) 山崎春雄 「ヘルヴェチア・ヒュッテの建設」 山とスキー 78、79号 (1928)

(22) 山崎英雄 「ヘルヴェチア・ヒュッテの覚え書きー思いだすまにー」 北大山の会会報92、93号 (2002)

(23) 相川 修 「ヘルヴェチア・ヒュッテを語る」 アルプ50号 (1962年第4号)

(24) Erlebnisse und Gedanken eines Japanfahren
(日本を旅した者の体験と思い出)
1944 (昭和19) 年スイスで発行。現在北大農学部OB吉田恵治氏により翻訳中。

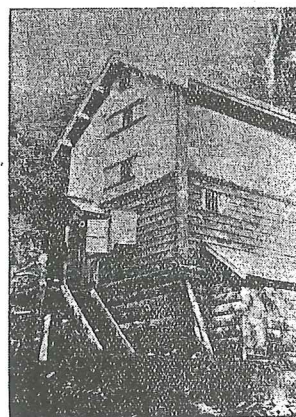
(25) 中浦皓至 「スキー技術の歴史と系統ーターンへの挑戦」 北大図書刊行会 (1991)

(26) 中浦皓至 「日本におけるジャンプスキーの発達の関する歴史的研究ー黎明期における北大スキー部の活動を中心に」 北大大学院教育学研究科紀要第89号 (2003)

成完屋小山各に心中を泉温溪山定

▲札幌岳へは冷水小屋

定山溪驛より約十軒冷水澤（指導標あり）を溯り小屋に著す。



冷水小屋使用料

一人一日に付
宿泊定員三十名

(冬) 自十一月一日 休憩券 金二十五銭
至五月卅一日 宿泊券 金五十銭

(夏) 自六月一日 休憩券 金十五銭
至十月卅一日 宿泊券 金三十銭

▲冷水小屋使用券發賣驛—豊平驛—瀧の澤驛—定山溪驛

詳細は—
定山溪鐵道電話八〇九番
豊平驛電話二七七八番

北大スキー部部報 2 (1933) より

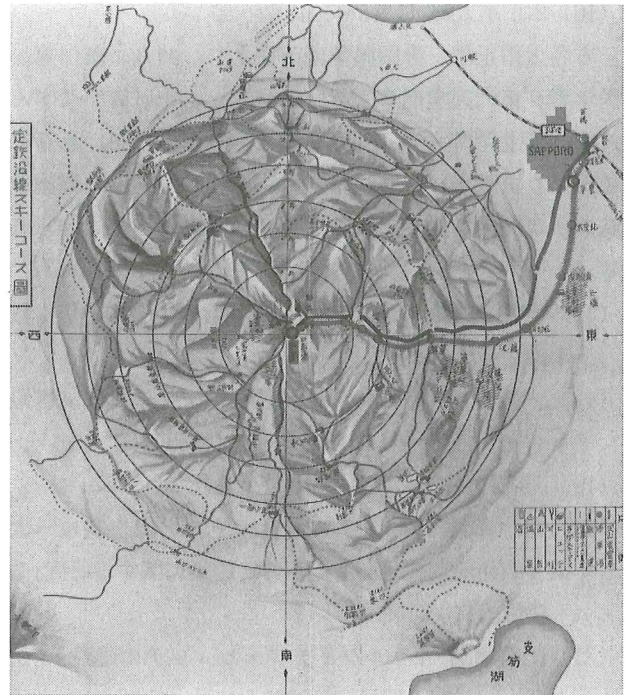
第2章 北海道大学の山小屋

1. 定山溪を中心としたHütten Kette構想

大野精七先生は、1921（大正10）年北大医学部教授候補者としてドイツ留学を命じられると、「雪国へ行くのにスキーくらいはできなくては」と、出発を前に新潟県赤倉温泉の東大スキー部合宿所で1週間のスキー練習を行った⁽¹⁾。先生は、南ドイツのスイスに近いフライブルグ大学に赴いたが、当時神経衰弱になる留学生が多かったため、その予防のために冬になるとスキーを始めた⁽²⁾。それからスキーが面白くなり、休日ごとに郊外のシュワルツワルトの山々でHüttenleben（山小屋生活）やスキーツアーを楽しんだ。そこで人々が家族連れでスキーを楽しむ光景を目の当たりにし、新任地の札幌でもこうありたいと思った。その体験から、先生は北海道の長く寒い冬を克服するためには、冬のスポーツ、スキーを普及させるのが重要と考えた。1924（大正13）年に帰国し、4月に北大に着任した先生は、先生の帰国を心待ちにしていたスキー部関係者からスキー部長就任を懇請された。先生は辞退されたが、親友の山崎先生の奨めもあり、11月に第5代部長に就任した。同年3月にはスイスの建築家マックス・ヒンデル氏も奥さんとともに札幌に移り住んでいた。また、翌年9月にはスイス山岳会員でもあるグブラー先生が予科ドイツ語教師として北大に赴任してきた。このように、山やスキーを愛する人たちが札幌に集まり、山やスキーを語るなかで、温泉地定山溪の周辺の山々にヒュッテを鎖のように点々と建設し、それらを泊まり歩いてスキーツアーを楽しむHütten Kette（ヒュッテの鎖）構想が生まれてきた。

スキー部創立15周年の1926（大正15）年、市民を森の中での山小屋生活や白銀の世界でのスキーツアーに誘う“ヒュッテの鎖”計画の手始めとして、手稲山の中腹にヒュッテを建設することになった。こうして我が国で最初の本格的スイス式スキーヒュッテであるティネ・パラダイス・ヒュッテが1926（昭和2）年11月2日に完成した。

翌年にはヒンデル氏、グブラー先生、山崎先生を中心にヘルヴェチア・ヒュッテが建てられ、さらに、



定山溪を中心としたスキーコース
（定山溪鉄道発行パンフレット、高澤光雄氏蔵より）

1928（昭和3）年12月には3番目の秩父宮ヒュッテ（空沼ヒュッテ）が空沼岳の空沼（萬計沼）のほとりに完成した。その後、“ヒュッテの鎖”は急速に進展し、1932年に定山溪鉄道株式会社（現在の株式会社じょうてつ）によって発行された「定山溪及札幌附近のスキーコース図」には11棟のヒュッテが紹介されている。さらに、1935年北大スキー部編の「札幌附近スキーコース図（改訂版）」には14のヒュッテ（グラビアページ参照）が載っており、それらのヒュッテは縦横のスキーツアーコースで結ばれている。1930（昭和5）年には北大スキー部員により、銭函～ヘルヴェチア間、奥手稲～ヘルヴェチア間、パラダイス～奥手稲間に指導標が設置され、スキー愛好家は年々増加した。



2. 秩父宮殿下と山小屋・札幌オリンピック・宮様スキー大会

1928（昭和3）年1月青森県大鰐で行われた第1回全日本学生スキー選手権大会で、北大は複合陣およびジャンプ陣の大活躍で大差をつけて優勝し、秩父宮賜杯を獲得した。ご臨席した秩父宮殿下は、英国留学中スイスアルプスで慶応大学山岳部OBの植有恒氏らの案内で山とスキーを楽しまれ、スキーにはとくに深い関心をもたれており、参加したスキー部員に北海道の山やスキーについていろいろ質問された⁽¹⁾。その頃、大野先生は完成したパラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテを宮様にご覧いただきたいと、友人の植氏を通じてお願いしていた⁽²⁾。こうして、宮様は同年2月21日に来道された。22日は北大や植物園を見学し、三角山で行われた北大スキー部のスキー大会をご覧になった。23日は午前小別沢から盤溪峠、幌見峠でスキーを楽しみ、午後は札幌一中の雪戦会や中島公園でのスケート大会や氷上カーニバルをご覧になった。24日～26日は大野先生やスキー部・山岳部の部員たちの案内でパラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテに宿泊されて、手稲山や朝里岳、春香山に登られた。当時、警察や憲兵隊にはスキーをやるものはほとんどいなかったのも、案内はもちろん護衛も北大のスキー部と山岳部のOBや部員たちが担当した。本隊は大野先生、木原 均講師⁽³⁾ほか8名のOBと部員、護衛班・通信班は3班からなる46名のOBと部員で

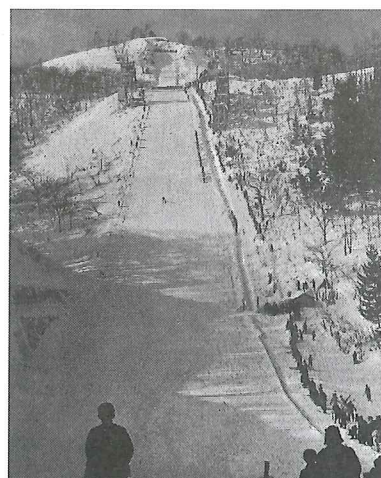


奥手稲山“ユートピア”附近に行く秩父宮殿下一行。
（山とスキー第80号、1928より）

あった⁽⁴⁾。食事部員が担当した。宮様はパラダイス・ヒュッテをことのほか気に入り、木のプンプンする匂いを嗅がれて大変お喜びになられた宮様は、ベッドの上で越中フンドシーつになって胸をピシャピシャ叩いたり口笛を吹いたりして大はしゃぎされた⁽⁵⁾。大野先生が“ヒュッテの鎖”構想をお話したところ、宮様は「僕も一つ造るから場所をみつけて設計してほしい」といわれ、同年12月には3番目の秩父宮ヒュッテ（空沼小屋）が実現した。さらに、宮様は、「札幌は大都会であり、大学もあるし、山が近い雪質も良い。将来日本に冬季オリンピックが来るとすれば札幌であろう。それにはまずオリンピック用のジャンプ台が必要である。良い場所を見つけてジャンプ台を設計し、その設計図を自分のところへ届けてくれ、ジャンプ台を造るようにしてあげよう」と云われた⁽⁶⁾。その結果、1932（昭和7）

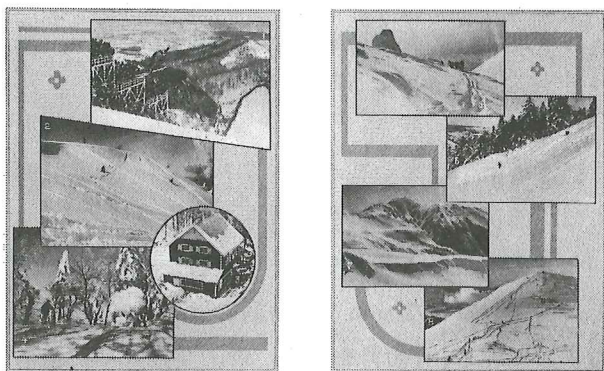


パラダイス・ヒュッテから手稲山に向かう秩父宮殿下
（1928年）（「北海道のスキーと共に」、1971より）



戦前の大倉ジャンツェ
（札幌観光協会発行のパンフレット
「冬の鍛錬」、高澤光雄氏蔵より）

年に宮様の意を受けた大倉喜七郎男爵の寄付により大倉シャンツェが完成した。工事費は5万円であった。場所の選定とジャンプ台の設計は大倉男爵の招きで1929（昭和4）年に来日したノルウェーのヘルセット中尉であった。さらに、宮様は外人スキー客を勧誘したり、冬季オリンピックを招致するためには西洋式のホテルが必要であると強調され、それが契機になって札幌で最初のホテル（現在のグランドホテル）の誕生となったといわれる⁽⁶⁾。



札幌グランドホテルの英文パンフレット（高澤光雄氏蔵）
外国人スキー客の誘致に熱心だったことがわかる。

1936（昭和11）年7月のベルリンにおけるIOC総会において、第12回オリンピック（1940年）の東京開催が決まった。当時は、夏季オリンピック開催国に冬季オリンピックの開催選択権が優先的に与えられたので、1940年の第5回冬季オリンピックの日本開催が有力になった。それを受けて、日本体育協会は開催地選定委員会を設け、検討の結果、札幌を選んだ。札幌では提灯行列をして祝い、大野先生（当時全日本スキー連盟副会長）を中心に札幌大会実行

委員会が組織された。しかし、1938（昭和13）年7月、政府は、戦争が続き開催が危ぶまれたので東京・札幌両大会の返上を決めた。先生は同年3月のカイロで開かれたIOC会議出席の帰路、インド洋上でラジオニュースにより、このオリンピック中止を知ったという⁽⁶⁾。しかし、大野先生の冬季オリンピック札幌誘致の念願はかなえられ、1972（昭和47）年の第11回冬季オリンピック札幌大会はパラダイス・ヒュッテの建つ手稲山と大倉シャンツェを主会場に実現した。

大野先生は山スキーの普及に力を入れただけでなく、スキーの普及という観点から競技スキーにも熱心であった。今年（2006年3月）第77回を迎えた宮様スキー大会は1930（昭和5）年に先生の発案と主導により開催された秩父宮・高松宮来道記念スキー大会がその発端となっている。先生はヘルセット中尉から聞いたノルウェーの国民的行事であるホルメンコーレンスキー大会の話から、秩父宮・高松宮来道記念スキー大会を思い立ち、その運営母体として札幌スキー連盟を、当時の橋本正治札幌市長を会長に1929（昭和4）年12月に創立した。1930（昭和5）年には、第1回宮様大会が開催された。

注

- (1) 北海タイムス昭和3年2月21日
- (2) スキー部の昔を語る座談会、北大スキー班班報1、1941
- (3) 第1章の注参照
- (4) 北海道帝国大学新聞、昭和3年2月20日
- (5) 北大山とスキーの会会報、第24号、2002
- (6) 大野精七先生伝記編集委員会編「大野精七の歩み」、1981

此の度は諸君の貴い学問の時間を犠牲にして、僕のスキーの為にご面倒を見て下さった事は感謝に堪えない次第です。
私は永い間憧れていた冬の北海道に来て、益々この自然に対する愛着と親しみを深めました。特殊な環境に在る諸君が、学問の余暇をこの男性的スポーツに心身を鍛錬される事は、必要な事です、且つ当然の事です、ります。
短い間ではありましたが、スキーを通じて諸君が凡ゆる機会に、凡ゆる形式で示して下された厚意は忘れる事の出来ないことであります。北海道に恵れた諸君が将来国家の為に大いに尽力あられん事を祈るものであります。此の度はどうも有難うございました。

テイネ・パラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテ山行に際しての秩父宮殿下から北大スキー部員・山岳部員への感謝の言葉

3. テイネ・パラダイス・ヒュッテ

(1) 北大スキー部の活躍：“山党”と“畑党”

1912（明治45）年に創立されたスキー部は、国外のスキー技術書や山岳書を積極的に取り寄せ、近くの三角山や荒井山附近などで自分たちのスキー技術を磨いて、北大独自のスキー術を確立していった。また、1914（大正3）年に銭函において日本で最初のスキー競技会（約2kmの距離競技）を開催したのはじめ、1920（大正9）年には札幌スキー駅伝競走（中学）を主催した。このようにして会得したスキー競技大会の種目設定や運営技術は1923（大正12）年に小樽で開催された第1回全日本スキー選手権大会開催で役立った。もっとも、スキー部は、大会を後援した小樽スキークラブが競技規程に関してのスキー部との約束を履行しなかったという理由か



スキー部第5回全日本学生スキー選手権大会優勝祝賀会
（1932年）（『大野精七の歩み』1981）より



ホルメンコーレンスキー大会に出発する
大野先生、栗谷川氏、宮村氏（札幌駅にて）
（北海タイムス、1933年1月15日）

ら、この第1回大会をボイコットしている。1919年には、部員のスキー練習とスキー普及を目的としてニセコ青山温泉不老閣でスキー合宿を始めた。その後、恒例行事となったこの合宿には一般学生や教員も多数参加し、100名を越す“青山温泉スキー合宿”へと発展した。

1925（大正14）に加納一郎・廣田戸七郎らが発起人となり、稲田昌植を初代会長として設立された全日本スキー連盟は、翌年国際スキー連盟（FIS）総会に木原 均を代表として送り、FISに加盟した。

スキー技術が向上するとともに、スキー部は、競技を目的とする“畑党”と山を目指す“山党”にしだいに分化していった。この流れは1926（大正

第九シーズンの計画（注：一九二〇年～一九二二年）
スキー研究講習會
日頃の研究や書物の講讀發表をなし、又は経験や知識の交換をする目的で不定期に開く。
土曜講習會
毎土曜日、丸山（注：円山）方面に於て、初心者
の為に開く。
スキー購入取次
價格拾參円五十錢。詳細は揭示によること。
スキー貸出
抽籤による。手数料金貳円。
合同練習
豫科試験終了の翌日より一週間、青山温泉にて。
委細揭示。
ジャンプ練習
二期にわたり合同練習をなす。
蝦夷富士登山。参加者を廣く募る。登頂の目的なし。
ムイネシリ岳（注：無意根山）方面。
奥手稲岳方面。新設小屋を根拠として。
（注：資料一の一九二〇年十月の項参照）
以上の三は合宿終了後の休暇中に行ふ。
一月
十六日（日）奥手稲岳。三段山。
二十三日（日）手稲山
三十日（日）第二回駅傳競走。（委細後報）
（注：資料一の一九二〇年一月二十五日の項参照）
二十日及二十九日の土曜は此が準備に費す。
二月
六日（日）手稲山。（中等學校生を伴う）
十一日、十三日（日）余市岳。毛無山。奥手稲岳の三方
面に分れて。
二十日（日）大会。競技を行ふ。
二十七日（日）奥手稲岳。
三月及四月の計畫は未定。三月末又は四月初旬、芦別岳
夕張岳方面にてアルペンクライミングをなす筈なり。
以上の外、臨機に諸種の計畫及會合あるべし。

第九シーズンの幹事とその事務の分擔
平井左門（林一）主任幹事 松川五郎（豫三）庶務主任
板倉勝宣（農二）臨時建設主任 板橋敬一（豫二）庶務
中野誠一（畜一）會計主任 内藤克三（豫二）庶務
網野兼一（豫三）會計 青柳確郎（豫三）物品製理主任
廣田戸七郎（豫二）物品製理 緒方直光（豫二）物品製理
加納一郎（林一）記録

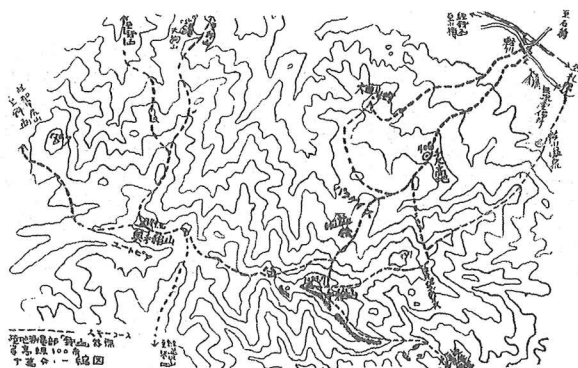
北大スキー部第9シーズンの活動ぶり（Alpen Zeitung, 1920-1921より）

14) 年の山岳部の創立につながり、道内の山岳の冬季スキー登山を開拓していった(第1章参照)。この頃には本州でもとくに早稲田大学、明治大学、法政大学など私立大学を中心に競技スキーを目指した大学スキークラブが盛んになってきた。1928(昭和3)年に青森県大鰐で開催された第1回全日本学生スキー選手権大会で圧倒的な勝利をおさめた北大スキー部は、その後も戦争前までは常に上位を占め、理論的にも、技術的にも、また運営面においても、日本のスキー界をリードした。

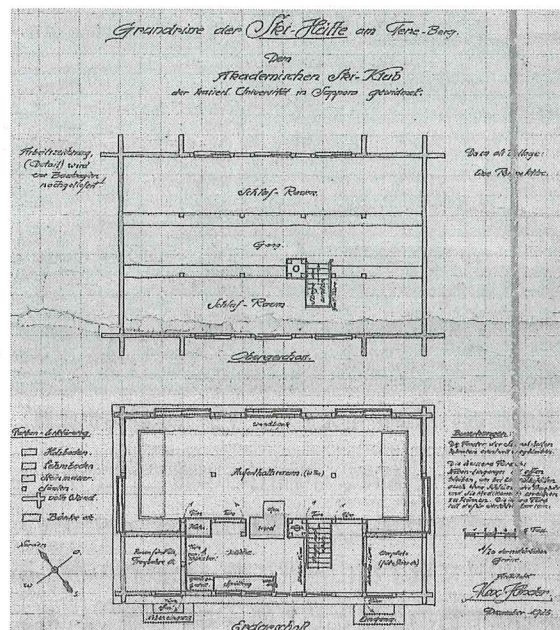
日本が初めて参加した1928(昭和3)年の第2回冬季オリンピック大会(スイス、サンモリッツ)は廣田戸七郎(監督)、伴 素彦(飛躍)、1932年第3回冬季オリンピック大会(米国、レークプラシッド)では山田勝巳が複合・飛躍に出場した。1936年第4回冬季オリンピック大会(ドイツ、ガルミッシュパルテンキルヘン)においては、廣田戸七郎(団長)と伊黒正次(飛躍)が参加し、伊黒は74.5mを飛び、7位入賞を果たした。この記録は1956年第7回コルツィナダンペッツォ大会において猪谷千春氏が回転で銀メダルをとるまではスキーでは最高位であった。1933年にはホルメンコーレン50周年記念スキー大会に大野先生と宮村六郎(飛躍)が参加している。また、一般スキーの指導者を輩出した。このように、多くのスキーや登山の指導者たちがティネ・パラダイス・ヒュッテから育っていった。

(2) ヒュッテ建設の経緯

北大寮歌「都ぞ弥生」にも〈手稲の巔^{いだけたそがれ}黄昏こめぬ〉と唱われる手稲山(アイヌ語ではタンネ・ウェ



ティネ・パラダイス・ヒュッテ周辺
(北大スキー部創立15周年記念号、1926から)



ヒンデル氏自筆のパラダイス・ヒュッテ設計図
(札幌ウィンタースポーツミュージアム蔵)

ン・シリ、長く悪い山、標高1,023.7m)は、札幌市民にとって夕日の沈むなじみの山である。コーラー先生によりスキーが北大に紹介された4年後の1913(大正2)年2月11日、稲田昌植ら8名はスキーによる手稲山初登頂を果たした。彼らは、琴似駅から現在の西野二股まで馬橋を使い、そこから永峰沢をつめて頂上に達した。その後(1917年頃)、軽川へ下る北斜面に後にパラダイスと呼ばれるようになる快適な滑降スロープがあることがわかり、軽川駅(現在のJR手稲駅)からの登山が一般的となった。しかし、当時は、手稲山といえども冬の日帰り登山は困難であった。

大野スキー部長は“ヒュッテの鎖”構想実現の手始めに、スキー部創立15周年記念事業として、記念



工事中のパラダイス・ヒュッテ
(坂本彌直撮影。北大スキー部創立15周年記念号、1926より)



完成間近いパラダイス・ヒュッテ（永野拓也氏蔵）

部報の発刊とともに、手稲山の中腹にヒュッテを建設することを計画した。部員たちは、1920（大正9）年10月に奥手稲山附近にあった既存の樵小屋を借り上げて宿泊小屋として使っていたが⁽¹⁾、あまりにも粗末であった。外国のスキー指導書やスキー映画⁽²⁾などに出てくる丸太造りのスキーヒュッテはスキー部員たちの憧れであり、夢であった。さっそく、1925（大正14）年に先生を委員長とし、8名のスキー部員からなる建設委員会が発足した。設計は、当初素人の集まりのため議論百出していたが、マックス・ヒンデル氏が協力してくれることになった⁽³⁾。ヒンデル氏の設計は、5間×3間の二階建丸木小屋で、1階には食堂兼居間、炊事場、物置、スキー置場、2階には寝室（寝具には藁布団）があり、工費の概算は1,500円であった。建設場所はアーノルド・グブラー先生の助言もあり、当時雁皮平とよばれていた白樺に囲まれた清流のほとりに決まった。土地は北海道造林会社（現在の王子緑化株式会社）から貸与された。建設用材のとど松191本（66石）も北海道造林会社から譲渡された。翌年の7月から、ヒンデル氏の紹介による大工藤川万吉氏の手により工事が始まった。資材は当初、スキー部員たちにより軽川から約6kmの炎天下の道を運ばれた。熊に遭遇することもあったという。しかし、すべては運搬できず、最後は馬で運ばれた。寸法の間違いによる丸太の不足や大工が留目熊吉氏へ交代するなどのトラブルもあったが、1926年11月2日に我が国で最初の本格的スキーヒュッテは竣工した。ヒュッテは大野先生により附近の通称パラダイスに由来して、テイネ・パラダイス・ヒュッテと命名された。総工費はいろいろな予想外の出費のため、当初見積

りを大幅に上回り、2946円94銭であった。大野先生が佐藤昌介総長を説得し、北大が設備費として1,260円95銭を支出し、残りは大野先生、スキー部OB、北大教員および学生有志の募金によった⁽⁴⁾。建具はヒンデル氏が寄付した。当時宿泊料金は北大関係者が10銭、一般使用者は15銭であった。

自分たちの小屋を手に入れた北大スキー部では年末の“青山温泉スキー合宿”とともに、パラダイス・ヒュッテでの春の合宿が恒例となり、“畑党”ではジャンプ班、距離班に分かれての猛練習が行われた。当時のHüttenbuch（小屋帳）⁽⁵⁾には

〈合宿や ジャンプばかりで 日が暮れる〉

〈私じゃ手稲山、谷間の娘、

ジャンプ恐がる子はもたぬ〉

とある。また、青森県スキー連盟の一行は次のように書き残しており、感激のほどが推察される。

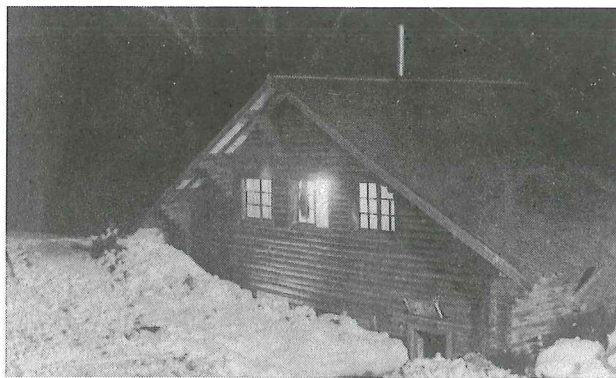
〈はるばると、海を越えて来ました……

あくがれて、あくがれて、

山、雪。そして、とうとう……あゝ

感激の深い、山の家、家……家です。〉

パラダイス・ヒュッテが一般スキーヤーで賑わったのは、冬のスポーツが他になく、またスキー場にはリフトがなく、山スキーが一般的だった戦前で、日曜日ともなると、軽川駅はスキーヤーでごったかえし、ヒュッテまで人の列が絶えないほどのにぎわいであった。ヒュッテでは管理人夫婦により豚汁や甘酒などが提供されたが、小屋の中は身動きもできないくらいの人混みで、外で立って食べる人も多かったという⁽⁶⁾。前記のように、1929年頃の日曜日には軽川駅での降客540名中スキー客は407名という盛況であった。



夜のパダイス・ヒュッテ（1951年3月、永野拓也氏撮影）



1951年のパラダイス・ヒュッテ大修理（永野拓也氏撮影）

（3）戦後のティネ・パラダイス・ヒュッテ

戦争中および戦後しばらくは、スキー部山班はパラダイス・ヒュッテ、無意根小屋、空沼小屋、冷水小屋の4つの山小屋を管理していたこともあり、十分な管理は出来なかった。また、戦中・戦後の荒廃により、スキーヤーや登山者のモラルも低下し、どこの山小屋も荒れはてていった。パラダイス・ヒュッテでも窓ガラスが盗まれたり、壁板が燃やされたりしたことがあった。しかし、スキー部員たちの努力によりしばしば修理され、維持された。

1952（昭和27）年に北大に入学したプロスキーヤーの三浦雄一郎氏は入学式前にスキー部のパラダイス合宿に参加した。部員当時は春の合宿が終わったあとも、一人でヒュッテに残り、食料が続くかぎり頂上近くの急斜面でポールを立てて練習をした⁽⁷⁾。戦後間もない物資が乏しく、娯楽もあまりない時代、パラダイス・ヒュッテは北大生たちにとっては憩いの場であった。

ヒュッテは、その後スキー部山班、山スキー部⁽⁸⁾、ワンダーフォーゲル部によって管理・維持されてきたが、手稲山の自動車道路の完成（1956年）やティネオリンピアスキー場の開業（1965年）、さらに第

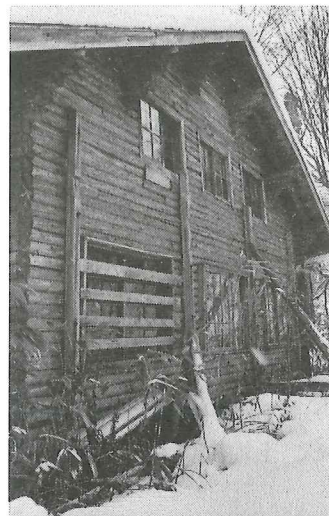


パラダイス・ヒュッテ2階にて（1952年）（永野拓也氏撮影）



冬に備えて（パラダイス・ヒュッテ、1950）（永野拓也氏撮影）

11回冬季オリンピック札幌大会開催（1972年）などにより、まわりの環境は大きく変わった。部員以外の人にはほとんど利用されなくなった。年月とともにヒュッテの老朽化がすすみ、1978年には使用が危険となったため、ついに閉鎖されるにいたった。しかし、倒壊を防ぐため、ワンダーフォーゲル部や山スキー部の部員によって、ときどき雪下ろしが行われた。



閉鎖されたパラダイス・ヒュッテ
（1989年12月、伊藤健次氏撮影）



パラダイス・ヒュッテの雪下ろし作業
（1990年1月、伊藤健次氏撮影）

(4) パラダイス・ヒュッテの倒壊と再建

ヒュッテ閉鎖のあと、スキー部OBやワンダーフォーゲル部OBなど関係者によって、歴史的意義のあるティネ・パラダイス・ヒュッテの再建あるいは移転保存などが検討されたが、種々の事情により実現できなかった。1989年には山スキー部のOBと現役部員からなるパラダイス・ヒュッテ問題研究会が設置され、ヒュッテの維持方法を研究するとともに、冬季の倒壊を防ぐため定期的に雪下ろしを続けた。1990年春、北大工学部建築学科の越野 武氏と角 幸博氏の協力によりヒュッテの状況調査が行われた⁽⁹⁾。その結果、倒壊の恐れもあることがわかり、由緒あるティネ・パラダイス・ヒュッテを惜しむ声が再び大きくなった。それを契機に改築復元への気運が急速に盛り上がり、1992年春には、山とスキーの会（山スキー部OB会）に手稲パラダイスヒュッテ再建準備委員会が設置された。さらに、1994年2月にはワンダーフォーゲル部OB会やヒュッテに思い出をもつ市民も加わって手稲パラダイスヒュッテ再建期成会（会長 有江幹男元北大学長）が発足し、再建のための募金活動が開始された。

ティネ・パラダイス・ヒュッテは、奇しくも同年3月、その冬の大雪に耐えきれず倒壊し、68年の使命を終えた。

かつてのティネ・パラダイス・ヒュッテを愛した1,100件を超える法人・個人から寄せられた6,400万円の浄財により、1994年12月8日新たなヒュッテが完成し、手稲パラダイスヒュッテと命名された。場所は周囲の環境を考慮して、土地提供者王子緑化株



手稲パラダイスヒュッテに集う
(第4回カンパの会、1998年7月)

式会社の協力により旧位置から西へ約400m移動した。新ヒュッテはヒンデル氏の原設計図による復元を基本としながらも、山本幹雄氏（山スキー部OB）の設計により新たに地下室を設け、研修室や男女の洗面所と水洗トイレを備えた。さらに、これからの山小屋のモデルとしてソーラー発電施設と汚水の土壌浄化槽が設置された。

蘇ったヒュッテは、JR北海道バス、ティネハイランドから徒歩で20分程のところであり、一般市民のほか、小学生など子供たちのクラブの活動や社会人の雪崩遭難救助訓練の場としても利用されている。また、地下室の研修室には各種視聴覚装置があり、大学生のゼミなどにも利用できる。



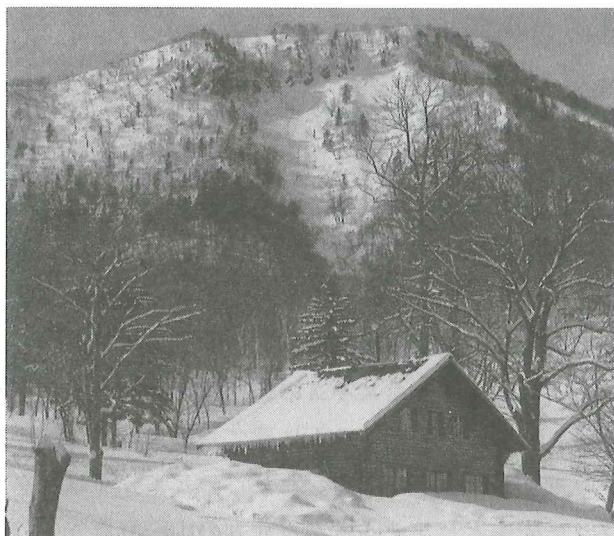
完成した手稲パラダイスヒュッテ（1994年12月）
(阿部幹雄氏撮影)



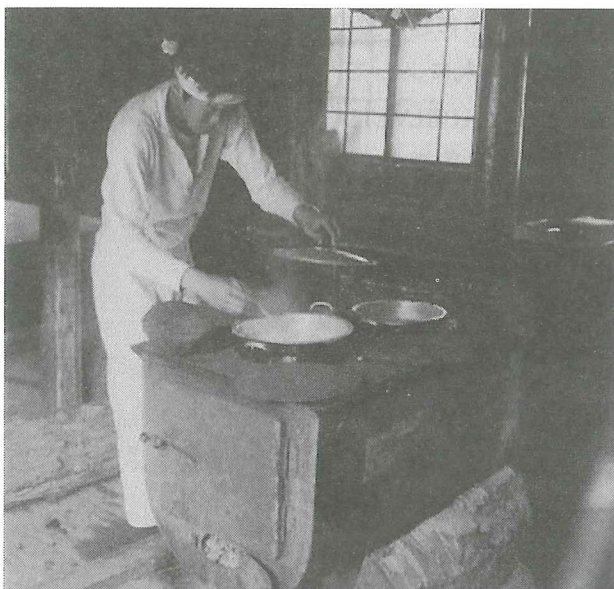
手稲パラダイスヒュッテを利用した雪崩遭難救助訓練
(阿部幹雄氏撮影)

注

- (1) Alpen Zeitung、スキー部（編集加納一郎）が1920年秋から1921年春にかけて、第1～5分冊（手書き、謄写刷）で発行。『山とスキー』の前身といえる。
- (2) 「山とスキーの会」は1923年12月10日、「ハennes・シュナイダー主演の「スキーの驚異」の映写会を主催した。シュナイダー（オーストリア、1890-1955）は最初のプロスキー指導員といわれ、1930年に来日して、北海道をはじめ各地でアールベルクスキーの講習を行った。十勝岳のシュナイダーコースは彼が訪れたことに因む。
- (3) 佐々木政吉、新設記念ヒュッテに就て。北大スキー部創立15周年記念号、1926。
- (4) 山とスキー、第3号、山とスキーの会、1930。
- (5) テイネ・パラダイス・ヒュッテ、ヒュッテンブック、1928年。
- (6) 西野一彦、戦中・戦後の山班。北海道大学スキー部七十年史、1982。
- (7) 札幌市公報さっぽろ、手稲区版、1994年6月。
- (8) 北大スキー部には競技班と山班があったが、1963年に互いに独立し、それぞれ競技スキー部、山スキー部となった。
- (9) パラダイスヒュッテ再建問題について、パラダイス問題研究会。北大山とスキーの会会報第14号、1989。



テイネ・パラダイス・ヒュッテ（永野拓也氏撮影）



テイネ・パラダイス・ヒュッテのストーブ
（1961年、増田裕一撮影）



手稲パラダイスヒュッテに集う1966年度山スキー部卒部生

Haga Ski



4. ヘルヴェチア・ヒュッテ

(1) ヒュッテ建設の経緯

1927(昭和2)年9月13日、5万分の1図幅「銭函」のほとんど中心、股下山の北を流れる沢の北岸の清潔で気品のある美しい白樺の純林の中に、7坪半ほどの僅か12人を収容できる小さなヒュッテが建設された。前年建設された手稲のヒュッテと同じく、このヒュッテもスイスの建築家マックス・ヒンデルさんの設計・監督の下に建てられたスイス風のブロックヒュッテである。ただこのヒュッテは、グブラー先生とヒンデルさんと北大の山崎春雄先生の3人が共同建設者で、3氏が日本の山を愛する若い人のために、スイスのクラブヒュッテの形と精神とを伝えるために建ててくれたものである。ヒュッテは両スイス人によってヘルヴェチア・ヒュッテと命名された(HELVETIAヘルヴェチアはスイスの古名、スイスを象徴する女神)。



銭函峠より白井岳、朝里岳(坂本直行1926、北大山岳館蔵)

グブラー先生や親友で福島高商教授のワーゼ先生は、札幌付近の山々のパイオニアであった松川五郎^(注)に紹介された銭函峠から奥のこの地を訪れた時、スイスやチロルの山に慣れた人たちが、日本の山の美に触れて激賞の声を放った。当時造材関係の仙人以外に出会うことのないそのあたりを、アルプスの前山となぞらえたのであろう。この地に心の憩いの場所として山小屋が欲しくなり、その考えに同

注

(注) 松川五郎：第1章引用文献及び人物紹介参照

調する有力なメンバーが集まってきて、建設が具体化したのである。

小屋の場所は最初の計画では現在の位置より1kmほど上流の針葉樹林の中に作る予定であったが、計画の小屋を作るには小屋の用材に適した針葉樹が付近に充分でないことが分かった。そのため、小屋の位置はより下流の白樺林の中に変更された。

建築工事は、1927(昭和2)年7月20日から始まった。山崎先生、ヒンデルさん、ワーゼ先生、大工の水本小判治さん、山岳部の学生の植田、加茂、それに人夫らの一団が大きな荷物や猟銃を背に、小屋建設のために銭函峠を登って来た。一行は近くの壊れかかった造材小屋に落ち着くと、白樺の伐採と運搬に取り掛かった。伐採は至極楽しい作業であったが、白樺の生木は重く、二十尺あまりの材などは全員でかかっても蟻が物を運ぶが如くで、工期は予定の21日から大幅に遅れた。



ヒュッテ建設中のキャンプにて、一日の作業が終わり焚き火を囲む右から山崎先生、ヒンデルさん、ワーゼ先生、大工の水本小判治さん(北大山岳館蔵)。

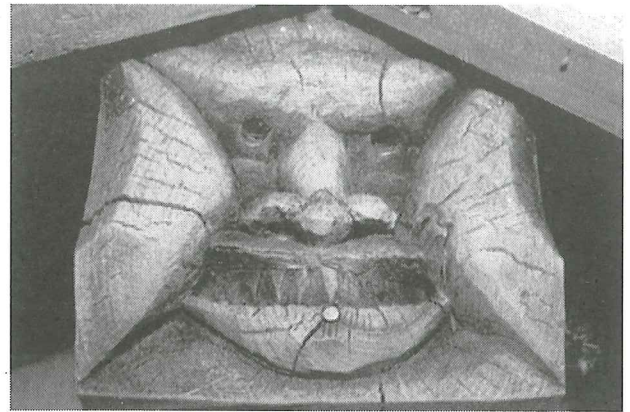
大工として雇った水本小判治さんは、千歳川の上流から江別までの間では誰知らぬ者のない丸木船作りの名人で、山崎先生とは狩猟を通じての信頼関係にあり、山崎先生の期待に応えて、50余日のヒュッテの建設仕事に雨や月光の洩れる半分倒壊しかかった造材小屋に寝起きして、少しの不平もなく忠実に仕事に従事した。ヘルヴェチア・ヒュッテの功労者として感謝されるべき人物である。



竣工直後のヒュッテ（山崎英雄氏提供）

ヒュッテの工事中、ヒンデルさんはその大部分を山で暮らした。トラピスチヌス修道院などの大建築に関する仕事の責任が一身にかかって多忙を極めていたが、できる限りの時間を割いて山の天幕へ逃げてきては、見る目も愉快げに自分から働いた。木を挽き、石を運び、いちいち大工に説明し、或いはモデルを作って見せもした。山崎春雄先生は「ヒンデルさんは王宮を建てたよりも1ヘルヴェチア・ヒュッテの建設が自分には深い喜びであった、と言っている。ヘルヴェチア・ヒュッテは、ヒンデル君の心血を注いだ建築のうちではおそらく同君が第一に指を屈するものではないかと自分は思うのである」と述べている。（ヘルヴェチア・ヒュッテの建設、山とスキー、78・79号）

夏期休暇でスイスに帰っていたグブラー先生の代わりにヒュッテ建設に参加したワーゼル先生は、グ



棟先の彫刻、ヒンデル作

ブラー先生の親友でスイス山岳会所属の登山家、徹頭徹尾日本びいきの快男児で、その愉快的アルペンのヨーデルは幾度かあの静かな白井岳の麓にこだました。

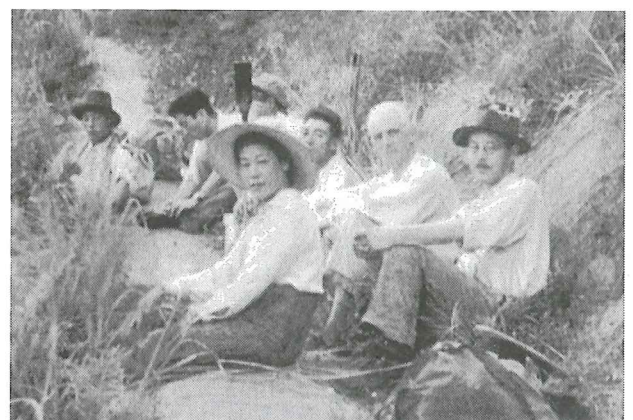
秋風の感じられるようになった1927（昭和2）年9月13日、水本がすっかり仕事をしまつて山を下りた。建設を始めてから55日目でヒュッテの誕生を迎えたのである。

ヒュッテの竣工からしばらくして、もっともこの地とヒュッテを愛していたグブラー先生を悲しませる事柄が起こった。観光業者が小樽から定山溪温泉まで自動車専用道路を山の中に開発したことである。その道路がちょうどヒュッテの百メートルほど近くの白樺の純林の真ん中を、無惨にも数百メートルの長さになたって一直線に切り開いてしまった。

この道路は戦時中に廃道となり使用に耐えられな



アーノルド・グブラー先生と山岳部の学生たち。計画では外壁は丸太のままであったが、断熱が充分でなかったために翌年丸太の上に桎を張った（昭和3年、北大山岳館蔵）



銭函峠下の小樽内川大合流でヒンデル氏と山崎先生一行。写真右から山崎春雄、ヒンデル、山崎夫人、2列目芳賀恒太郎（円山ハガスキー）、山崎英雄、中野征紀、山崎武夫（山崎英雄氏提供）

くなっていたが、朝里岳の洞爺丸台風で禿山となった北東斜面を利用して大規模なスキー場が開発され、さらに小樽内川のダムが建設されるに及んで舗装され、暴走族の走り回る道路となった。

横浜に設計事務所を開いて活躍していたヒンデルさんは、ヨーロッパ戦線が風雲急をつげた昭和14年夏、ドイツ宣戦の知らせを聞いて急に帰国の決心をし、山崎先生と心を込めて設計し、自らも直接建設に携わった小屋に別れを告げるためにヘルヴェチア・ヒュッテを訪問した。一行は、ヒンデルさん、山崎先生ご家族、中野征紀、芳賀スキー店主ら7人であった。ヒンデルさんの消息はこの時以来山崎先生には届かなかった。

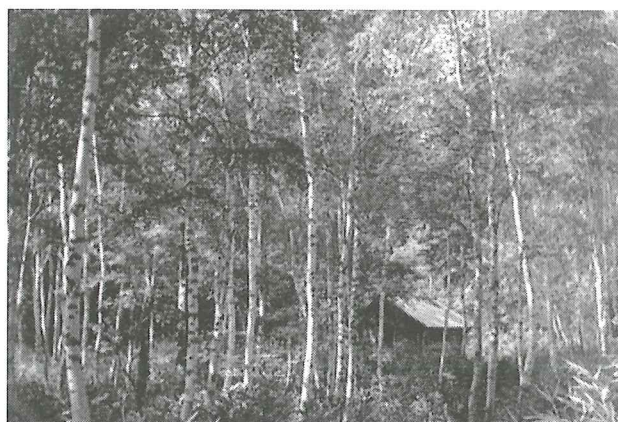
（2）山岳部へ管理移管

1934（昭和9）年11月、それまで建築主の所有だったヒュッテは、建設時の予定通り建築主から北大へ寄贈、山岳部の管理に移されることになり、名実共に山岳部のクラブヒュッテとなった。避難者の便を図るために建設者たちの意向でヒュッテには鍵を設けず、ヒンデルさんが内部の柱に作った金庫へ自主的に使用料金を入れるようになっていた。しかし心ない使用者にこの善意は通じず、ヒュッテの破損と備品の痛みがひどくなったために、山岳部への管理移管を機に小屋内外の修復が行われ、同時に入り口に鍵を設け、一般への開放は12月から4月までとすることになった。

1951（昭和26）年10月6日、山岳部とヘルヴェチア・ヒュッテの25周年を祝って、山崎春雄先生、原田準平山岳部長を迎えてヘルヴェチア祭が盛大に

挙行された。思えば山岳部へ管理が移管されてから、特に戦争中は維持管理のための物資補給に苦勞し、また小屋はたびたび荒らされて、備品は盗まれ、マットの布まで切り裂かれたことがあった。部員の少なかったその時代、雨戸の修理、盗難品の調達、雪下ろし等々、山岳部員がヒュッテの世話を全て無償で、全て自費でやったのである。戦争と物資欠乏の時代を生き抜いてヒュッテの管理に努力し、とにかく生き残ったヒュッテで25周年を祝うことができた喜びに、山岳部員と先輩達はひたった。

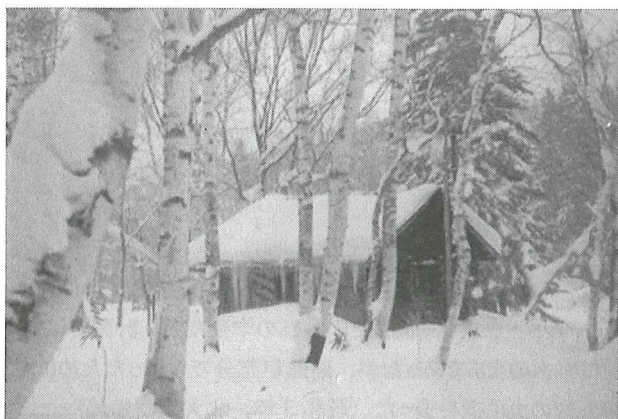
1954（昭和29）年9月21日、北海道を直撃した洞爺丸台風は、全道の森林に大被害を与えた。小樽内川流域も例外ではなく、小屋は幸い無事であったが、美しさを誇った周辺の白樺も大被害をこうむった。小樽に通じる自動車道路の両側の白樺は殆どなぎ倒されて、道路から小屋が透けて見えるようになった。1978（昭和53）年、ヒュッテから歩いて20分ほどの所に、朝里岳北東斜面を利用して札幌国際スキー場がオープンした。同年、小樽内川下流には



白樺の純林に囲まれた夏のヒュッテ（1940年頃、北大山岳館蔵）



25周年記念祭（1951年10月6日、北大山岳館蔵）



雪に埋もれたヒュッテ（1956年1月、北大山岳館蔵）

定山溪ダムが着工、道路へ出れば時おり暴走族の走り抜けるハイウェーと、小屋を取り巻く環境は激変し、屋根や外壁の傷みも目立ち始めた。

この状態を憂いたヒュッテを心のふるさととも思う山岳部員と山岳部OBたちは、総力を結集してヒュッテの修復にあたることになった。OBを中心に540万円を募金、1985（昭和60）年7月に改修工事に着手、たくさんの学生とOBが工費節減のために工事に参加した。古いフローリングの下からヒンデルさんが隙間風防止に敷き込んだ1927年発行のヒゲ文字のスイスの新聞がたくさん出てきたり、外壁の桎はがしでは青大将が出てきたり、巣を作っていた蜂に襲われるなどのハプニングがあったが10月に終了、10月19日には改修なったヒュッテで盛大な竣工式を兼ねた第59回ヘルヴェチア祭を開催した。

改修工事に当たっての基本理念は、“昔の姿を最大限に再現する”という事であり、外壁の桎張りはおそらく道内で現役唯一の手割り桎職人である伊藤芳松氏が担当するなど、ヒュッテ修復の意義を十分に理解する建築と設備業者が工事に協力した。アスファルトシングル葺きの屋根、グラスウールによる断熱処理や防腐剤の塗布など新建材も使われたが、当初のイメージを忠実に伝える改修を行うことが出来た。改修が行われたことは、建築主の一人である故グブラー先生の夫人にも写真と共に伝えられ、夫人から山の会に丁重な礼状が寄せられた。

1988（昭和63）年の札幌創基120周年記念事業、



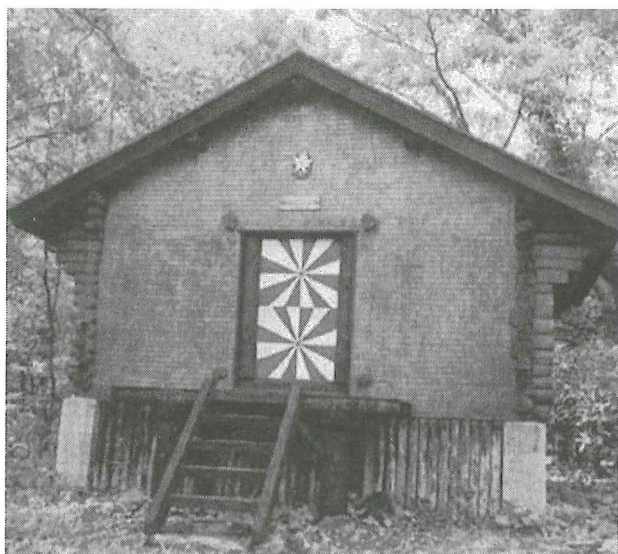
改修なった冬のヒュッテ

山岳部員と先輩達はヒュッテを末永く自分達の手で守り、次の世代に引き継いでいくべく昭和60年自分達で改修し、同時にかつての白樺の美林を取り戻すべく周辺の植林を行った。

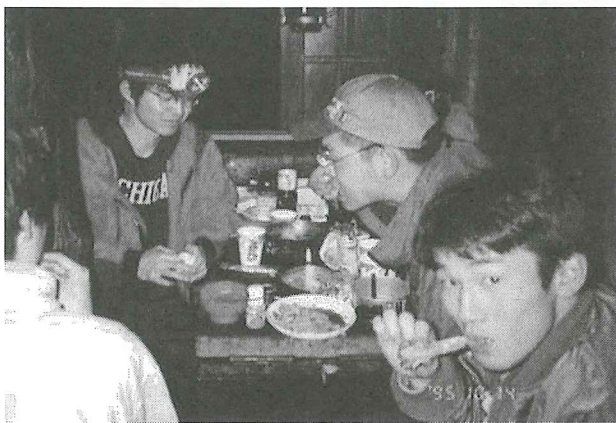
“さっぽろ・ふるさと文化百選”では改修なったヘルヴェチア・ヒュッテが、札幌市の貴重な文化遺産としてその1つに選定された。

（3）ヒュッテの今

ヒュッテは周辺の環境の激変にもかかわらず、ヒュッテを愛する学生とOB達によって維持・管理されて、グブラー先生が賛美したその地に、ヒンダーさんが設計した80年前そのままの素朴で美しい姿で立っている。



改修なった夏のヒュッテ



ヒュッテンレーベンを楽しむ山岳部の学生たち

ヒュッテは先輩達に今でも青春の心のふるさととして心に残る存在である。

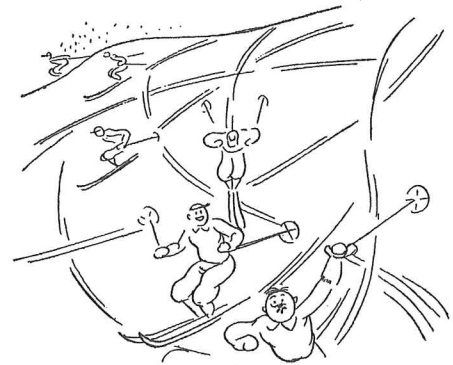
1泊体験を楽しむ子供たち

毎冬小中学生10人ほどが山岳指導者と共に1泊する。子供達は小屋の掘り出しや雪下ろし、周辺のシュノーシューハイク、股下山やツゲ山への登山、電気も水道もない生活などを楽しむ。参加した子供達は毎年この季節が来るのを心待ちにしている。



平成17年度ヘルヴェチア祭

ヘルヴェチア祭は毎年秋10月に現役部員主催により催され、多くの先輩達も参加する。



5. 空沼小屋

(1) 小屋建設の経緯

1928(昭和3)年2月、秩父宮殿下は北海道各地を視察され、その間1週間を札幌近辺とニセコのスキー登山にあてられ、建設間もないパラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテに各1泊された。このスキー登山のご案内役を北大のスキー部と山岳部がさせて頂いた。若者達に囲まれてすっかりくつろがれた殿下は、スキー部長大野精七先生が定山溪を中心としていくつかのスキーヒュッテを連絡する“小屋の鎖”を作って、2、3日ないし1週間くらいのスキーツアーが楽しめるようにしたいという計画を申し上げたところ、殿下自身その何れか一つを建設したいというご希望を洩らされたのである。これが同年12月に俗に宮様ヒュッテと呼ばれる空沼小屋建設の契機となった。殿下のご依頼によって、大野さんと山崎さんが中心となって候補地に空沼岳の中腹万計沼付近を選び、設計は三度ヒンデル氏を煩わすことになった。そして1928(昭和3)年9月28日に工事に着手し12月10日に落成を見たのである⁽¹⁾。



最初の冬

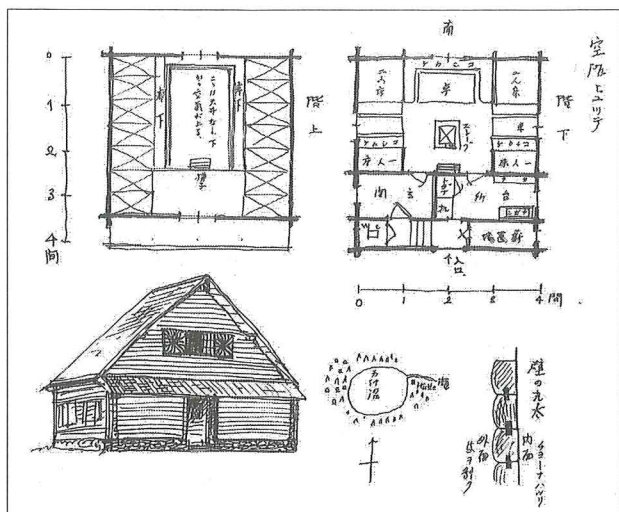
建設位置については宮様から、チセヌプリのスキー登山の際、空沼岳付近はどうだろうと言うようなお言葉があった。大野、山崎両先生は、宮様の慧眼にすっかり驚嘆した。と言うのは両先生は、ヒュッテの次の場所に空沼岳か中山峠付近のどちらかを計画に入れていたからである。宮様のご意向を受けて両先生は、直ちに4月から空沼岳付近の実地

検分をし、空沼岳万計沼付近が適当と宮様に言上した。ヒンデル氏のプラン作成が終わった8月上旬、大野先生はプランを携えて上京、宮家にご報告申し上げた。早くも8月25日には宮家から電報にて、プランどおり万計沼のほとりに直ちにヒュッテを建設するように、工事一切の管理は北大が行うようにと御下命があった⁽²⁾。

1928(昭和3)年9月10日、ヒンデル氏の来札に合わせて最後の建設地検分が行われた。検分には山崎、大野両先生が同行したが、このときの情景を山崎先生は、親友でスキー部OBの松川五郎宛の書簡で次のように述べている。

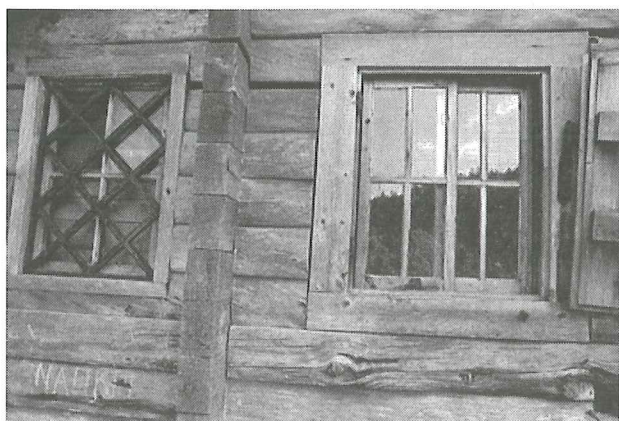
「ヒュッテの件は着々進行しています。急転直降とはいきませんが、ボーゲンぐらいで進んでゆきます。九月八日にヒンデルさんが札幌に来て、早速、大学の営繕課長、伊藤組の男それから大野、私、学生では小栗をはじめ二、三人、御料の仲野君、こうゆう同勢で山にゆきました。雨勝ちの九月初旬にしては、珍しく晴れた一日でした。その前八月末に大野君と行った時は朝からのドシャブリの中を沢を漕いで上るので徹底的にぬれましたが、今度はとても楽でした。空沼の「本流」に上って右横に万計沼の落ち口に出る道を真駒内御料の青年団の手で立派につけました。但し下の方で丸木橋を十三ばかり渡らねばなりません。私等の一行が新道の最初の使用をしたのですが、新しい路のまん中に湯気の立ちそうな熊のウンコがしてあったのは愉快でした。ちょうど歓迎のあいさつの様でした。沼のへりでゆっくりと休んで小栗君らはイハナを釣って、ほぼ場所を決定し、水の都合で小屋プランの左右を引くら返しとすることなぞもここできまり、ヒンデルさんは大元気で山を下り、夕方五時くらいの石山発で札幌へ帰りました(前晩は農家に泊まったのです)。伊藤組は冬までに仕上げると言っています。今度のヒュッテは三十人以上とゆっくり宿れます。」

書簡はさらに空沼建設後の次の山小屋について、中山峠のヒュッテは道庁が作るようになったこと、その為北大はムイネシリの方に寄って別に建てる事になるだろうと、ケッテン構想に従って次の山小屋建設への意欲を述べている。



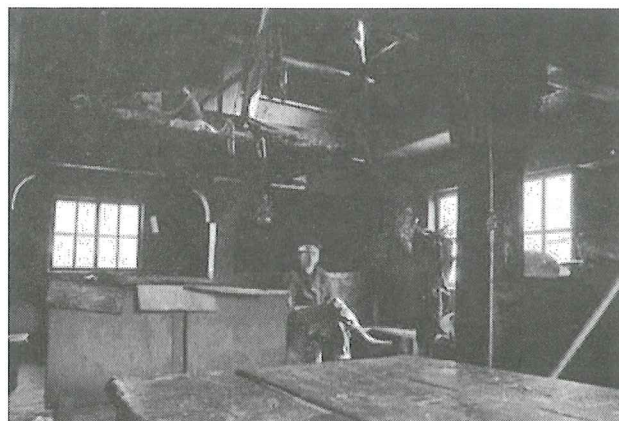
空沼小屋設計図と姿図スケッチ
(山崎先生画、松川五郎宛書簡より)

建設主である秩父宮殿下から工事一切の管理を下命された北大総長は、伊藤豊次氏（現伊藤組土建株式会社）に工事を請け負わせた。ヒュッテは、4間と4間1尺、32坪の2階建て丸木小屋で、階下は大体においてヘルヴェチア・ヒュッテの構造を大きく、そして精巧にしたもので、階上は下から暖気が上にあがるように中央で吹き抜けになっている。経費を充分かけ、用材その他の手配も順調に運び、設計もまた極めて入念で精巧なことは前2者を遥かにしのぐものがある⁽³⁾。



堅牢な丸太組みの外壁とサッシ

このヒュッテを最初に利用したのは、1929（昭和4）年1月に来道された高松宮殿下である。1月22日、定山溪沿線の湯の沢から登って兄宮の作られた小屋に到着、翌23日は空沼岳、狭薄山へ、24日も好天に恵まれて札幌岳に登られた。この最後の夜、宮



内部とストーブ

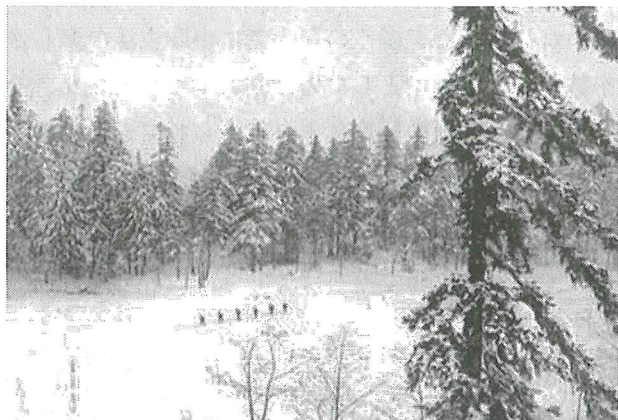
様は小屋の名簿に「空沼小屋」と命名され、25日、万計沢を下って湯ノ沢へおりられた。空沼小屋の命名は、高松宮殿下が東京を発つ前に秩父宮殿下にご挨拶に伺ったとき、秩父宮殿下から空沼小屋とするが良からうと言うお話があったものである⁽⁴⁾。



空沼小屋前の高松宮殿下
(右から二人目)、
左は大野精七スキー部長
(宮様スキー大会50年史より)

秩父宮家御用空沼小屋は、高松宮殿下ご宿泊の翌1930（昭和5）年2月11日（紀元節、現在の建国記念日）に一般に開放されることになった。同日、大野スキー部長、関係者一同が万計沼湖上に整列して宮城に向かって遥拝、君が代を二唱し、天皇、皇后、各殿下の万歳を三唱した。使用者総代として北大学生宇都宮高が小屋開放に対する宮家への感謝と使用規定と使用者心得を堅く守ることの宣誓を行った。宮家から指名された小屋の管理者は、北大スキー部長と帝室林野局札幌支局長であった。小屋の利用者は、使用料を支払うことになっており、7月1日～10月31日は10銭、11月1日～6月30日は25銭であった。昭和5年2月21日から翌年2月21日までの1年

間に使用者数が920人、延べ使用者数2086人との記録が「山と雪」第6号にあり、登山道の整備と小屋の建設によってこの近辺の山々を、多くの登山者が訪れるようになったことが分かる。



冬の万計沼に行く（山と雪創刊号（1921年）より）

（2）秩父宮家から北大へ寄贈

小屋は戦後秩父宮家から北大に寄贈され、管理はスキー部が行っていたが、昭和32年山岳部に管理が移された。毎年5月には山開きと新入生歓迎会を兼ねて小屋祭を開催している。この時は山岳部員全員が小屋に1泊し、小屋の簡単な修理、小屋周辺の清掃を行っている。小屋祭の翌早朝、部員達は昨夜からの二日酔いで苦しむものも含め全員で空沼岳へ登る。5月の快晴に恵まれて残雪に輝く山々の眺望を楽しむことができる。



空沼小屋祭の山岳部員、小屋をバックに記念撮影（1979年）



空沼岳頂上の山岳部員、後方は恵庭岳と小漁岳（1981年）

空沼小屋について忘れてはならないのが、地元常盤村（現在南区常盤）との関わりである。山崎先生の書簡に御料林の青年団の手で立派に新道が作られたとあるが、この青年団とは当時の土場青年団、その後の常盤青年団のことと思われる。万計沼への登山道を作り、小屋が出来てからは、毎月1回管理のために小屋へ行き、備品の保守や薪の補充、清掃などを行ったと言う。現在でも地元の常盤1区町内会では毎年6月の第3日曜日に、子供からお年寄りまで一緒に登山して、登山道や小屋周りの清掃を行っている。空沼岳清掃登山について、常盤一区町内会の元会長中野務さんは次のように述べている。

「昭和3年、空沼岳万計沼に北大のヒュッテが建立され、当時の土場青年団がその管理を委託⁽⁵⁾されていたのです。ヒュッテに向かう登山の道すがら、登山道路に伸びた枝の伐採や倒木の排除などをして、整備を行ったのが空沼岳清掃登山のルーツと考えられるのです。私も少年の時、青年団の人たちと一緒に登山をして、登山道の整備を経験したことが幾度かあります。当時の青年団は月に1回は登山してヒュッテの管理の仕事に携わっていましたね。このヒュッテの委託業務を含めた常盤青年団の空沼岳清掃登山は、昭和36年頃まで継続されました。その後常盤住民の有志の方々によって清掃登山が続けられ、昭和58年にはスポーツ少年団が結成されて、少年団の奉仕活動部門として参加いただくことになったのです。

空沼岳は、私達常盤の住民にとって慣れ親しんできた山です。この山をいつまでも愛し、空沼岳登山の奉仕活動を永く続けていきたいものですね。」⁽⁶⁾



空沼岳登山道の清掃をする常盤スポーツ少年団。後方は万計小屋
(昭和44年、常盤中学校提供)



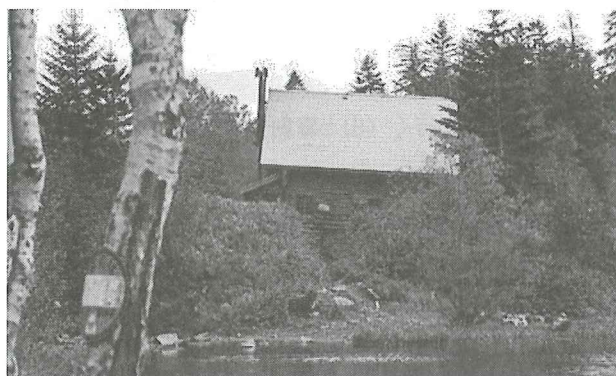
空沼小屋の周辺を清掃する常盤スポーツ少年団
(昭和44年、常盤中学校提供)



空沼岳清掃登山は常盤の人々によって毎年6月第3日曜日に
行われている。後方は万計小屋 (古内昭氏提供)

(3) 小屋の今

小屋は建設から80年近く経過し、この間簡単な補修が行われてきたが、近年いよいよ老朽化が進行し、小屋全体の沼側への傾斜が大きくなっている。秩父宮、高松宮両殿下始めスキー登山の先駆者達の思いが詰まった、多くの登山者に小屋生活の楽しさを教え、登山基地としての役割を果たして来た、そして地元の人々の好意により支えられてきた小屋を未来に引き継いでいくために早急な改修が望まれる。

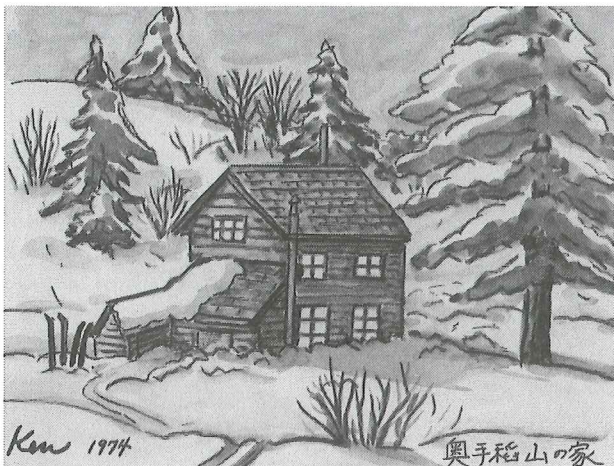


空沼小屋と万計沼、空沼小屋は老朽化して年々万計沼側に傾きつつあり、早急な改修が必要である。

注

- (1) 伊藤秀五郎「北海道の山小屋」山岳1954
- (2) 小川玄一「秩父宮殿下下ヒュッテの竣工に当たって」山とスキー第89号
- (3) 伊藤秀五郎「山とスキー」96号
- (4) 「高松宮日記 第1巻」中央公論社1996
- (5) 中野務さんは、青年団へ管理を委託したのは北大だったと思うとのことであったが、北大では資料がなく確認がとれなかった。
- (6) 「常盤開基百年記念誌」2002年10月

6. 奥手稲山の家



北大ワンダーフォーゲル部元顧問、八木健三先生画

(1) 建設の経緯

奥手稲山の家建設計画が持ち上がったのは、1930（昭和5）年1月のことである。当時金解禁のための緊縮政策と世界恐慌の波及が重なり、日本経済は不況に陥っていた。これに伴う収入源に苦しんでいた鉄道省札幌鉄道局は旅客誘致に力を入れ、その一環としてスキー客のための施設整備を企画したのである⁽¹⁾。

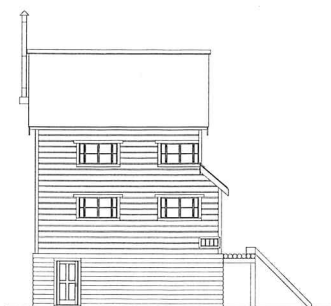
札幌鉄道局は1月27日、北海道内のスキー団体代表者を招いて「スキー懇談会」を開催し、意見を募った。この場で各代表からヒュッテ建設の要望があり、北大スキー部長の大野精七先生が銭函峠付近かユートピア付近にヒュッテを建設してはどうかという提案を行った⁽²⁾。既述の「山小屋の鎖」である⁽³⁾。大野先生はパラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテの間にもう一つ山小屋を建設することで、三つの山小屋を連結しようとしたのであった。銭函峠かユートピアに山小屋ができれば、小屋利用客の多くが銭函駅で下車することが予想され、札幌鉄道局としても旅客収入の増加を見込むことが

できた⁽⁴⁾。

この提案を受けて札幌鉄道局は山小屋建設の具体化に着手した。建設地は、当時北海道内でも有数の広大なスキースロープとして知られ、かつ秩父宮殿下が1928（昭和3）年のご来道の際スキーを存分に楽しまれたユートピア付近と決まった。奥手稲山周辺一帯は御料林（皇室所有の森林）であったため、札幌鉄道局は帝室林野局へ借地許可を申請し、周囲の木々には一切手を触れないことを条件にこれが認められた。

山小屋の設計は、札幌鉄道局保線課長の近藤皎氏が担当した。近藤氏はアルプスの有名なスキーヒュッテの設計図を参考にして、木造高床式3階建ての山小屋を設計した。間口7m、奥行8m、高さ10mの大きさで、総床面積150㎡。中央部分は吹き抜けになっており、収容人数48人で最大80人まで収容できる、破格の大きさの山小屋であった⁽⁵⁾。1930（昭和5）年の夏から秋にかけて建設工事が進められ、10月には棟上げ⁽⁶⁾、11月6日には札幌鉄道局長の武居哲太郎氏自ら小屋建設の進捗状況を視察し⁽⁷⁾、同年12月に竣工した。小屋建設に要した費用は約5,000円であった⁽⁸⁾。

山小屋の名前は「ユートピア・ヒュッテ」、「星置小屋」などが候補として上がったが⁽⁹⁾、最終的に「奥手稲山の家」と決定した⁽¹⁰⁾。札幌鉄道局は12月16日付で「奥手稲山の家」使用規定・取扱細則を定める一方で⁽¹¹⁾、12月18日には小屋番採用試験を行い、10人の受験者の中から軽川（現手稲）在住の熊撃ち猟師小池春治氏を採用した⁽¹²⁾。12月20日から一泊50銭、休憩15銭で営業が開始され、利用券は札幌駅、銭函駅、南小樽駅、小樽駅で発売された⁽¹³⁾。



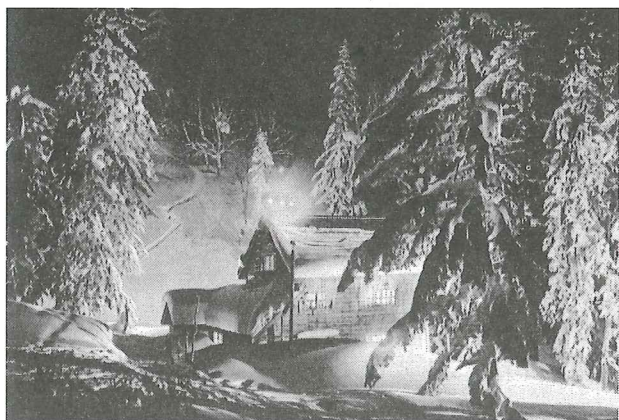
設計図と思われる側面図
（『北海タイムス』1930
年10月23日掲載より作
図、設計図は未発見）



1930年、創建当時の山の家（『山と雪』4号、1931年）

(2) 小屋開き

翌1931（昭和6）年1月17、18の両日、北海道内のスキー家47名を招いて奥手稲山の家の正式な小屋開きが行われた。17日夕刻の式には、奥手稲山の家、パラダイス・ヒュッテ、ヘルヴェチア・ヒュッテそれぞれの建設責任者である、武居局長、大野先生、山崎春雄先生が顔をそろえた。この3人は独逸協会中学の同窓生であった。引き続いて行われた茶話会では、北大山岳部長の枋内吉彦教授、北海タイムス社の河合裸石氏、空沼小屋管理人の山理氏、北大医学部の木下良順教授（北大スキー部）、スキーに多大の関心を持っていた陸軍歩兵第25連隊（月寒）連隊長の五十嵐房吉大佐らが挨拶をした。この小屋開きの記事と写真は、山の家から伝書鳩で北海タイムス本社に届けられ、1月19日の北海タイムス朝刊を飾った⁽¹⁴⁾。



夜間照明に浮かぶ山の家とユートピア

（『北海道新聞』1950年7月7日掲載、写真は1940年以前に撮影された。北海道新聞社提供）

(3) 戦前の様子

奥手稲山の家は、当時としては最も設備の整った山小屋であった。銭函駅から小屋までは鉄道電話が引かれ、屋根の上の照明で夜間スキーを楽しむことができた。12月から4月までの営業期間中は小屋番が常駐しており、頼めば食事を出してくれた。小屋の中心には巨大な薪ストーブが備え付けられており、また炊事道具や寝具も完備していた。小屋へのルートとして最も人気があったのは、銭函駅から銭函天狗岳の裾をまわり、奥手稲山頂上附近を経て小屋に至るものであり、指導標が完備していた。このルートをとる際には、銭函駅で人夫を雇うこともで



1950年頃の山の家（永野拓也氏撮影）

きた⁽¹⁵⁾。建設から数年内に、トイレ棟の増設や煙突位置の変更がなされ、ほぼ現在の姿に改修された⁽¹⁶⁾。ユートピアを目の前に控えた山の家は、スキーブームの中で大変な人気を集め、週末にはスキー客で満員になった⁽¹⁷⁾。

(4) 北大への移管

1949（昭和24）年に国鉄が発足して以降も、奥手稲山の家の営業は続けられたが、スキーリフトを備えたスキー場が北海道各地に作られ、山スキーが急速に衰退するにつれて、山の家を利用客は減少していった⁽¹⁸⁾。そして1960年代末に、国鉄は合理化政策の一環として、営業成績の上がない奥手稲山の家を処分する考えに至り、北大山岳部長の橋本誠二教授を通して北大に小屋移管の旨を打診した。

1969（昭和44）年秋に学生部が現地調査を行い、



1978年頃の山の家

（左上が奥手稲山。1954年の洞爺丸台風により針葉樹が激減した）

小屋は老朽化してはいるものの使用には充分耐えることが確認され、移管を受け入れることになった。文部省と大蔵省との協議を経て、1971（昭和46）年3月24日、奥手稲山の家は国有財産として、北大に正式に無償譲渡された。移管後、奥手稲山の家の獲得を強く希望していた北大ワンダーフォーゲル部に小屋の管理が委託されることになり、同年6月からワンダーフォーゲル部による奥手稲山の家の管理が始った⁽¹⁹⁾。部員たちは親しみを込めて「奥手」と呼んでいる。



1977年、ストーブのまわりでくつろぐ部員たち

（5）あいつぐ修理

移管から数年後には土台部分の損傷により小屋は徐々に傾き始めた。すでに創建から半世紀近くを経ている。この危機にワンダーフォーゲル部は、1980（昭和55）年に小屋存続へ向けてプロジェクトチームを作り、対応に当たった。まず、北大内外の学生サークル・社会人山岳団体に大規模なアンケートを実施し、奥手稲山の家に対して持っているイメージや小屋の利用頻度を調査した。アンケートには小屋に対して好意的な意見が多数寄せられ、予想外に多くの団体が小屋を利用していることが判明した。学生部も小屋の重要性を認め、念願の小屋修築が実現する運びとなった。

修築は、1982（昭和57）年7月21日から24日までの4日間に行われた。修築の方針は、小屋の傾きの根本的に正はせずに、損傷が激しい土台部分を補強することでこれ以上の傾きを食い止めるというものであった。具体的には、土台の柱のうち腐っているものは切断され、代わりにコンクリートの台座が据

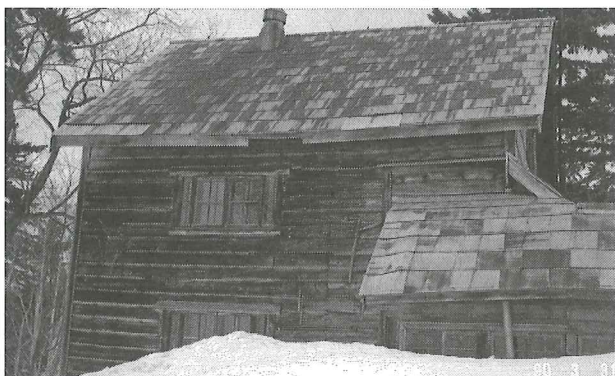
えつけられた。それ以外の柱には、補強のための角材が取り付けられた⁽²⁰⁾。

しかし、この補修工事によっても小屋の傾きの進行を止めることはできず、1980年代末には建物全体の倒壊が危惧されるほどの状態に陥った。このためワンダーフォーゲル部は奥手稲山の家の全面改修を行う必要があるとの結論に達し、1989（平成元）年に現役部員とOBからなる「奥手稲山の家改修委員会」（委員長：千葉誠哉北大農学部教授、北大ワンダーフォーゲル部OB／当時の顧問）を発足させた。改修委員会は募金活動を行って改修のための費用を集めるとともに、工事計画の立案を進め、小屋の基礎部分を強化する第1次工事と、外装等の改修を行う第2次工事の2回に分けて改修を行うことを決定した。

1990（平成2）年春、積雪期を利用して現役部員・OB延べ96名が参加して鉄骨等重量資材を雪上車により運搬した。そして同年9月15日から2週間の予定で小屋を鉄骨高床式にするための第1次改修工事が始まった。ところが9月22日工事中に小屋の土台部分が倒壊する事故が発生した。食事の世話と工事の手伝いに滞在していた現役部員2名が事故に巻き込まれ、骨折や筋肉裂傷などの重傷を負った。事故発生により工事は一時中断されたが、10月8日から13日にかけて大きな損傷がなかった小屋本体を水平移動させ、鉄骨土台の上に乗せるための作業が行われた。この後、冬期間は工事を中断し利用も休止されたが、現役部員は屋根の雪降ろしや除雪のため山の家に通い、小屋維持のために懸命の努力を行った。

翌1991（平成3）年3月に延べ161名が参加して再び資材運搬が行われた。資材重量は前年度と合わせて約56トンであった。6月22日から7月17日にかけて、第2次改修工事が実施された。この工事によって、土台部分の鉄骨化が完了し、外壁、屋根、窓、トイレ等の改修が行われた。特に屋根はそれまでの青から赤に塗り替えられ、新たな趣となった。しかし内部はそれまでのままである。こうして奥手稲山の家は閉鎖の危機から11年を経て、全面的な改修を完了したのである。なお小屋改修には約930万円を要し、このうち学生部よりかなりの資材の援

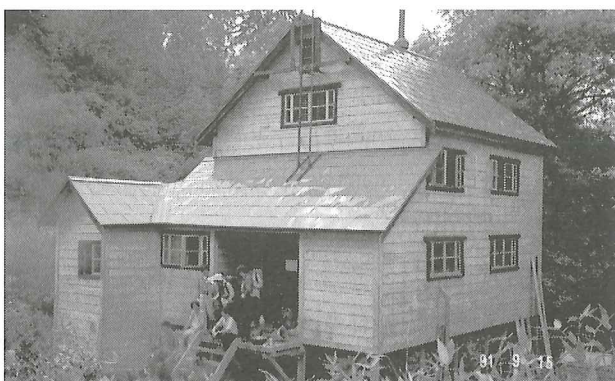
助を受けた⁽²¹⁾。同年9月には山の家に現役部員とOB・OG等相集い、大改修の完了を祝した。



改修前の山の家
(屋根は錆び、外壁の損傷が激しく、建物が傾いている)



1990～1991年の大改修工事
(土台を鉄骨に交換)



改修後の山の家

(6) 奥手稲山の家の現在

ワンダーフォーゲル部の現役部員は、夏(5～11月)には隔週、冬(12～4月)には毎週、週末に小屋番に入り、山の家の管理を行っている。小屋の暖房は薪ストーブから石炭ストーブに替わり、秋には現役部員が全員で石炭上げを行っている。電灯も今

はなく、灯油ランプがその代わりを果たしている。玄関にかかっている表札は1978年に卒部した現役部員の手作りの記念品である。

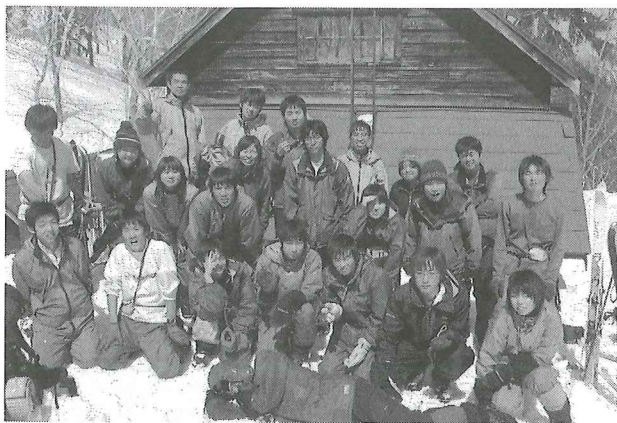
無雪期の小屋までは奥手稲沢川(通称夕日の沢)沿いの林道と歩道をたどる。初夏と秋には、美しい新緑と紅葉が楽しめ、しかも山菜の宝庫でもある。夏には発寒川を遡行して山の家に至るルートもある。積雪期は、手稲山961m峰、送電線-迷沢山、奥手稲山、銭函峠、夕日の沢など多様なコースをとることができ、手軽にスキーツアーが楽しめる。なお、小屋の周囲2km四方には、ワンダーフォーゲル部の現役部員とOBが1989(平成元)年3月に取り付けた指導標がある(グラビア参照)。赤地に白いウサギが浮かんだ洒落なデザインの指導標で、小屋への距離が記されている⁽²²⁾。

奥手稲山の家の周囲には大きな美しいタンネとダケカンバが点在し、ユートピアをはじめとするスロープで山スキーを楽しむ多くのスキーツアーグループが訪れている。時には野鳥や小動物が身近に観察できる。

北大移管以前の小屋の沿革や利用実績に関する一次資料(設計図を含む)はほとんど残されていない。本稿に記述した事柄にお気づきになった点があれば本実行委員会までお知らせいただければ幸いである。



2004年秋の石炭上げ風景
(林道終点から小屋まで片道約1.5時間、約30kgの石炭を2～3回運搬する)



新人歓迎会

(2005年4月、この時期でも玄関の屋根まで積雪がある)

注

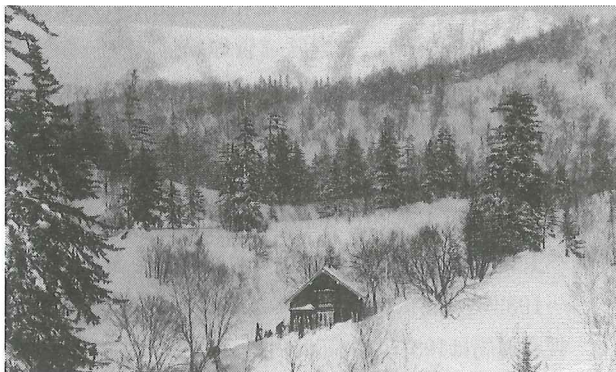
- (1) 札幌鉄道局『昭和5年度年報』(1931年12月) 1—2頁、16頁。
- (2) 「誌上談話会」(札幌鉄道局『札鉄』第2号、1930年2月) 115頁。
- (3) 『北海タイムス』1929年11月14日。
- (4) 当時鉄道省本省もスキーが持つ旅客誘致効果に着目し、スキーの宣伝を積極的に行っていた。その中心の河上寿雄氏からも札幌鉄道局にヒュッテ建設の提案があったとされる(細井吉造「スキーびつこ宣伝」『登山とスキー』1935年11月号、74頁、のちに同『伊奈谷木曾谷』故細井吉造遺稿集刊行会、1937年に収録、渡辺公平「鉄道とスキーと山(中)」『鉄道ピクトリアル』293号、1974年5月、40頁)。
- (5) 『北海タイムス』1930年5月23日、10月23日。
- (6) 『北海タイムス』1930年10月23日。
- (7) 『北海タイムス』1930年11月8日、木曾凡九郎(注—武居哲太郎のペンネーム)「變な男」(東京鉄道局『運輸月報』第18巻1月号、1937年1月、のちに『武居哲太郎遺稿集』武居哲太郎遺稿集刊行会、1941年に収録) 184—186頁。
- (8) 前掲『昭和5年度年報』、16頁。『札幌スキー連盟年報、昭和10年度』には建設費6,000円、設備費5,500円(電話費1,000円、電気費1,500円、その他3,000円)と記載されている。
- (9) 『北海タイムス』1930年10月23日、11月8日。
- (10) これは鉄道省が建てた最初のヒュッテであった(細井、前掲、74頁、木曾、前掲、187頁、渡辺、前掲、40頁)。昭和初期には全国に鉄道省出資の「山の家」が建てられたが、奥手稲山の家はその嚆矢になったのである。なお道内にも、幾つか建設されたが現存

するのは奥手稲とニセコのみである。

- (11) 「札幌鉄道局報」第1118号、1930年12月16日。
- (12) 『北海タイムス』1930年12月19日。
- (13) 前掲「札幌鉄道局報」。
- (14) 『北海タイムス』1931年1月16日夕刊、1月19日、1月20日夕刊、木曾、前掲、186—188頁。
- (15) 奥手稲山の家の様子や利用法を紹介したものとして、戦前では札幌鉄道局『スキーへ』(1933年)、同『スキー北海道』(1938年)、同『ニセコと奥手稲』(1938年)、鉄道省『日本案内記、北海道篇』(1936年)、戦後では日本交通公社札幌支社『新スキー北海道』(1947年)、札幌鉄道管理局『スキーの楽園HOKKAIDO』(1963年)などがある。
- (16) 山の家側面図にはトイレ棟が無く、竣工直後の写真にも見当たらない(『北海タイムス』1930年5月23日、1931年1月20日夕刊)。1933年発行の『スキーへ』に掲載された写真にはこれが写っており、1931—1933年の間に増設されたと推測できる。なお、札幌鉄道局は1931年に約600円を投じて改修を行っており、この時に増設された可能性もある(『旅』1931年12月号、99頁)。
- (17) 橋本昌浩「札幌近郊の山小屋」(札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫48札幌の山々』、1989年) 237頁。
- (18) 同上、237頁。
- (19) 北海道大学学生部「奥手稲山の家について」1971年9月16日、富山久之「奥手稲山の家沿革」(北海道大学ワンダーフォーゲル部『道標—創部50周年記念誌』、2005年) 270頁。
- (20) 吉浜義男・北山邦彦「奥手稲山の家修築の話」(北海道大学体育会ワンダーフォーゲル部『道標』27・28・29号、1986年10月) 25—26頁、富山、前掲、270—271頁。
- (21) 北海道大学ワンダーフォーゲル部OB会『OB会報』1989、1990、1991号、千葉誠哉「奥手稲山の家”1991”」(前掲『道標—創部50周年記念誌』) 300—301頁、富山、前掲、271—272頁。
- (22) 小田島一典「『奥手稲小屋指導標』について」(前掲『OB会報』1989号) 7—9頁、富山、前掲、271頁。

7. 無意根小屋

定山溪の西南西約9kmに位置する無意根山（標高1,460.5m）は札幌近郊では余市岳（1,488.1m）に次いで高い山であり、その名前（アイヌ語ではムイネ・シリ、ムイネ：麓、シリ：山）が示すように雄大なスロープをもち、良質な深雪に恵まれた山スキーには絶好の地である。無意根小屋を基地に12月から5月まで半年間スキーを楽しむことができる。

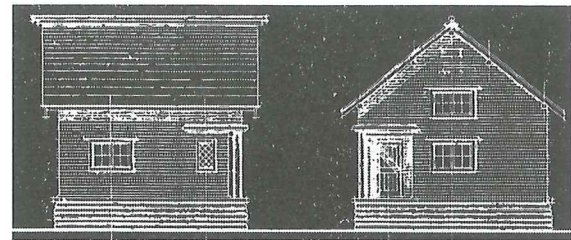


無意根の“壁”を背にした無意根小屋（1989年、阿部幹雄氏撮影）

（1）無意根小屋建設の経緯

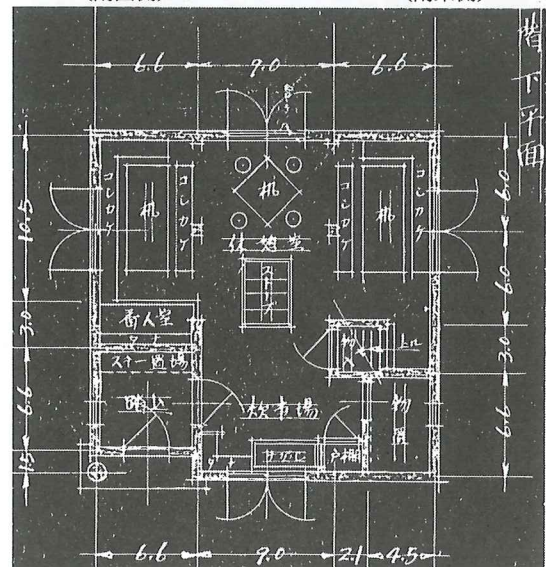
北大スキー部の板倉勝宣⁽¹⁾・加納一郎⁽²⁾ら10名が豊羽鉾山元山の廃屋を利用して、初めて冬に無意根山に登ったのは1921（大正10）年1月7日であった。因に、余市岳は同年2月12日板倉勝宣ら5名により登られた。その後、定山溪の先に薄別温泉ができてからは、無意根山へは薄別から登るようになった。しかし、山頂へのアプローチが長く、頂上附近の深雪を楽しめる登山者はごく限られていた。部員の間でも、小屋があると、登頂ばかりでなく、大斜面での豪快な深雪スキーを楽しむことができるとの気持ちが強かった。1931（昭和6）年、スキー部創立20周年記念事業として薄別川支流（小川）の上流か、頂上手前の通称シャンツェの下あたりに小屋を造ることが企画された。しかし、当初は資金の当てがなく、スキー部有志により株式組織を作って建てる案も出されたが、具体的には進まなかった⁽³⁾。

1931年4月京都での学会から戻られた大野先生から、部員たちは、「無意根山に小屋が出来るようになったよ。そのお金も或る篤志な無名氏から貰うことになったよ」と告げられた⁽³⁾。ただちに、スキー



（南西側）

（南東側）



無意根小屋設計図（北大山とスキーの会蔵）

部OBの宇都宮 崇氏と部員によりまだ雪の残るなかを候補地探しが行われた。4月29日には大野部長と部員が、冬でも雪がわれて水の出ている「スキー旅行者に十分な休息と心よい夢を結ばせるであろう場所」である候補地を確認した。建設費用は先生の義理の伯父にあたる鐘紡創始者武藤山治氏（2500円）と大野部長（500円）がおもに出資した。当初、設計は山崎春雄先生にお願いする予定であったが、ちょうど先生は外遊をひかえて多忙なときであったので、北大営繕課の太田氏に依頼することになった。3間に4間の2階建て、桎葺きの総坪数26坪、宿泊定員30名であった。内部の構造は空沼小屋に近いものであった。施工には札幌の沖津組（沖津熊次郎氏）があたった。建設にあたって、道路が問題となった⁽³⁾。当時、小川の上流二股（小屋から数km手前）までは、帝室林野局の道があったが、そのうえにはまったく道がなかった。さらに前年の出水でその道もすっかり洗い流されて、材木の運搬には用をなさなかった。帝室林野局との再三の交渉の結果、林野局が小屋候補地までの道を造成してくれることになり、建設資材はすべてその道を使ってスキー部

員により荷上げされた。小屋の建設は9月に始まり、11月3日に竣工した。同月13日には大野先生、栃内吉彦先生（山岳部長）、太田延雄氏ほかが参加して、小屋開きの式が行われた。こうして、定山溪を中心とした“ヒュッテの鎖”の一つとして、北大としては4番目のヒュッテが山深い無意根の山懐に完成した。



戦前の
無意根小屋
（札幌ウィンター
スポーツミュージ
アム蔵）

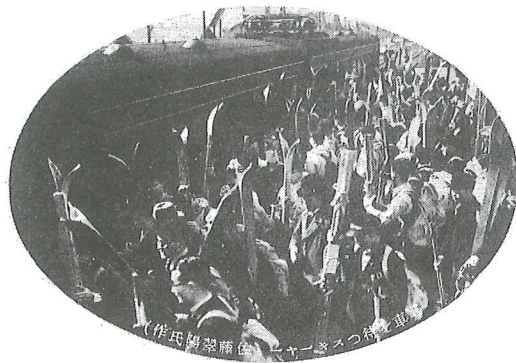
なお、このときの建設資金の余りを使って、同年10月に豊羽上流の廃屋を利用して、スキー部員の手により、長門ヒュッテが作られた。ただし、現在はない。

（2）賑わった無意根小屋

小屋の完成により、近郊随一といわれる無意根山の犬斜面の深雪スキーや1928年に完成した中山峠の



完成した長門小屋（1931年）
（札幌ウィンタースポーツミュージアム蔵）



スキー客で賑わう定山溪駅
（札幌観光協会パンフレット、高澤光雄氏蔵）
多くの市民が定山溪を起点として山スキーを楽しんだ。

中山ヒュッテへのスキーツアーを楽しむ人が増えた。定山溪の長老森田貞雄さん（82歳）は、その当時小屋の管理人をしていた叔父に届けるランプ用灯油の一斗缶などをアザラシのスキーを履いて運んだ。土曜日は大勢の人で賑わい、宿泊者が予定時間に帰って来なかったりすると、小屋の2階の窓からサイレンを鳴らした。定山溪から薄別まで馬轡を利用する人もいた⁽⁴⁾。

当初、小屋は建設の経緯から大野先生的小屋として、北大医学部産婦人科学教室が管理していた。宿泊費は夏期が30銭、冬期は50銭であった。1939（昭和14）年に先生はスキー部長就任15周年を記念して、小屋をスキー部に寄付され、さらに先生が退官された1948（昭和23）年には北大に寄贈された。戦争のため、小屋管理は充分でなくなり、戦後の荒廃した時代には、備品が盗まれるなどして小屋はいっそう荒れた。

しかし、戦後の復興とともに山やスキーを愛好す



無意根山での高松宮殿下（右から3人目）と
三笠宮殿下（右から2人目）（1949年2月、永野拓也氏撮影）

る人々が再び無意根に戻ってきた。1949（昭和24）年2月には、高松宮殿下と三笠宮殿下がスキー部OB・部員の案内により、小屋に泊まれ、無意根の深雪を楽しまれた。両殿下はその後ニセコでもスキー登山をされた。スキー部OBとして参加された和田晴氏はそのときの様子を以下のように記している⁽⁵⁾。

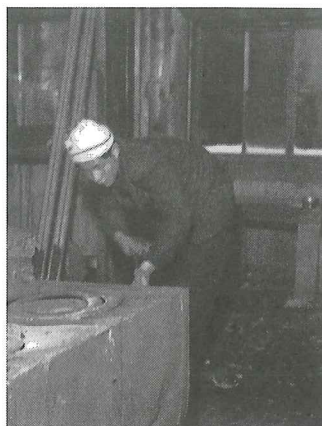
無事ご一行を青山温泉迄ご案内し終えて安堵感でドテラに着替えた西野兄と2人で温泉で疲れを癒そうと、タオルをぶら下げて下の浴室に向かった。丁度浴室の前でバツリとドテラ姿の両殿下と顔を合わせた私達は、恐縮してご遠慮を申し上げたところ『君達も一緒に入りたまえ』と思いがけないお言葉を頂いた。無意根山以来の山とスキーを通じてのお付き合いに、若さの無遠慮さも手伝って、『それではお言葉に甘えて』と学生諸君にも声を掛け、ご一緒に温泉に混浴させて頂く光栄に浴した。

広い浴槽に浸り、山での疲れを癒しながら冷えた体が温まってくると、そこは遠慮の無い若い者、裸同士の気安さから早速スキーの話や山の話が口々に自然に飛び出してくる。宮様も気軽に声を掛けられ次第にリラックスして歌声に替わり、山とスキーの歌が次々に湯気に煙る浴室の中にエコーとなって響く。その内三笠宮様から無意根のヒュッテで聴いた、“ツンツン節”のご所望があった。♪僕は予科生1年目 ツンツン 胸に五ツの星ボタン ツンツン♪延々と続く楽しい歌声に宮様も唱和されて浴室はコーラスとなって響き渡って行った。

1954年秋、剥げた屋根のトタンや腐った土台を修理するために小屋にきた大工や部員は、二日目の夜、北海道を襲った洞爺丸台風に遭遇し、強風により屋根の一部は飛び、倒れた大木により便所や小屋の一部が破損するという恐怖を味わった。1957（昭和32）年にも大修理が行なわれた。

（3）小屋の大改修

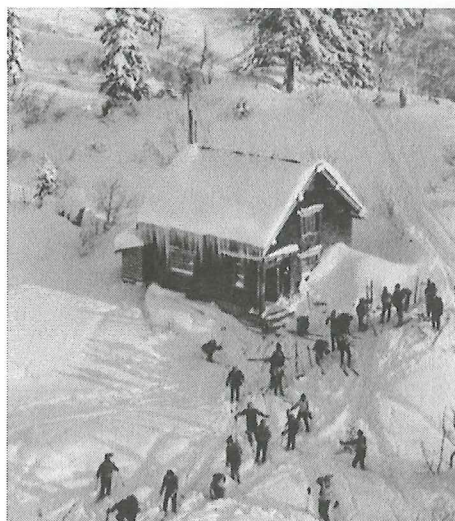
小屋は、その後も山スキー部員たちによる小修理で維持されてきたが、1989（平成元）年夏には山スキー部OB会と北大当局により、274万円の予算で大



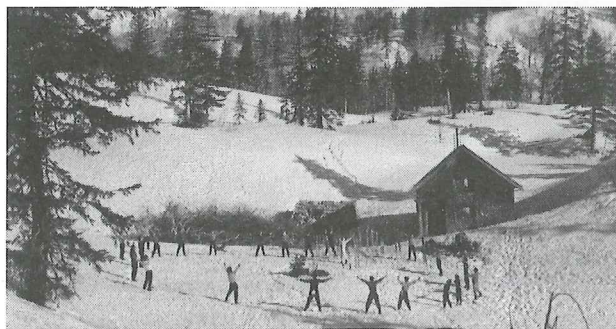
1952年1月の無意根小屋
（永野拓也氏撮影）

内部はかなり荒れていた。

改修が行われた。雪の残る4月に資材6トンがブルドーザー2台によって荷上げされ、6月17日～30日の間にすべての土台の交換、床張替、天井張替、窓枠交換などが行われた。工事の前半は3名の大工が入ったが、後半は連日10名ほどの山スキーの部員とOBたちの手により行なわれた。7月1日、学生課長以下4名の学生課一行を迎え、改修完工祝賀会を行い、伴 義雄学長に揮毫していただいた新しい看板が掲げられた。



冬の朝、無意根山頂へ
（1967年12月、在田一則撮影）



ゴールデンウィーク合宿（1960年5月、阿部孝夫氏撮影）

注

- (1) 板倉勝宣 (1898～1923) 東京に生まれる。学習院山岳部で活躍。学習院高等科卒業後、スキーをするために北大へ。農学部卒業。創立間もないスキー部でスキー登山をリード。1923 (大正12) 年1月、榎 有恒・三田幸夫とともに立山登山中、松尾峠で遭難死。著書「山と雪の日記」。
- (2) 加納一郎 第1章の注参照
- (3) 鈴木重雄、無意根小屋、北大スキー部部報、1931
- (4) 森田貞雄氏 (定山溪) 談
- (5) 和田 晴、雪山賛歌 (3)、北大山とスキーの会 会報 第24号、2000



伴 義雄元学長による新しい無意根小屋看板の揮毫
(1989年6月、阿部幹雄氏撮影)



土台交換のためジャッキアップされた小屋
(1989年6月、伊藤健次氏撮影)



窓枠も新しくした (1989年6月、在田一則撮影)



床もフローリングに張り替えた (1989年6月、在田一則撮影)



大工仕事の疲れを無意根小屋の美味しい湧き水による“そうめん流し”で癒す
(1989年6月、在田一則撮影)



改修資材の荷上げ (1989年6月、伊藤健次氏撮影)



暖かい小屋はまぢか (1983年1月、在田一則撮影)

第3章 山小屋とその周辺の登山とスキーコース

本章では、北大の5つの山小屋の現状と小屋周辺の登山およびスキーコースの概略を紹介します。登山コースなどの詳細については、市販のガイドブックなどを参照し、安全を期してください。

各小屋は自炊であり、炊事道具や食器などは完備しています。暖房は薪あるいは石炭ストーブです。寝具はありません。北大教職員・学生は無料ですが、

それ以外の方は下記の使用料がかかります。

利用するときは、各小屋とも、北大サークル会館（電話 011-706-3353）で予約をし、使用日の3日前までにサークル会館又は高等教育機能開発総合センター1階2番窓口（電話 011-706-7453）で使用料金を支払い、使用許可書を受け取ってください。

施設名	使用料金		使用可能期間
奥手稲山の家	夏期	———	閉鎖
	冬期	80円／1泊（1名）	12月1日～翌年4月30日の土・日
空沼小屋	夏期	180円／1泊（1名）	5月1日～9月30日の土・日
	冬期	290円／1泊（1名）	10月1日～10月31日の土・日
ヘルヴェチア・ヒュッテ	夏期	160円／1泊（1名）	5月1日～9月30日の土・日
	冬期	240円／1泊（1名）	10月1日～翌年4月30日の土・日
無意根小屋	夏期	100円／1泊（1名）	5月1日～9月30日の土・日
	冬期	140円／1泊（1名）	10月1日～翌年4月30日の土・日
手稲パラダイスヒュッテ	夏期	170円／日帰り（1名）	5月1日～9月30日の土・日
		490円／1泊（1名）	5月1日～9月30日の土・日
	冬期	210円／日帰り（1名）	10月1日～翌年4月30日の土・日
		610円／1泊（1名）	10月1日～翌年4月30日の土・日

1. 手稲パラダイスヒュッテと周辺のコース

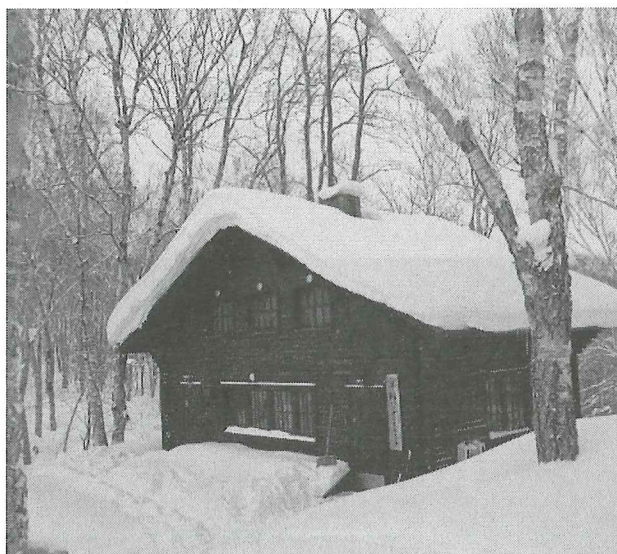
（1）手稲パラダイスヒュッテ

手稲パラダイスヒュッテは、ティネ・パラダイス・ヒュッテが1994年3月老朽化により倒壊した後、同年12月に手稲パラダイスヒュッテ再建期成会により復元再建されたものである。翌年4月北海道大学に寄贈された。場所は、手稲山頂の下標高約540mで、旧ヒュッテより西へ400mほど移動している。手稲山ロープウェーへの道路がハイランドスキー場手前でヘアピンカーブするところから右手（西）へ入る林道を250mほど行った右手にある。道

からはヒュッテは見えないが、林道の左側の電線が途切れている（そこで地下埋設になっている）のでわかる。JR北海道バスの終点（手稲ハイランドスキー場、あるいはロープウェー山麓駅）から歩いて、15分ちょっとである。道路から林道に入るところに木造のゲートがあり、無雪期にはその手前に駐車できる。積雪期には上の手稲ハイランドスキー場駐車場を使わせていただける。

宿泊定員は30名である。土・日曜日には小屋番がいる。再建時に地下空間を新設し、男女の洗面所と水洗トイレや研修室を設けた。研修室には、テレビ（テープ、DVD専用）、スライドプロジェクター、

OHPプロジェクター、液晶プロジェクターなどがある。また、汚水処理施設や太陽光発電設備も設置されている。



1月の手稲パラダイスヒュッテ（2003年、小河健伸氏撮影）

（2）ヒュッテ周辺の登山とスキーコース

標高1023.7mの頂上に行くもっとも簡単な方法は、標高576mのロープウェイ山麓駅まで車で行き、標高1,000mのロープウェイ山頂駅からちょっと歩くことである。老若男女を問わず、山頂からの定山溪天狗岳や烏帽子岳など定山溪方面や日本海の眺望を楽しむことが出来る。

手稲山には3つの自然歩道コースがある。北側の滝ノ沢コースは、手稲鉾山から滝ノ沢沿いに登り、旧オリンピック男子大回転コースの下やヒュッテの前を通過してハイランドスキー場に至る。また北尾根コースは、稲雲高校裏手から尾根道を行き、旧研修センター付近で車道に出るルートである。両ルートとも、スキー場ロープウェイの山麓駅からは管理用道路を歩いて山頂に向かう。南側の平和の滝コースは、西区西野の平和の滝から頂上に至るコースである。このコースは約5.5km、登り2時間30分ほどで、森の中の山道、滝（布敷の滝）もある溪流ぞいの道、手稲山の特徴である柱状節理にそって割れた岩石が積み重なった“岩場”（結構長い）などがあり、変化に富む。

手稲山は、1926年に我が国で最初の本格的スキーヒュッテが建てられたことでもわかるように、かつて

では山スキーのメッカであったが、大規模なスキー場が出来てからは、山スキーヤーはめっきり少なくなった。しかし、市内に近く、手軽にそれなりの山スキーを楽しめる。

ネオパラコース（積雪期）

手稲山東側の838mポコはネオパラ山と呼ばれ、北西側は手稲ハイランドスキー場の男女回転バーンとなっている。ネオパラはネオパラダイス、新しいパラダイスという意味である。したがって、この周辺が“ネオパラ”と命名されたのは、1917年頃に北大スキー部員が“パラダイス”を発見したよりも後のことであろうが、その命名がいつであったかは、はっきりしない。しかし、1935年北大スキー部発行の「札幌附近のスキーコース圖（改訂版）」には、“パラダイス”や奥手稲山の“ユートピア”とともにその名前が載っている（グラビアページ参照）。

この山の東側谷筋をつないで西野浄水場まで滑り降りるコースが、札幌周辺で最も手軽に山スキーを楽しめるネオパラコースである。登りは浄水場脇の除雪終点から歩き始める。最初は林道をたどっても良いが、沢沿いにショートカットもできる。320mからは沢の中を行き、420mで再度林道が交差するあたりからは徐々に左の斜面をトラバース気味に上がると第3斜面があり、さらに斜面の直上と右へのトラバースを繰り返すとネオパラ山の頂上に至る。

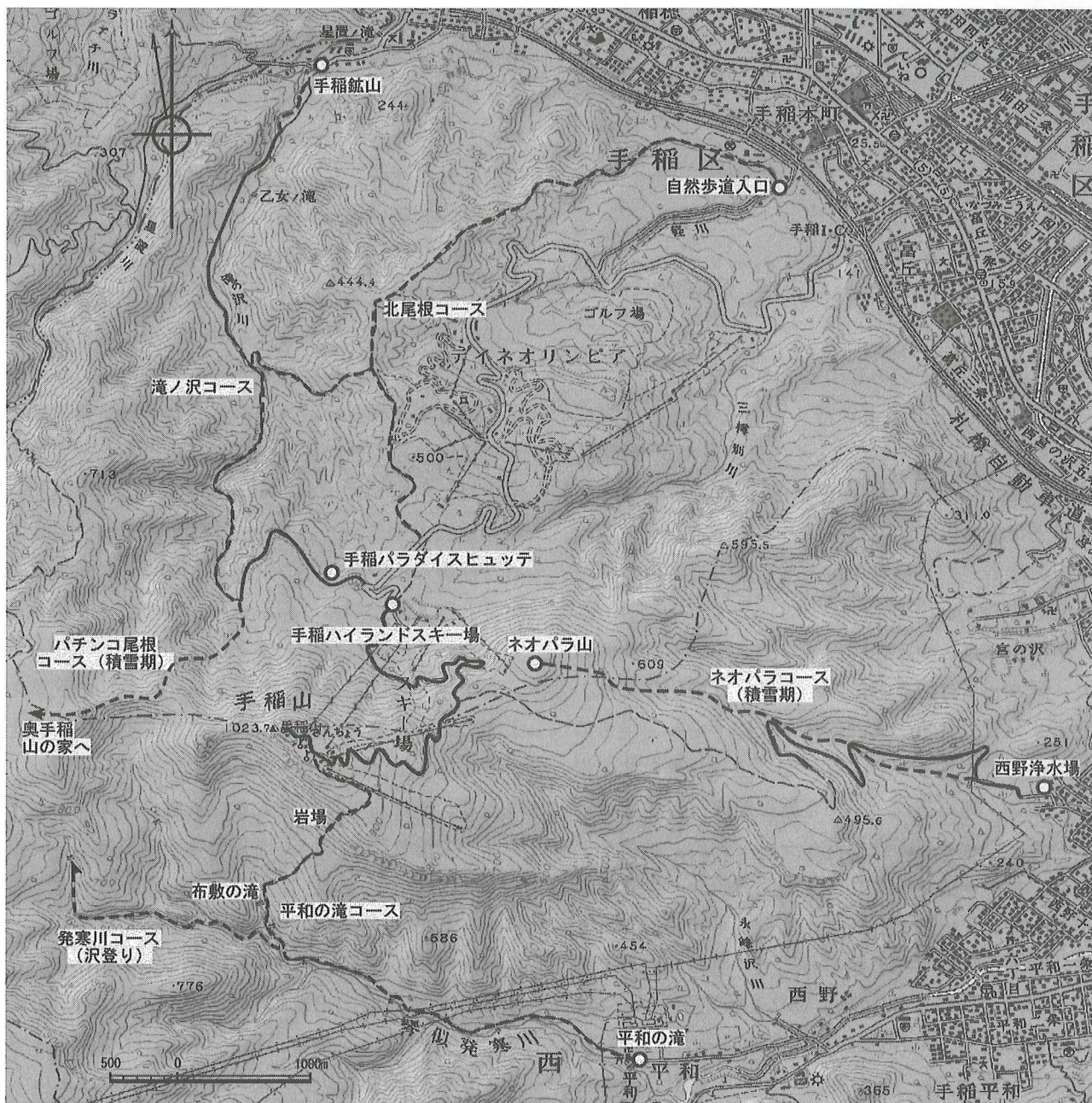
滑降コースは頂上直下の第1斜面、最初の沢型の上部にあたる第2斜面、浄水場に続く谷筋の一番上にある第3斜面とスキーに絶好の無立木バーンが3つあり、それらの斜面をトラバースの林間コースでつないで滑り降りていく楽しいコースである。

パチンコ尾根コース（積雪期）

パラダイスヒュッテから直線で4kmに満たない距離にある奥手稲山の家に行くルートとして、このパチンコ尾根コースがある。かつてはパラダイスヒュッテから奥手稲山の家やヘルヴェチア・ヒュッテへのスキーツアーコースとして利用されたが、ブッシュが多くなり、今はあまり利用されない。パチンコ尾根の通称も、ブッシュが多いのでパチンコ玉のようにジグザグ登高を強いられるからという。

ヒュッテ前の林道を西に進むと、オリンピック男子大回転のゴールハウス跡付近に、手稲山の西側稜線から落ちてくる二つの沢型が合流している。まず広くてなだらかな東側の沢型に取り付き、少し登ったところで中央の尾根を越えて西側の沢に入る。パチンコ尾根はこの沢の標高600mを越えたあたりから始まり、手稲山西側稜線から北に延びる尾根上の

810m付近まで西に向かって高度を上げる小さな支尾根である。ただし、このパチンコ尾根はブッシュの急斜面であり、登高にはかなりの苦勞を強いられる。北尾根から稜線に上がり961mポコまで行くと西側は緩やかに広がり、奥手稲山や奥手稲山の家まで自由なルートをとることができる。



手稲パラダイスヒュッテ周辺図

2. ヘルヴェチア・ヒュッテ

(1) ヘルヴェチア・ヒュッテの現状

定山溪の奥座敷、小樽内川左岸の標高約500mに位置するヘルヴェチア・ヒュッテは、かつてはスキーツアーの拠点として、多くの先人が銭函峠を経由して札幌から一日がかりで訪れるような人里から離れた場所にあった。桂岡から歩き始め、銭函峠を経て大合流に達し、小樽内川本流沿いの河畔林を歩いてようやくたどり着いた末に目にする小さな山小屋の姿は、それまでのラッセルの苦労や吹雪の寒さも忘れさせてくれるほどの安心感を与えてくれたに違いない。

定山溪から朝里峠に至る林道に除雪の入らなかった1970年代の後半までは昔と変わらない冬の姿があったが、1979年に札幌国際スキー場が開業するとその様相が一変した。定山溪からスキー場まで除雪が入るようになり、スキーヤーを乗せた観光バスや屋根にスキーを積んだ車が、ヒュッテから200mほど横の舗装道路をひっきりなしに往来するようになった。そのような時代の流れとともに、かつては1泊や2泊で訪れた白井岳や余市岳は札幌からの日帰り圏内となり、スキーツアーの拠点としてのヘルヴェチア・ヒュッテの意味合いは急速に薄れて行った。

また、山岳部員の数が多かった時代は、週末には四季を通じて部員が管理のためにヒュッテを訪れ、薪割りや雪かきに精を出したもののだが、部員数の減少に伴って週末ごとの管理に支障をきたすようになり、近年は毎年10月に開催されるヘルヴェチア祭りと数週間に一度部員が訪れることによって維持されている。

以前と比べて管理の頻度が少なくなったとはいえヒュッテは良く管理されている。南京錠を開けて暗いヒュッテに入り、煙の香りが残るひんやりとした部屋の中から雨戸を開けると、外には昔ながらの風景が広がっており、ヒュッテの中には大きな薪ストーブと煙で燻された太い柱に支えられた二段ベッドが差し込んだ光に浮かび上がる。忙しい日常を離れ、昔から変わらぬ時を刻むヘルヴェチア・ヒュッテを訪れると、何十年も前にタイムスリップしたような

錯覚に陥り、心和む時間を満喫することができる。ここ数年、2月になると小中学生を連れてヘルヴェチアを訪れ、周辺の山にスノーシューを使って登っている。森の中にぽつんと佇み、電気も水道もない山小屋に子ども達はすっかり魅了され、たっぷりと積もった屋根の雪下ろしも雪を融かしての水作りも彼らにとっては遊びと化す。極上のパウダースノーを巻き上げてのそり遊びや大木での木登りは、雪のある季節ならではの遊びであり、スノーシューを履いて手軽に登れる山があるのはヘルヴェチアならではのと言えるだろう。

スキーツアーの拠点としての意味合いは薄れたかもしれないが、アプローチが容易になった分、子どもや家族連れが訪れやすくなったというメリットを活かして、歴史ある山小屋を拠点とした自然体験や環境教育の場としての価値は今後ますます高まると思われる。



楽しみながら雪かきに精を出す子ども達

(2) ヒュッテ周辺の登山とスキーコース

ヘルヴェチア・ヒュッテ周辺には、登山道のある山はなく、沢登りに適した沢もない。そのため、ヘルヴェチアは夏山登山の拠点としては適さない。

一方、冬になるとここを拠点にしたフィールドが一気に広がる。白井岳や余市岳といった大きな山だけでなく、股下山やツゲ山といった標高の低い山も味わい深いものがある。近年、山スキーに加え、スノーシューで雪山を歩く人が増え、冬の低山ハイクが密かなブームになっている。また、経験ある引率者が同行すると、冬の低山は小学生でも楽しむことができるため、ここではヘルヴェチア・ヒュッテ周辺の低山のルートを紹介することにする。

股下山（標高820m）

ヘルヴェチア・ヒュッテを出て、小樽内川左岸を下流に少し下り、適当なスノーブリッジを見つけて対岸に渡る。河岸段丘の斜面は急なため、やや下流に歩いて小さい沢を詰めて段丘上に上がる。小さい凹凸のある平坦な林を抜け、股下山の頂上から北東側に派生する尾根の末端にとりつく。やや急な斜面をジグザグを切って登り、標高720m付近で傾斜が落ち、小さな起伏が連続する尾根上を行く。途中、小規模ながらも東側に雪庇が出ており、大事をとって樹間を進む。尾根は徐々に西寄りに向きを変え、標高差30mの斜面を登りきると間もなく頂上だ。頂上自体には木が生えていて視界はあまり開けていないが、頂上付近からは白井岳が大きく見え、定山溪天狗岳の雄姿も垣間見ることができる。

帰りは往路をたどるが、尾根上は吹きさらしとなっており、雪が強く締まっていることもあり、そういう時はスノーシューをはずすなど、滑落に対する備えが必要だ。

頂上から西北西にのびる尾根上やや下った北側の斜面や登路の標高730m付近の東側の斜面は、小さいながらもスキーを楽しむのに適している。



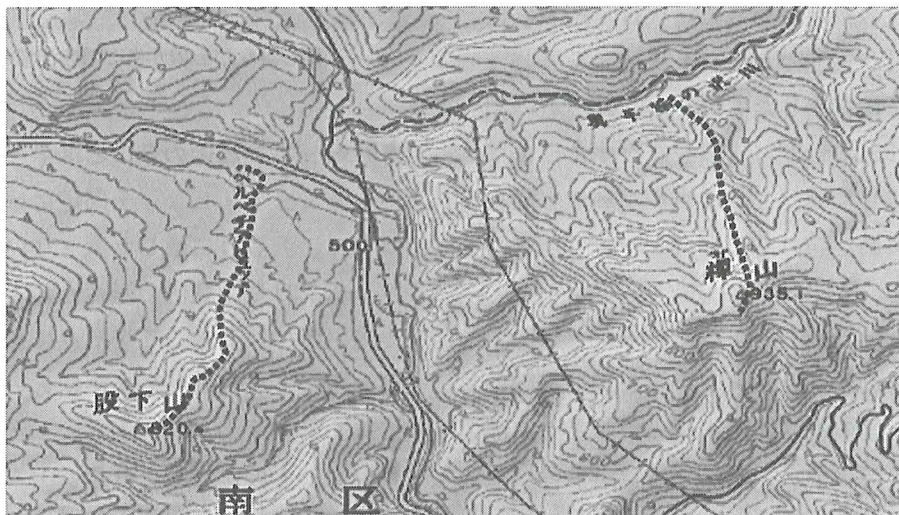
スノーシューを履いて股下山へ向かう子供達

ツゲ山（標高935m）

ヘルヴェチア・ヒュッテから車道沿いに定山溪方面に歩き、春香山へ伸びる林道をたどる。

奥手稲山の方に延びる林道に入り、夕日の沢（奥手稲の沢川）標高600m付近でツゲ山の山頂から北側に派生する標高尾根の末端にとりつく。あとは忠実に尾根をたどることになるが、標高800m付近の斜面が急で両側も切れ落ちているため、慎重に歩を進める。

登るにつれ疎林となり、頂上からは思いもかけず近郊の山なみのパノラマを楽しむことができる。頂上付近には小規模ながらもスキーに適した斜面がある。



ヘルヴェチア・ヒュッテ周辺図

3. 空沼小屋

(1) 空沼小屋の現状

空沼岳中腹にある神秘の万計沼のほとりにたつ空沼小屋は、私の大好きな山小屋の1つだ。学生時代、夏休みになると山岳部員が交代で小屋番に入り、ひと夏中小屋を開けていた。登山客が頂上に向かって小屋を出発し、急に訪れた静寂の中、窓辺に吊り下げられたハンモックに寝そべって涼風にふかれ、沼に移る雲の流れをぼんやりと見ていた風景を思い出す。

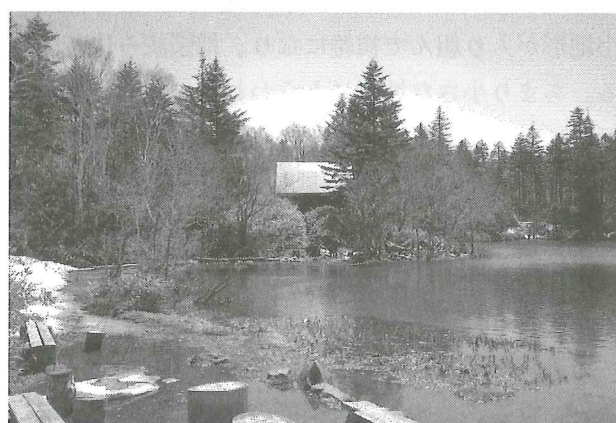
部員数の減少に伴って、やがて夏休みの「完全管理」も立ち行かなくなり、さらに週末ごとに部員が交代で管理に入ることさえまならず、現在の空沼小屋は荒れている。

山小屋を利用する登山客は、市民有志の手できちんと管理されている隣の万計山荘に足が向き、空沼小屋を訪れる人はほとんどいない。さらに、沼のほとりという立地条件が災いし、地盤のゆるい沼側の基礎が沈み、小屋は傾いている。1980年代前半にも同様に傾いた時期があり、北大山の会会員の勤労奉仕によるジャッキアップで、小屋を水平に戻したことがあった。あの時手当てをしていなければ、恐らく小屋はすでに崩壊していただろう。同様に空沼小屋を現状のまま放置すれば、遅かれ早かれ崩壊するのは目に見えている。

第1章にあるように、空沼小屋の歴史は古く、建築学的にも歴史的にもその価値は高い。同時に、山小屋は使われて始めてその存在価値がある。部員数の減少、モータリゼーションの影響による登山スタイルの変化などによって、以前のような管理の仕方や利用のされ方は今後望めないという現実は変わらないだろう。また、保存するためだけの管理では早々に破綻するに違いない。時代が変わり、人が変わったなら、その変化に合わせた山小屋の利用方法があるはずだ。多くの人が愛着を持って小屋を訪れ、持続可能な形で利用の方法を真剣に考えなければ、歴史的な遺産がまた一つ消えていくことになりかねない。

(2) 空沼小屋周辺の登山とスキーコース

古くから札幌市民の山として親しまれてきた空沼岳は、180万都市のすぐそばとは思えないほどの静けさに包まれ、中腹より上には原生林が広がっている。登山道も変化に富み、森の中の平坦な道を歩いたかと思うと溪流沿いのぬかるみ道となり、渡渉箇所を過ぎて左手に滝を見てややしばらく行くと突然視界が開け、目の前に緑に囲まれた万計沼が広がる。万計沼は四季折々にその表情を変え、中でも10月の紅葉シーズンには一年でもっとも美しい姿を見せてくれる。紅や黄色に彩られた木々とその姿を水面に映す風景を目の前にするときと心が洗われるに違いない。

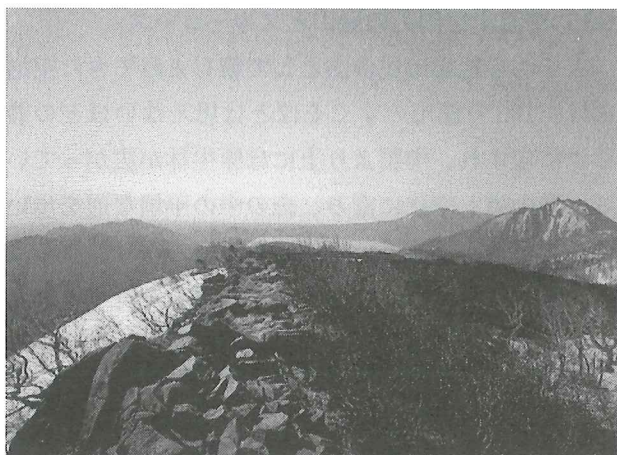


万計沼と空沼小屋

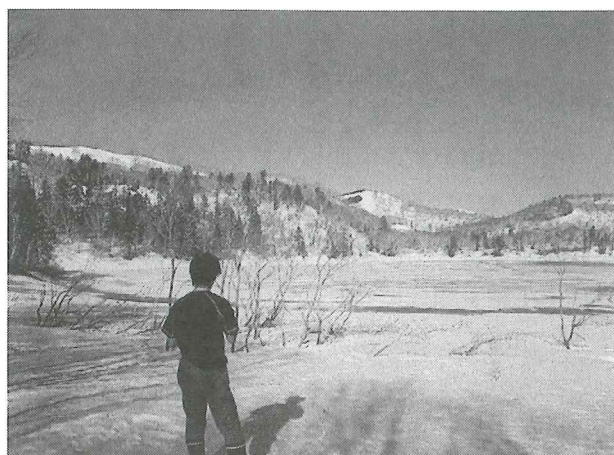
空沼岳の登山道に変化を与えてくれるもうひとつの沼は真簾沼だ。万計沼からさらに標高を上げた所に広がる真簾沼越しには札幌岳へと続く稜線が見え、空の広がりといまって疲れた体に開放感を与えてくれる。真簾沼からアップダウンを繰り返し、稜線にたどりついて尾根道を歩くと右手に羊蹄山が見えはじめ、最後の短い急登を終えると岩がちな頂上だ。頂上からは札幌近郊の山々のパノラマが広がり、見下ろすと札幌の街並みが彼方に望まれる。

夏の週末ともなると多くの登山客でにぎわう空沼岳も、雪に覆われた冬には山本来の静けさを取り戻す。登山道を忠実にたどって万計沼につくこともできるが、下りの楽しみを考えると薦められない。採石場から林道をたどり、登山道入口の橋をすぎてからもさらに林道を行く。

標高点 696 m のあるポコの基部で林道から離れ、



はるかに支笏湖を望む



空沼小屋と空沼岳の間に真簾沼が神秘的な色を湛える

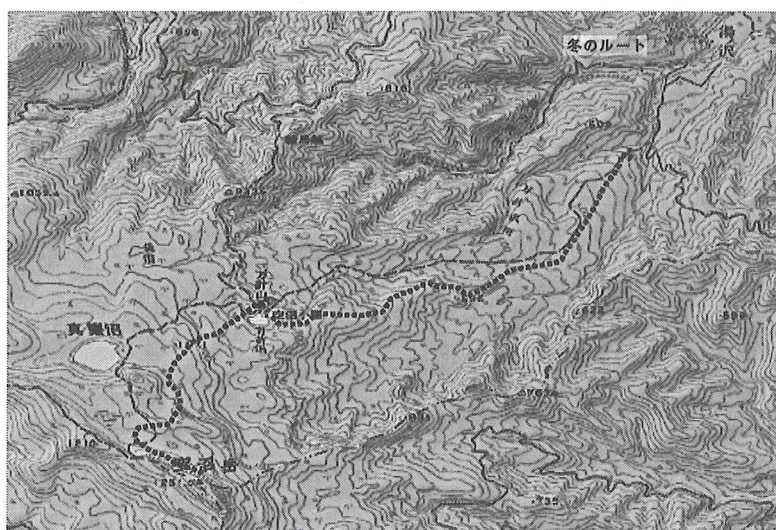
ポコの北東側の沢地形をたどって尾根に乗る。あとは忠実に尾根をたどるが、標高 800 m 付近から上は小地形が入り組んで複雑になり、地図読みに苦労する。あまり小さな地形にとらわれずに磁石を大胆に西に切って、万計沼の東側の斜面に当てるつもりでいくとよいだろう。標高差 20 ~ 30 m の急斜面を過ぎると徐々に傾斜が落ちて、すっかり雪に覆われた沼にたどりつき、雪化粧をした空沼小屋に出会うことができる。

万計沼から先も小さい地形に惑わされながら進むことになる。コルからは西側の窪地に入り込まないように 1153 m ポコの西側をトラバースし、東側からあがってくる緩やかな沢の源頭部を回り込むようにして登山道と合流する。

稜線の北東側には大きな雪庇が張り出し、吹き溜まり斜面となっているので雪崩に注意する。真簾沼

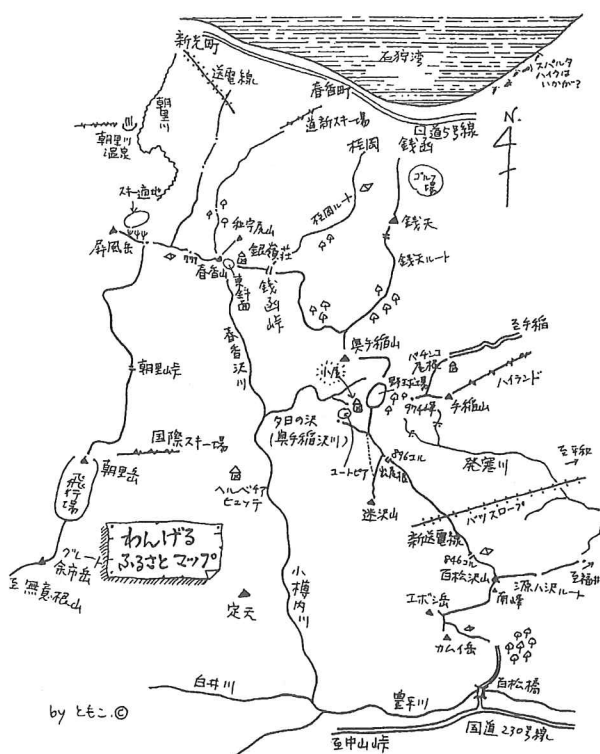
方面から上がってくる登山道が札幌岳からの縦走路と合流するあたりを目指して、小さな尾根を登ると雪庇の危険から回避しながら稜線に上がることができる。あとは稜線をたどり、登山道と同様に南西側から回り込んで頂上に上る。下りは往路を忠実にたどると、ほとんど登り返すことなくスキーを楽しみながら万計沼に帰り着くことができる。万計沼から下も同様に往路を忠実にたどる。下りにスキー滑降を楽しむには、下りを意識したトレースを心がけて登るといいだろう。

他に、空沼岳に至る冬のルートとしては、道々支笏湖真駒内線から金山沢沿いに登り、空沼（からぬま）経由の好ルートもあるが、紙幅の都合上ここでは紹介しないが、冬にしか訪れることのできない空沼はおすすめの場所とだけ申し添えておきたい。



空沼小屋周辺図

4. 奥手稲山の家と周辺のコース



奥手稲山の家は小樽内川の支流、奥手稲沢川の上流部、標高840mに位置する。この小屋は、北に奥手稲山、西につげ山、南に迷沢山、東に手稲961m峰に囲まれており、山スキーゲレンデとして古くから著名なユートピアを背後に抱え、美しい針葉樹の林間にたたずんでいる。この小屋には四季おりおり異なる趣があるが、積雪期が一番であろう。小屋からの夏道がない春香山、奥手稲山、ユートピア、つげ山、迷沢山など周辺のどの場所にも容易に行くことができ、手軽にスキーツアーが楽しめる。無雪期は樹木の繁茂のため、見通しは良くないが、沢のせせらぎ、風の音、鳥のさえずりが楽しめる。

(1) 無雪期

春香山に向かう林道ゲートから約500m進み、右折し奥手稲沢川右岸沿いの林道に入る。約30分歩くと林道終点である。ここが小屋の石炭のデポ地で、現役部員はここから小屋まで石炭を運び上げる。ここから沢沿いの歩道が続く。所々に赤いデポキがあり、それに従って約1時間で小屋に達する。歩道や沢の中は2004年9月の台風による風倒木がかなりあり、歩きずらく、何度かの徒渉が必要である。な

お標高780m付近の分岐点には木の上に赤い指導標があるが、暗い時には判別し難いので注意されたい。ここから南下して沢沿いの歩道に入り約500m進み小屋にたどり着く。初夏や秋には美しい新緑や紅葉が楽しめる。しかも歩道や小屋の周辺は山菜の宝庫でもあり、山ウド、ギョウジャニンニク、アズキ菜やいろいろなキノコを見つけることができる。

夏は発寒川を遡行して源頭まで進み、クマザザの生茂る尾根を乗越して小屋に達するルートもあるが経験者向けである。

(2) 積雪期

冬期に山の家に至るコースは以下に示すように多彩であり、それぞれ趣が異なる。

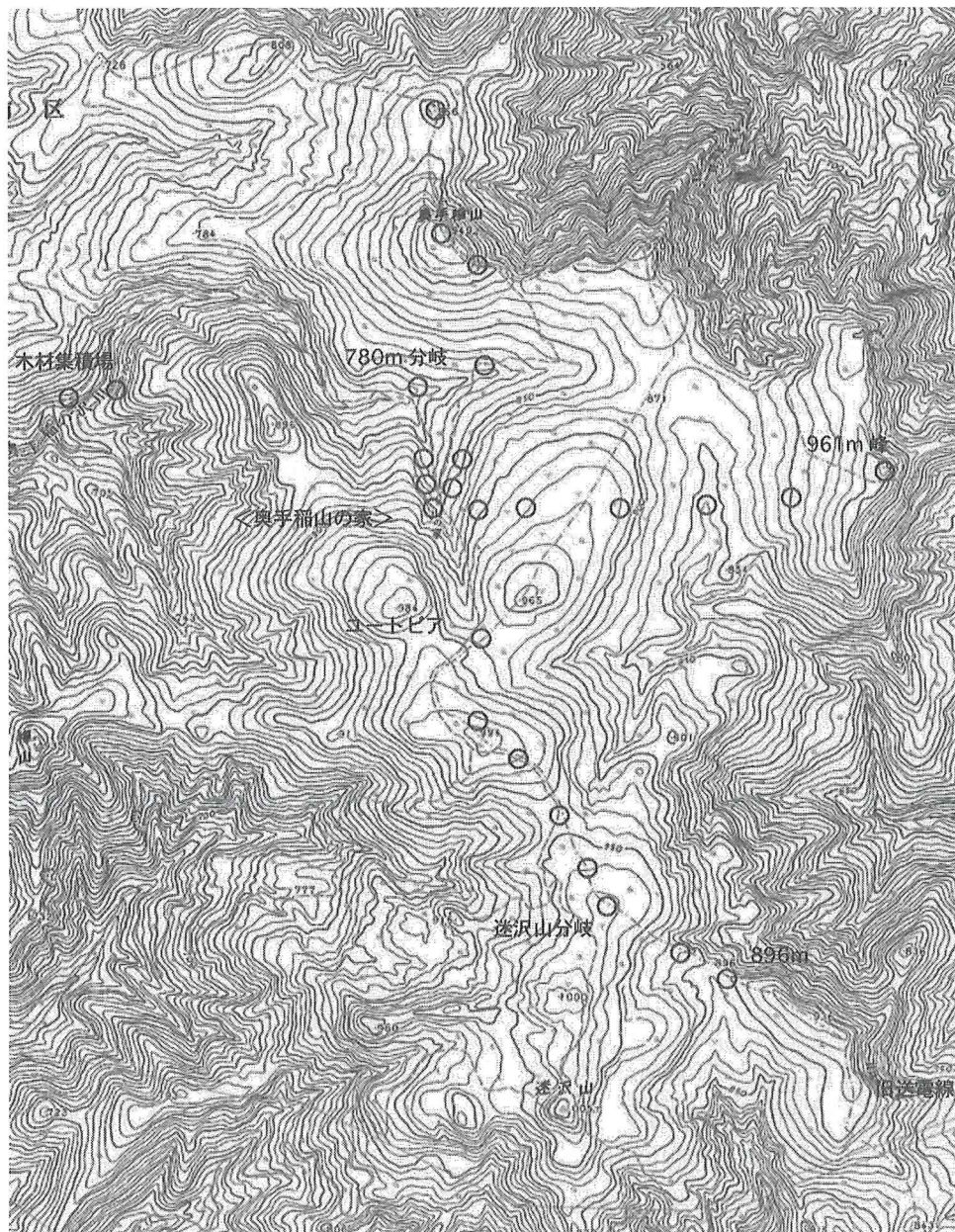
- (i) 961m峰経由コース：手稲山961m峰まではパラダイス・ヒュッテの項を参照されたい。961m峰から真西に向い、小さな谷にでて、樹木のない通称「野球場」を横断すると山の家上部に出る。961m峰から小屋まで6カ所の指導標が設置されている。なお、961m峰を手稲側に下る場合には、雪崩がしばしば生じる発寒川側に入らぬよう忠実に尾根を降りたほうがよい。
- (ii) 奥手稲沢川コース：無雪期と同様に林道を登る。林道終点付近から「トラバリコース 入口」の指導標に従い左岸に渡り、標高700m付近まで登り、尾根を回り込みながら小屋に達する。
- (iii) 奥手稲山コース：「手稲鉾山」バス停から林道（標識なし）を登り、ほぼ稜線付近まで達する。856mのポコと奥手稲山頂上には指導標がある。ここから樹間をほぼ南に滑走して小屋に至る。
- (iv) 送電線コース：発寒川からほぼ新送電線（南側）又は旧送電線（北側）沿いに登り、稜線に達する。ここから西に目を向ければ無意根山、定山溪天狗岳、余市岳、白井岳が飛び込んで来る。眼下には札幌市街が広がる。稜線上を忠実にたどり標高896mに至る。この付近で市街の明かりを眺めながら夜を過ごすこ

とも面白い。ここからは稜線沿いに小屋まで指導標がある。又、小樽内川支流の上平沢川の林道を使い迷沢山を経て、このコースをたどることもできる。

- (v) 銭函峠コース：かつてはヘルベチア・ヒュッテ向かう場合にも多用されたコースであるが、現在はほとんど用いられていないようである。銭函峠から稜線をたどるか、標高に沿っ

て南下して奥手稲山の西斜面に向い、山の家に至る。又は峠から林道に沿って下り、奥手稲沢川に入るルートもあるが、時間がかかる。

上記の始めの四コースには山の家から約半径2km間にそれぞれ数カ所のスキーツアー用指導標（赤地に兎と距離、グラビア参照）が設置されており、その位置を下の地図に示した。



奥手稲山の家周辺に設置された指導標の位置図
(国土地理院2万5千分の一地形図「手稲山」、「銭函」を一部改変)

5. 無意根小屋と周辺のコース

(1) 無意根小屋

無意根小屋は薄別側登山コースの途中、通称“壁”と呼ばれるジグザグの急登が始まる少し前に静かに立っている。標高は1,020mである。元山コースの稜線上を歩くと、眼下に望める小さな赤い屋根が印象的である。

小屋は収容30名の無人小屋で通年開放され、だれでも利用できる週末や夏休み期間中は北大山スキー部の学生が小屋番に入っており、古いがとても綺麗に管理されている。

小屋には暖かい薪ストーブがあり、また原始水道からは、自慢のおいしいわき水が通年枯れることなく流れ出ている。



真冬の無意根小屋（佐々木尚三撮影）

(2) 小屋周辺の登山とスキーコース

積雪期の無意根山は、天気の良い日には札幌市内からもひととき白く輝いて見える。そのなだらかな山容と、札幌近郊の山々では雪のシーズンが最も長いことから、古くから山スキーの山として親しまれている。また無雪期には、“大蛇が原”の湿原植物や頂上近くの残雪あとに現れる高山植物のお花畑、汗をかいて到達した頂上からの羊蹄山やニセコ連峰の見事な眺め、さらに変化に富んだ沢登りの楽しめる白水川など、魅力の多い山である。

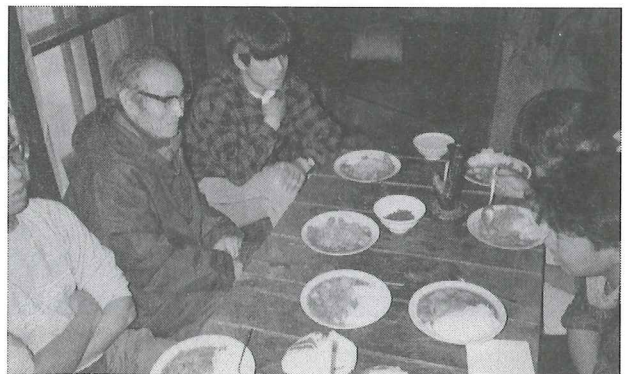
薄別コース

薄別コースは宝来沢林道の一般車両通行が禁止されているため（2006年夏現在）、国道230号線の薄別が登山のスタートとなる。そのため最初のおよそ5kmは単調な林道歩きを強いられることになり、このコースを利用して無意根山を訪れる登山者は夏場の週末でもそれほど多くない。しかし“大蛇が原”や無意根小屋など魅力的なポイントがあり、一度は歩いてみたいコースである。

薄別コース登山道入口には宝来小屋と呼ばれる丸太の入林ポストが立っている。地形図ではこの宝来小屋の位置が違っており、実際は宝来沢（地図上では小川と標記）750m二股の尾根上で、標高800mのところである。林道はここから方向を南に変えて続いており、小白山の西側を通過して950m付近で白水川を渡っている。

宝来小屋で林道を離れるとやや急な“見返り坂”を越え、エゾ・トドの優占する混交林の中をしばらく行くと、小沢を渡って“大蛇が原”である。ここは湿原植物や周りを囲むアカエゾ越しに見上げる稜線が美しく、おもわずカメラを構えたいところである。しかしこの“大蛇が原”も、この20～30年の間にかなり乾燥が進んでいるように見える。早急に登山者の歩く範囲を限定することが、この美しい湿原を守るために必要であろう。“大蛇が原”からほどなくして無意根小屋に到着する。薪に板を打ち付けた簡易ベンチで休憩し、小屋の水道の美味なわき水で乾いたのどを潤して、後半の急登にそなえよう。

小屋から少し歩くと“壁”の急登である。所々に崩壊部分があり、ロープが固定されている。ここは



山小屋の定食

特に地面が濡れているときには滑りやすく、夏道といえども細心の注意が必要である。この急登が終わると広い台地上の“テラス”に出て、ダケカンバの疎林の中を高度を上げていく。右側から元山コースが合流すると、頂上のパノラマはもうすぐである。

〈コースタイム〉

薄別（1.5時間）宝来小屋（1時間）

無意根小屋（1.5時間）無意根山頂

薄別コース（積雪期）

積雪期のこのコースは、長い林道ラッセルがあることから敬遠されることも多いが、小屋の存在に加えてスキーの楽しいスロープもあり、夏道同様に魅力的なコースである。

宝来小屋で林道を離れると、小屋まではほぼ夏道に沿って歩くのが一般的であるが、特に“見返り坂”から“大蛇が原”の間は地形が複雑であり、地図読みには神経を使うところである。左の宝来沢から離れないように歩いて行き、993m標高点の南側を過ぎたところで小沢を渡ると白銀の“大蛇が原”を経て、小屋に到着する。

小屋の上部の“壁”は雪崩の危険があり、雪の安定した残雪期以外は通過できない。小屋のすぐ南側の斜面を登り、東側から回り込むようにして“シャンツェ”の尾根にとりつく。ここはダケカンバの疎林であり、下りには絶好のスロープとなる。“テラス”からはまた夏道に沿って高度を上げ、稜線で元山からのコースと合流する。なお“テラス”から上部は視界が悪いときは目標がなくなるため、地図読みには注意が必要である。とくに頂上から“テラス”を滑り降りるときは、右手に発達する雪庇に十分注意する必要がある。

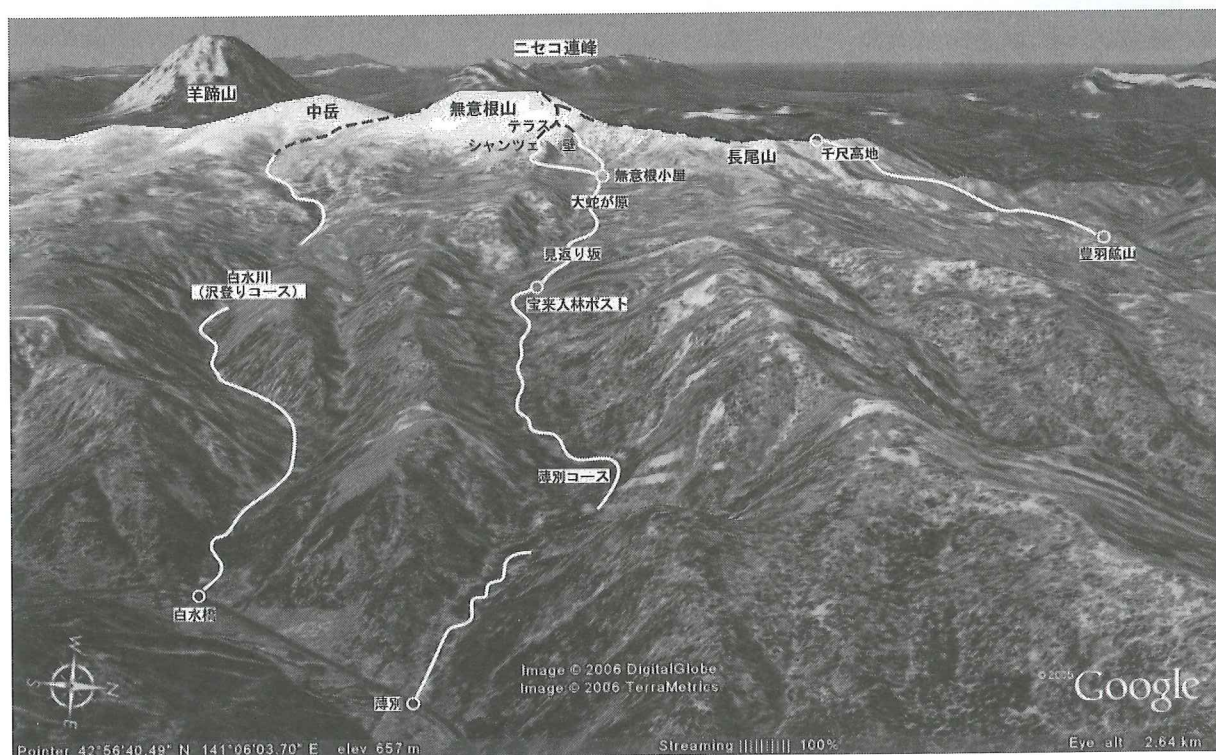
〈コースタイム〉

薄別（2～3時間）宝来小屋（2～3時間）

無意根小屋（2～3時間）無意根山頂

元山コース

最近は薄別コースの林道を嫌って、こちらを利用する登山者も多い。豊羽鉾山の旧無意根山荘前が登山口である。積雪期・無雪期ともにほとんど同じルートであり、夏道ははっきりした刈り分けになっている。積雪期には千尺高地までを目的地とする山



©2005 Google, ©2006 Digital Globe, ©2006 Terra Metrics

無意根山の登山・スキールート

第4章 各クラブの歴史と現状

北大の5棟の山小屋はヘルヴェチア・ヒュッテと空沼小屋が山岳部、手稲パラダイス・ヒュッテと無意根小屋が山スキー部、奥手稲山の家がワンダーフォーゲル部によって管理されている。各クラブは山小屋を北大のそして自分たちの大切な資産として守り、山小屋生活を楽しんできた。山小屋で育った若者たちは、世界へ羽ばたいて行った。そのような若者達の育った各クラブの歴史と現状を紹介する。

1. 北大スキー部と山スキー部 (HUSV)

(1) スキー部の競技班と山班

北海道における登山は、本州とは異なり、スキー登山から始まったといえる。それには半年以上雪に覆われるという北国の寒冷と夏には人跡未踏の鬱蒼とした森林や稜線部は獐猛な根曲り竹や這松覆われるという北海道の山の本州とは異なった自然条件が反映しているのであろう。

北大では、1908（明治41）年にハンス・コーラー先生からスキーというものを教室で紹介された学生たちは、先生にスキーとスキー指導書をスイスから取り寄せてもらい、手探りながらそれに熱中した。彼らは1912年6月にはレルヒ中佐の弟子である三瓶勝美中尉らのスキー講習会に参加し、その年の6月にスキー部を創立した。12月には第1回スキー部スキー講習会を開催している。彼らの意気込みが伺える。当初は山スキーと競技スキーの区別は無く、当時スキー部から刊行された「スキー術教程」にはスキーの基礎、スキー競技、登山技術が網羅されている。しかし、その後スキー競技が盛んになるにつれて、競技を目的とする“畑党”と登山を指向する“山党”に分化し始め、1926年に後者は山岳部を創立した。山岳部は第1章にあるように、北海道の登山の開拓者として輝かしい歴史を築いた。また、スキー部の畑党も1928年第1回全日本学生スキー選手権大会で優勝したのをはじめ、その後の私立大学スキー部の台頭に抗しつつ、戦前は常に上位を争った。

半年以上が雪で覆われるという北海道の山の特徴

性から、山とスキーを考えるうえで、山党から山岳部が独立したように、大きく二つの考え方が存在する。スキーを登山の道具と考えるか、スキーを楽しむために登山をするか、である。つまり、山（自然）とスキーの主従関係である。山（自然）を主体と考える人たちはスキー部（山党）をでて、山岳部を作った。しかし、山（自然）とスキーの調和を重視し、半年以上雪で覆われた北海道の山々をスキーで跋涉することを好んだ人たちはスキー部に残り、山班を形成した。スキー部には競技班と山班が存在した。山班は山スキーを主体とした独自の登山活動を行なうとともに、テイネ・パラダイス・ヒュッテ、空沼小屋、無意根小屋、さらに一時は冷水小屋も管理していた。戦後しばらくまでは、伝統の年末の青山温泉スキー合宿や小屋番などには、競技班も山班も参加し、競技班はパラダイス・ヒュッテで春の合宿を行っていた。山班メンバーは札幌近郊での競技会では遠いコースに立ちつくして競技班の仲間を応援した。しかし、スキー競技が先鋭化するにつれて、目的が異なるグループが一つの部を作ることは困難になり、多くの葛藤と紆余曲折をへて、1964年にスキー部の山班と競技班はそれぞれ独立のクラブを作ることになり、山班は山スキー部を名乗ることになった。

(2) 山スキー部の活動

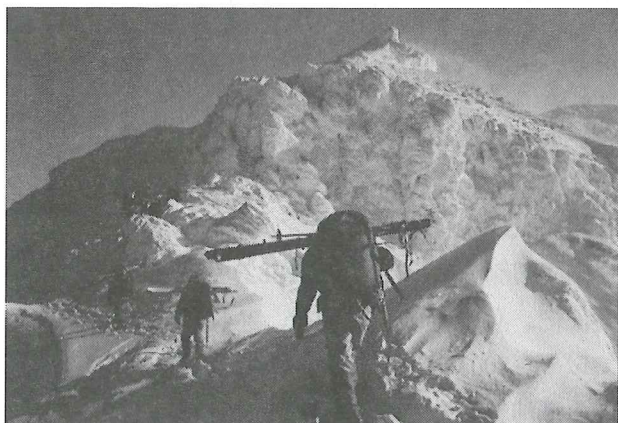
創立以来の山スキー部の活動は、1960年代後半の山スキー部黎明期、70年代の大雪山系開拓、80年代の日高山脈開拓、90年代の海外遠征と時代時代で注目されるトピックスは挙げられるが、スキーで山野を跋涉し、山・スキー・人の三位一体を志向するという理念はスキー部の発祥以来山班を通じて世代を超えて継承され、現在もスキーの行動力を活かし、スキーをつうじて山と雪に戯れる楽しさを追求して道内各地の山域にシュプールを刻んでいる。そのような活動は、ヒマラヤやカナダなどの海外にも及んでいる。とくに1990年の北千島におけるスキー登山は、戦後初めてこの地域に日本人が入ったという意味でも意義あるものである。また、2000年にはOB

がヒマラヤの8000m峰のほぼ頂上からスキー滑降を行なっている。

1970年頃までは部員数も数10名を越え、90年代にも30名を保持して、メイン山行では7～8パーティーを数えていたが、2000年以降は徐々に部員数が減少し、最近では15名前後のことが多い。しかし、部員減少の中で、女性部員はその存在感を増してきている。体力差を日々のトレーニングで克服し、男子部員と遜色ない経験を積んで積雪期の日高、大雪、知床に自らのシュプールを刻んでいる。また、2004年には初の女性主任も誕生し、少ない部員での厳しいクラブ運営にもその手腕を発揮した。

4年で人が入れ替わるという大学のクラブの宿命から、技術や経験の継承が課題であるが、「研究講座」というチームを編成し、氷雪技術、気象、遭難対策、雪崩等テーマごとに学習・発表会を行い、部内の技術の向上に努めている。また最新情報を求めて雪崩講習会に参加するなど、外部の情報も積極的に取り入れ、OBの協力もあり、1991年には全国の大学に先駆けて雪崩ビーコンの組織的導入も行い、危機管理体制を強化している。

山スキー部の1年間は、無意根小屋を拠点に活動を展開してゆく。4月中旬には入部希望者の歓迎山行として無意根小屋を訪れ、山スキーと山小屋生活の魅力を伝える。入部の決意を固めた新入生はGW連休に無意根小屋の合宿に入り、体力作りとスキー技術向上、山登りのイロハを鍛え込まれる。新入生が無意根で合宿中に、2年生以上の上級生パーティーは日高山脈や中央高地などスケールの大きい山域で快適なザラメの斜面にシュプールを刻む。5



旭岳、北崖屏風岩附近（小河健伸氏撮影）

月下旬には春の無意根小屋祭と称し、煙突掃除や屋根のペンキ塗りなど小屋のメンテナンス作業を行う。

6月上旬には最後の残雪を求めて大雪山系旭岳で「サマースキー」。一週間登って滑ってを繰り返すと新入生もすっかりたくましくなる。また、この山行で3年生がリーダー、2年生がサブリーダーを経験し、スタッフとしてパーティーのまとめ方も学ぶ。サマースキーの後は夏山シーズンとなる。小樽赤岩で岩登りや近郊の沢でトレーニングを積んで沢登りを目指すもの、夏山縦走や秘境知床の海岸歩き、わずかに残る雪渓を求めて中央高地のスキー縦走を目指すもの、短い北海道の夏を満喫する。

年間を通じて週末は部員が交代で無意根小屋の管理に当たっているが、7月後半から9月までの大学の夏休みの期間は、平日も交代で無意根小屋の小屋管理に通う。夏山シーズンで訪れる人も多く、小屋番が差し出した一杯の冷たい湧き水に感謝されることも。こんな小さなコミュニケーションも、無意根小屋で経験できる大きな宝物の一つである。10月の紅葉の頃には秋の小屋祭。部員総出で来るべき冬に備えて小屋のメンテナンスを行い、夜はろうそくの灯りの下で飲み語り、これからのスキーシーズンに思いを馳せる。

11月末に山が新雪に覆われると、旭岳でシーズン開幕を迎える。1年生はシール登高に悪戦苦闘し、新雪スキーの難しさに新たな課題を見出す。2年生は北崖尾根からピークを目指し、アイゼン・ピッケルワークやザイルワークの確認をし、冬山技術の向上を図る。山スキー部では基本的に4年生がリーダー、3年生がサブリーダーで、メンバーは1年生と2年生を分けてパーティーを組むことが多く、1年生は基礎の習得、2年生はより高度な山行への挑戦が目標となる。12月下旬、1年生は再び無意根小屋での合宿に入る。新雪スキーの練習はもちろん、地図読みや天気図記入、ビーコン捜索訓練、雪洞ビバーク訓練など冬山技術の基礎を身に付け、正月休みにかけて道内各地の山行に備える。2年生パーティーは無意根合宿には入らず、十勝連峰等で準備山行を積み、正月山行を目指すことが多い。

世界に誇るパウダースノーが楽しめる北海道に

あって、1～2月はベストシーズンとなる。週末がくると道内あちこちのスロープに繰り出す。

2月下旬には一般学生や市民を対象とした2泊3日の「無意根スキーツアー」を企画している。無意根の深雪と山小屋生活にすっかり虜になった常連さんもあるほどの人気で、部員も普段なかなか接することのないいろんな世代のお客さんを連れて山に行くことで人間的にも成長する。

3月になると春らしくなり、4年生は山スキー部の集大成として思い描いてきた卒部山行へと向う。

このように山スキー部としての活動のスタートは無意根小屋の合宿であり、「僕らの故郷」と慕ってやまないのである。

2. 北大山岳部 (AACH)

(1) 山岳部創立と海外への挑戦

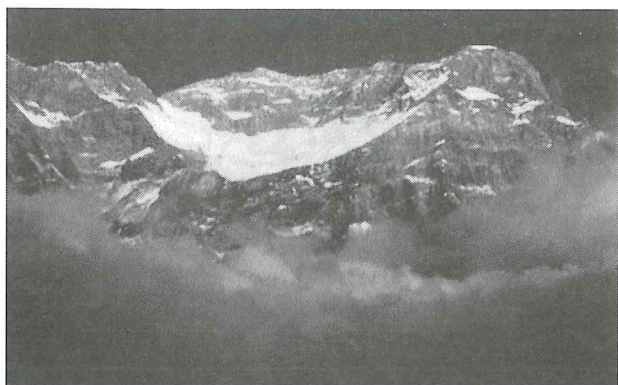
北大山岳部は1925(大正15)年11月10日に創立された。この年、北大創基50周年の記念式典が挙行され、また北大文武会スキー部は創立15周年に当たり、手稲山にテイネ・パラダイス・ヒュッテを建設した。当時学生で山の好きな連中は皆スキー部に集まっていたが、競技スキーに全く関心の無い山の連中が、スキー部から独立し山岳部を創立したのである。山岳部は歩みだすや否や、直ちに活発に歯車が動きだしたが、それは先頭に立った沢本三郎、伊藤秀五郎始め有能な部員が多士済々であったことによる。

わが国の大学山岳部のほとんどが本州の山を活動の場にしたのに対し、北大山岳部は北海道の山を中心に活動を重ねてきた。標高と岩場において本州の山に劣るが、昭和の初期までは原始の色濃く、未踏の山頂と溪谷が少なからず残っていた。先輩達は本州の既知の高山よりも、原始と未知に溢れる北辺の山に惹かれたのである。これは北大の気風と無関係ではない。第二の特色は、寒冷と氷雪に対する豊かな経験であろう。北海道の冬の高山は夏と相貌を一変し、登攀を唆って止まない。悲しむべき遭難事故を伴ったが、厳冬期初登頂のほとんどが北大山岳部によって行われたと言ってよい。そのために雪洞とイグルーの研究を進め、冬期登山の新しい技術を導入した。これも氷雪の豊かな経験によるものである。氷雪への愛着は部員を冬の高山のみならず、南極での越冬、北極海の氷島調査、アラスカ、パタゴニア、ヒマラヤの水河調査に赴かせた。

北海道の高山が四季を通じて登頂された後、山岳部がヒマラヤを志向したのは自然の成り行きであった。それは1962(昭和37)年チャムラン峰(7319m、東部ネパール)の初登頂を果たし、その後も多数の部員が未知の高峰を求めてこの山域に赴いた⁽¹⁾。

南極観測隊には1957(昭和32)年の第一次隊に中野征紀、佐伯富雄、菊池徹、小林年の4名が参加して以来、2005～2006年の第47次隊に参加の地学系部門の澤柿教伸まで17名が参加している。

海外遠征隊はチャムラン峰以来28の登山隊と4調



ダウラギリ

査隊が、世界各地へ出かけている。この中で特筆すべきは1960年初期から研究を続けたヒマラヤの厳冬期登攀への挑戦である。それは1980/81年のバルンツェ峰（7220m）登攀であり、それに続く1982/83年のダウラギリ I 峰（8167m）登攀として結実した。山岳部OBで国立極地研究所長となった氷河学者の渡辺興亜は、北大山岳部がヒマラヤ厳冬期登攀を目指した背景について次のように述べている。「私にはこの冬期登攀の構想が、AACHの創立当時から、さらにはその背景である北海道大学にスキーが伝えられ、冬期登山が始まったときからの、いわば寒冷の系譜とも言うべき一つの自然観の流れの中に位置づけられるように思われる。なぜならば、我々がヒマラヤ冬期登攀の構想を持ったとき、このような構想は何処にも無く、なんら他の影響を受けず、内発的にそれを将来の目標に設定したからである。こうした構想は偶然や思い付きで生まれるものではなく、何らかの登山思想をその背景に持っていたと考えざるを得ない」⁽²⁾。

ダウラギリ以降もヒマラヤへの挑戦は、1992年ヒムルンヒマール、1996年タンナ・リと続いた。ヒマラヤに未踏の高峰がなくなり、旅行社がエヴェレスト登頂を募集する時代となった現在も海外への挑戦は続く。それはカムチャツカであり、登攀力をつけた現役と若手によるデナリ（アラスカ）であり、ヨセミテ（北米）であり、コルディエラ・ブランカ（ペルー）である。

（2）最近の部活動

昭和期に最大70名の部員を擁した山岳部であるが、平成期に入ってから10～20人に減少し、新

入部員もこの数年は5名以下となっている。このため、戦後山岳部が取り組んだ冬期の十勝大雪全山縦走（1951）、日高山脈全山縦走（1956）、カムイエクウチカウシ岳集中登山（1961）、ペテガリ岳集中（1964）のような40名前後の部員が参加する大規模な山行や、千島・カムチャツカ研究（部報13号）とその実践（1990、1992、1997、部報14号）のような力の要る計画は、現在の部員数では無理かもしれない。しかし、山に憧れる部員達は昔と変わらず日高へ、大雪へ、本州へ、海外へと山行を続ける。

山岳部の一年はゴールデンウィークの春合宿から始まる。春合宿は戦後新入生のスキー練習を主目的に始められたが、戦前から山岳部が合宿を行ってきた十勝岳周辺その他、美瑛谷、原始ヶ原、オプタテシケなどで行われる。1年生は上級生の指導でスキーや雪山技術の基本を学び、上級生で編成された2年班はスキー、アイゼンを履いて身軽に山や谷を駆け巡る。春の暖かい陽光のもと、部員全員が参加する1年で最も楽しい山行である。

6月中旬～9月初旬は夏山である。週末に2～3回の準備山行で足慣らしをし、いよいよ待望の日高、大雪である。夏道を使ったハイクも良し、岸壁を攀じるも良し、しかしなんと言っても沢登りが最高である。滝壺を泳ぎ、しぶきを浴びながら滝をよじ登る、そしてブッシュ帯にとりつき、山頂を目指す。メイン山行は4年生がリーダーとなり1パーティー4～5人で構成される。

11月初旬～1月中旬は冬山である。週末に3～4回の準備山行とクリスマス頃に5日間の冬合宿で冬山技術を身につける。メイン山行は北海道全域に4年生がリーダーで4～5名のパーティーで構成される。北大山岳部の特徴は、北海道の厳しい冬を活躍の場としてきたことである。もっとも北大山岳部の伝統が生かされる時である。

北大山岳部における登山練習合宿は、その初期からスキー合宿の名で呼ばれていた。当時の北海道の冬期登山において、登山技術としてのスキーの役割を考えれば、これは極めて当然のことであった。合宿はスキー練習、地図を読みながらの登り方、ラッセルの付け方から始まり、シーデボー以高のアルバイトを含む行程において、総合的な冬期登山の能力

を養う場であった。合宿の場所は昭和40年代末まで十勝だけを中心に行われていたが、このあたりの環境開発が進み、山行のレジャー化の波がここにも押し寄せ、山らしさが減少したことなどから、原始が原とかオプタテシケまたは美瑛岳の森林限界付近で天幕をベースにした合宿が行われるようになった。

戦後、在学年数が短くなったために新入生を教育する立場から、春の合宿を設けて新入生のスキー練習を主目的とし、冬は氷雪技術や露營に力を入れるようになった。部員の数が減った近年は、冬山の準備山行が合宿の代わりとなり、氷雪技術訓練は其中で行われるようになり、冬の合宿は行われなくなっている。

2月下旬～4月上旬は春山である。いよいよ1年間の締めくくりである。これまで身につけてきた技術を発揮し、それぞれの可能性に挑戦する。週末に2～3回の準備山行で足慣らしをし、最高の充実感を求めて、大雪へ、日高山脈へ、日本アルプスへと出かける。

部員の多かった時代、週末は入れ替わり立ち代り部員達が小屋管理に出かけた。部員の少なくなった現在は春の空沼祭、秋のヘルヴェチア祭、薪の準備などの用事のある時に小屋の修理、清掃などが行われる。部員が小屋へ出かけ管理する回数は昭和期に比べると減っているが、小屋小屋を愛し、小屋生活を楽しむことは昔も今も変わらない。



現役山行

3. 北大ワンダーフォーゲル部 (HUWV)



部章

(1) はじめに

全国的なワンダーフォーゲル運動に先駆けて、北海道大学ワンダーフォーゲル部（以下HUWV）は半世紀前の1955年に産声を上げた。初代主将の土岐基は、創部趣旨の中に“自然に飛び込んで……、自然にとけ込む”とアルピニズムに対する自然融和的な旅というワンダーフォーゲル像を明確に掲げた。まともな装備もないまま始まったヨチヨチ歩きのは活動は、今や四季を通じて道内外はもとより海外へも広がり、若きワンデラー達は次の半世紀を歩み始めている。現在、ワンダーフォーゲル部OB会の会員数は500人を超える。



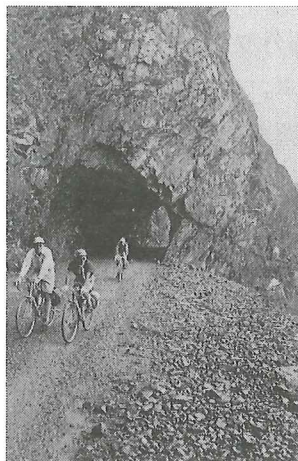
創部発会式（1955年5月29日）

その活動内容が山岳部や山スキー部とどこが異なるのか議論があるが、その根底にある理念は草創期からの流れを汲んでいる。原野や海岸線を彷徨し、清冽な川を下り、未知なる沢を遡り、野の花や高山植物を愛でて、深いラッセルと吹きすさぶ烈風の中を進むことは、まさに北の大地でしか味わうことのできない醍醐味でありロマン溢れる活動である。これこそがワンダーフォーゲル部の誇れる点である。

(2) 50年間の活動の流れ

創部期のころは部員の多さと装備不足のため、日帰り登山、サイクリング、海岸・平地歩きが主であったが、それでも表大雪・利尻山に足跡を残した。

次第に山への志向が高まり、大雪山で尾根歩きの夏合宿を行った。しかし、参加人数が増えたためパーティーを分けた集中登山形式に発展し、大雪山や知床半島での合宿が行われた。

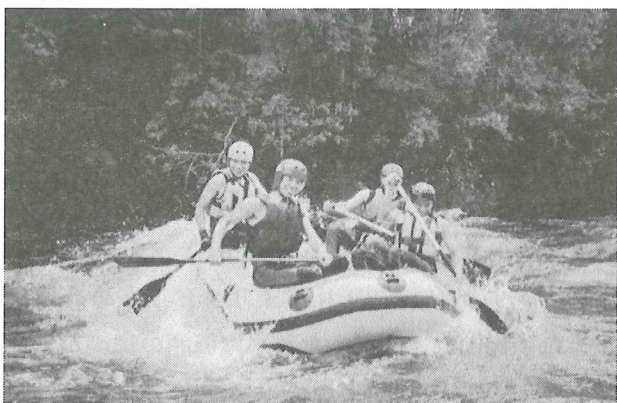


1957年夏
北海道一周サイクリング
(襟裳岬付近の国道)

1958年春にはニセコで部初のスキー合宿が行われ、積雪期の活動が始まった。しかし1960年末ニセコアンヌプリ頂上で1年生部員が行方不明になり、懸命の捜索にもかかわらず発見出来なかった。この後リーダー層の育成のため秋にリーダー合宿が開始され今日まで続く。

1963年の夏合宿は、日高や道外も含めて多方面に分散して行われ、以後この形式が継続された。この内トカラ列島ワンデリングは社会・文化的側面に重点をおいたユニークなものであった。1965年には、ゴムボートを使い知床半島巡りや石狩川を下った。冬期の活動はニセコ冬合宿で冬山の基礎技術を身につけ、春合宿は総まとめの活動に変貌した。

こうして夏は沢を主にして道内の主要な沢がト



2002年7月尻別川ゴムボート下り

レースされた。スキーツアーに加えて、冬期の日高山脈にも入山するようになり、アイゼン・ピッケルを用いた活動も行われるようになった。

1970年代になり未知の自然への挑戦意識が一気に開花した。部に記録のない地域や時期に足跡を残す事が果敢に試みられ、組織としてのまとまりを維持しつつ、質・量ともに充実した活動が展開された。また技術や経験が引継がれ、四季を通じて、長期間の山行が盛んになった。

これに加えて、スキーでソリを作り原野を踏破したり、緯度に沿ったスキーと徒歩による北海道横断、トライアスロンもどきにサイクリング・山登り・川下りにより夏の北海道横断と縦断を成遂げるユニークな発想も生まれた。更にボートや流水上の徒歩による海岸踏破や道内外の川下りなど水平思考的な活動も多くなり、ワンダーフォーゲル部ならではの独特な活動が展開された。



1976年12月ニセコアンヌプリ斉藤克久さん遭難碑前にて

一方で幾つかの遭難事故が発生し、人命を失わずに済んだが、その度ごとに原因を分析し、活動方針を再検討して、部活動のあり方や安全な活動について教訓を積み重ねた。

1990年頃から活動形態を更に高度化しようという流れが出てきて、難度の高い活動が実行された。これはバランスのとれた部員構成、冬山リーダー経験者数の増加と経験の蓄積がなされたからである。しかし、1994年に十勝岳OP尾根における雪崩のため2年目現役部員が死亡する事故がおき、部の方向性を修正して建直しを図った。しかし活動の量・質には大きな変化はなかった。

近年、部員数・リーダー数の減少、部員構成のバ

ランスが悪くなり、女性部員の増加、上級生の多忙さ、カリキュラムの変更等が絡み合って、活動の質・量の低下が懸念されているが、以下のような年間計画に沿って多彩な活動を行っている。部員数はここ数年30人前後で推移している。うち女性部員は約20%で、この10年間で二人の女性主将を輩出した。

	活 動 概 略
4月	新人歓迎ワンデリング
5月	GW山行、講習会（医療・気象）
6月	強化合宿、初沢登り・初川下り、講習会（医療・沢登り・沢遭対）
7月	夏ワンデリング予備山行
8月	夏ワンデリング
9月	リーダーワンデリング
10月	代交替 石炭上げ
11月	初冬山行、各種講習会、スパルタハイク、スキー練習
12月	講習会（雪崩・模擬遭難）、ニセコ冬合宿
1月	年始ワンデリング、EP練習
2月	春ワンデリング予備山行
3月	春ワンデリング

（３）海外遠征

創部期より海外遠征が意識されていたが、実現したのは創部10周年にあたる1965（昭和40）年の台湾である。これ以後1968年韓国、1969年沖縄に足を延ばした。本格的な登山遠征は1980年インドヒマラヤZ1（6,400m）（隊長：大内倫文）から始まった。以後1987年米国・ホイットニー山（4,418m）（隊長：長山政道）、1989年パキスタンのヒンズークシュ（アスマン・アビー：5,220m、ギリシエール：5,561m）（隊長：福澤卓也）、1993年ネパールのロブジェ・



1980年インドヒマラヤZ1 全員登頂。

イースト（6,119m）／アイランドピーク（6,189m）（隊長：西川潮）、2003年ネパールのドルジェ・ラクパ（6,966m）（隊長：岡博文）に遠征し、すべてに現役部員が参加した。

この他、現役部員やOB／OGが参加した海外遠征は25隊を超え、個人的な海外ワンデリングも盛んで、その足跡は全世界に及ぶ。この中には、パタゴニアや南極等における学術調査も含む。

（４）2005年度の活動

2005年度10月から翌年9月までの現役の活動状況を以下に概略した。初冬期の冬山訓練のため大雪・十勝、近郊におけるスキー練習、年末のニセコスキー合宿、正月一成人式には近郊・東大雪・南日高、2月末からの春合宿には大雪・十勝・北大雪・利尻、GWは暑寒別・南日高・近郊と新入生を連れた歓迎山行、6月第1週には大雪・十勝で強化合宿がある。7月の試験の後、夏の活動が8～9月に行われ、近郊の沢・知床・屋久島・日高・南アルプスや道内外でのボートによる川下りがなされ、9月に入り大雪・日高・知床等でリーダー合宿が行われた。これら以外に週末山行や奥手稲山の家の小屋番が行われた。全山行数は小屋番を除き、約60件である。



新人歓迎会（1959年、旧ティネ・パラダイス・ヒュッテ前）

（５）山小屋の管理

1963（昭和38）年にスキー部山班からティネ・パラダイス・ヒュッテの管理を委譲された。待望の山小屋であった。1972年札幌オリンピックの会場になった手稲山は、開発のため小屋周囲の環境が大きく変化した。この間小規模の修理を行ってはいたが、老朽化は避けられず1978年に閉鎖された。八木

健三・久田光彦両顧問をはじめとする現役・OBが保存運動を進めるがうまく行かなかった。その後1988年まで冬期間現役部員が屋根の雪下ろしを続けたが、1989年に管理を山スキー部に戻した。前章のようにこの小屋はその後再建された。



1973年4月新人歓迎会

(旧パラダイス・ヒュッテでのコンパの翌日、手稲山に登り、山頂にて顧問の八木健三先生は周辺の山についての講義を行なった)

一方、国鉄より北大に譲渡された奥手稲山の家の管理は1971（昭和46）年に始まり現在に至っている。1971～1978年の間は、部員数も多く、毎週末パラダイスと奥手稲の二つの小屋の小屋管理を行っていた。現在は部員数は少ないが、冬は毎週末、夏は隔週末に小屋番を行っており、小屋生活を共にすることで濃密な人間関係が形成され、新たな活動の芽が育まれている。学生時代しかできないことを、まだ社会から少し離れた場所で、自由な心と行動力を持って行おうとしていることは、今も昔も変わらない。



1988年4月新人歓迎会（奥手稲山の家）

最後に、以下に示す新入部員募集のポスターから部員の意識を知ってもらいたい。

「ワンダーフォーゲル」はドイツ語で「渡り鳥」という意味です。僕たち北大ワンゲルは、渡り鳥のように、北海道をはじめとする全国で活動しています。夏山登山、冬山登山をはじめ、沢登り、川下り、海岸歩き、ロッククライミング、山スキーなどからハイキング、サイクリングにいたるまで色々な活動をしています。長時間同じときを過ごす部員同士はお互い、深い関係を築いています。家族のような仲間と山・川に遊びに行き、自然の美しい風景を見ても感動したり、プラネタリウムのような満天の星を眺めてみたり、狭いテントの中で、お酒片手にいろいろ話して一緒に笑いあったり……そんな濃い時間を過ごすことができます。

いろいろな可能性を持つ大学生活を平凡にすごすのはもったいない。ワンゲルで渡り鳥のようにすごしてみませんか？きっと素晴らしいものを得られるでしょう。

4. 北大山岳館

北大構内の北西隅、恵迪寮の近くに木造丸太組二階建ての瀟洒な建物がある。この建物は、北大山岳部が1995年に創立70周年を迎えたのを機に北大山の会が、会員と内外からの寄付により建設したもので、北大山岳館と命名されている。内部は会議室1、集会室1、書庫1、閲覧室1、収納室1からなり、給湯場、水洗便所、電気暖房が付設されている。

館内に掲げられる銅板には山岳館建設の趣意が次のように刻まれている。

北大山岳館建設の趣意

北大山岳館は、北大山岳部が創立70周年を迎えるにあたり、山岳部出身者の会である山の会が、その記念事業の一環として建設し、北海道大学に寄贈したものであります。

山岳館建設の目的は、登山、探検、地球環境保全、途上国援助などに関心の深い学生諸君に会合の場を提供し、また大学内外の先達、先輩達との交流の場として役立てることにあります。さらに、北大山岳部が創立以来収集・保有してきた内外の山岳、探検に関する図書、地図等を整理・保管し、新たな資料も加えて有効な活用を図ることも目指しています。

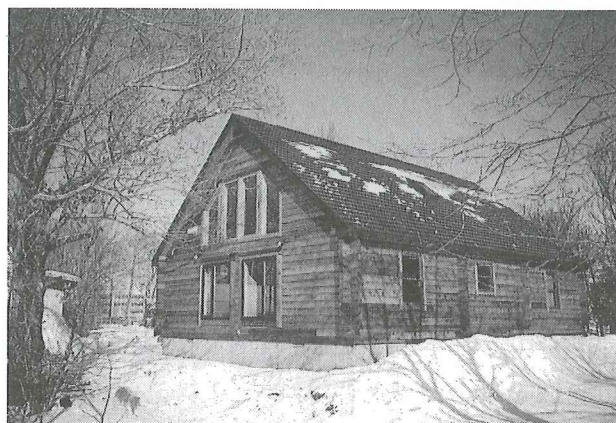
この山岳館が北大独自の学生施設となり、自然を愛する学生諸君の活動と発想の拠点として、今後永く利用されることを願うと共に、建設の趣旨に賛同された大のご支援を賜った多くの方々に深甚なる謝意を表します。

平成7年3月6日
北大山の会

山岳館は北海道大学学務部の管理の下、実質的に北大山の会が運営しており、山の会／山岳部が会合や各種の事業計画に利用しているほか、学内では主に運動部が会合等に利用している。書庫はまだ一般公開されていないが、山岳部創立以来の蔵書を中心に山岳関係の和書2011冊、洋書226冊、会報・部報132誌、雑誌37誌、洋雑誌14誌、地図533枚が保管・

整理されている。2階の会議室は、山岳部創立以来の資料、先輩達の登山用備品など貴重品が保管されており、現在は映像アーカイブス事業計画が事務局として使用している。

山岳館ホームページ：<http://aach.ees.hokudai.ac.jp>



山岳館外観



山岳館位置図

資 料 編

1. 関連年表

年	月	日	事	項
1876	明治 9	8 月	札幌農学校開学。	
1883	明治16		オスロにスキークラブ設立、ホルメンコーレン大会始まる。	
1895	明治28		松川敏胤大尉北欧視察からスキーを持って帰る。	
1896	明治29		マティアス・ツダルス著「リリエンフェルト・スキー滑降術」刊行。	
1901	明治34	9 月	札幌農学校文武会発足。	
1902	明治35	1 月	青森歩兵 5 連隊、八甲田山雪中行軍遭難。ノルウェー政府がスキー 2 台を同連隊に送ったが、使用法がわからないため、放置。	
1906	明治39		英国公使館付武官デルメーランド・キーフが北海道視察のさい、月寒歩兵 25 連隊にスキーを寄贈。	
1907	明治40	6 月	札幌農学校が東北帝国大学農科大学となる。大学予科を付設。	
1908	明治41	7 月	ハンス・コーラー（1881～1925）東北帝国大学農科大学予科ドイツ語教師として赴任（27歳）。この冬に故国からスキーを取り寄せる。翌年Henry Hoek著Der Schi（1906）も取り寄せる。	
1909	明治42	1 月～2 月頃？	コーラーが輸入したスキーを見本に南 1 条の馬橋屋でスキー作成し、稲田昌植・角倉邦彦他 4 名の北大生が構内で試乗。その後、Der Schiを参考にして三角山付近で練習。	
1911	明治44	1 月～3 月	オーストリア陸軍参謀テオドル・フォン・レルヒ少佐が東京砲兵工廠でスキー10台を作らせ、高田第13師団歩兵58連隊（鶴見宣信大尉らスキー専修将校14名）にスキーを教える。	
1911	明治44	12月	クラッツァ、ウィングラー、プラーゲ山形県米沢市五色温泉でスキー。	
1911	明治44		小樽水産学校、小樽中学、札幌一中などでスキー部結成（最初のスキー団体）。	
1912	明治45	2 月	レルヒ中佐旭川第 7 師団でスキー講習会（3 週間）。	
1912	明治45	3 月	旭川でレルヒ中佐に習った三瓶勝美中尉ら 2 名が月寒で一般人にスキー講習会。北大から稲田昌植、角倉邦彦ら 7 名が参加。	
1912	明治45	3 月31日	藻岩山スキー初登山（稲田昌植、角倉邦彦ら 7 名）。	
1912	明治45	4 月17日	羊蹄山スキー登山（レルヒら10名、失敗）。	
1912	明治45	6 月	北大文武会スキー部発足（発起人稲田昌植、角倉邦彦ら 6 名、初代部長大井上義近）。	
1912	明治45	12月22日	第 1 回北大スキー部スキー講習会（三角山、50名参加）。	
1913	大正 2	2 月11日	手稲山初スキー登山登頂（稲田昌植、角倉邦彦ら 8 名）。	
1913	大正 2	12月22日	羊蹄山スキー登山、悪天候のため 6 合目付近で引き返す（稲田昌植ら 8 名）。	
1913	大正 2	12月31日～1 月 1 日	富士山冬季初登頂（角倉邦彦、柳沢秀雄、荒木忠郎、スキーは三合目附近まで）。	
1913	大正 2		鶴見宣信著「スキー術」刊行。	
1914	大正 3	2 月22日	スキー部、銭函で日本で最初のスキー競技会（約 2 km の距離競技）を開催。	
1914	大正 3		遠藤吉三郎、留学したノルウェーより複杖のノルウェー式スキーを持参し、スキー部員に指導。テレマーク、クリスチャニアが本格的に普及。	
1916	大正 5		稲田昌植著「スキー」刊行。	
1917	大正 6	3 月25日	羊蹄山スキー初登頂（福地義二郎・木原 均ほか）。	
1917	大正 6		手稲山から初めて軽川に下り、ネオパラダイスを発見。 遠藤吉三郎ら小樽に日本最初の仮設スキージャンプ台を建設。	
1918	大正 7	1 月	スキー部琴似のシバースロープに仮設ジャンプ台建設。	
1918	大正 7	2 月	木原 均ら 7 名中山峠踏破（5 日間行程26里、最初のスキー長距離旅行）。	
1918	大正 7	4 月	北海道帝国大学が設置され、北海道帝国大学農科大学となる。	

年		月 日	事 項
1918	大正 7	12月	文武会スキー部著「スキー術教程」(第1版)(六鹿一彦・福地義二郎)刊行。以後2年毎に改訂し、第4版まで刊行。
1919	大正 8	2月	北海道帝国大学農科大学が北海道帝国大学農学部となり、医学部も設置。
1919	大正 8		遠藤吉三郎・木原 均著「最新スキー術」刊行。
1919	大正 8	12月22日～29日	ニセコ青山温泉不老閣でスキー部合宿48名参加。青山温泉スキー合宿の始まり。3年後くらいから参加者は100名を越える。 戦時中も含め1971年まで続く。
1920	大正 9	1月25日	スキー部主催「札幌スキー駅伝競走(中学)」開催(最初のスキー駅伝)。
1920	大正 9	3月	十勝岳、芦別岳、ニセコアンヌプリのスキー登山に成功。
1920	大正 9	10月	スキー部奥手稲に樵小屋を借り上げ、宿泊小屋として使用。
1920	大正 9		文武会スキー部著「スキー術教程」(第2版)刊行。
1921	大正10	4月	予科桜星会旅行部設立。
1920	大正 9		スキー部(加納一郎ら)1920年秋から1921年春にかけて、Alpen Zeitung(第1～5分冊、手書き、謄写刷)を発行。
1921	大正10	4月	加納一郎・板橋敬一ら「山とスキー」創刊。 1930年まで9年間に100号を刊行。
1921	大正10		北海道庁が羊蹄山石室建設(最初の登山小屋)。
1922	大正11	1月11日	板倉勝宣ら5名旭岳冬季初登頂。
1922	大正11	11月	文武会スキー部著「スキー術教程」(第3版)刊行。
1923	大正12		廣田戸七郎著「スキージャンピング」刊行。
1923	大正12	1月6日	スキー部日本最初の本格的固定シャンツェ「シルバーシャンツェ」を建設。
1923	大正12	2月10、11日	第1回全日本スキー選手権大会開催(小樽)。
1923	大正12	12月10日	山とスキーの会主催映写会「ハンネス・シュナイダー主演、スキーの驚異」。
1924	大正13	3月	マックス・ヒンデル来日、札幌で設計事務所を開く。 第1回冬季オリンピック大会開催(シャモニー)。
1924	大正13	4月	道庁、旭岳石室・黒岳石室を建設。
1924	大正13	9月	工学部設置。
1924	大正13	12月	文武会スキー部著「スキー術教程」(第4版)刊行。
1925	大正14	1月29日	ハンス・コーラー札幌で死去。
1925	大正14	2月15日	全日本スキー連盟創立 (発起人:加納一郎・廣田戸七郎ら、初代会長:稲田昌植)。
1925	大正14	8月	アーノルド・グブラー北海道帝国大学予科ドイツ語教師に就任。 来日は1923年3月。
1926	大正15	2月2日	国際スキー連盟(FIS)総会、全日本スキー連盟は木原 均代表を派遣し、加入。
1926	大正15	5月14日	北大創基50周年記念式典挙行。
1926	大正15	11月10日	スキー部の“山党”が分離し、山岳部創立(初代部長栃内吉彦)。
1926	大正15	11月2日	テイネ・パラダイス・ヒュッテ建設。
1927	昭和 2	9月13日	ヘルヴェチア・ヒュッテ建設。
1927	昭和 2	10月	マックス・ヒンデル横浜へ転居。
1927	昭和 2	11月	スキー年鑑第1号刊行(全日本スキー連盟、広田戸七郎編集)。
1927	昭和 2	12月	沢本三郎著「登山スキー術の手引き」刊行。
1928	昭和 3	1月14～16日	第1回全日本学生スキー選手権大会(大鰐)、北大優勝。
1928	昭和 3	2月8日	石狩岳冬期初登頂(伊藤秀五郎ら6名)。
1928	昭和 3	2月11～19日	第2回冬季オリンピック大会(サンモリッツ)開催。 日本初参加:廣田戸七郎(監督)、伴 素彦(飛躍)ほか参加。
1928	昭和 3	2月24～26日	秩父宮殿下、パラダイス・ヒュッテとヘルヴェチア・ヒュッテに宿泊。
1928	昭和 3	4月3日	西川 桜・須藤宣之助ピパイロ岳スキー登山。

年		月 日	事 項
1928	昭和 3	11月	中山ヒュッテ建設（現在はない）
1928	昭和 3	12月10日	空沼小屋（秩父宮ヒュッテ）建設。
1928	昭和 3		二股小屋建設（現在はない）。
1929	昭和 4	1 月 3 ～14日	トッタベツ・幌尻岳冬季初登（伊藤秀五郎ら）。
1929	昭和 4	1 月 4 日	コルセット中尉ら 3 名来道（スキー指導とシャンツェ設計のため、大倉男爵が招待）。
1929	昭和 4	1 月22～25日	高松宮殿下、空沼小屋に宿泊。
1929	昭和 4	12月 7 日	札幌スキー連盟発足（会長橋本正治市長、加盟団体41）。
1929	昭和 4		萬計小屋建設。
1930	昭和 5	1 月15～16日	秩父宮・高松宮来道記念スキー大会（後の宮様スキー大会）開催。
1930	昭和 5	2 月 6 ～ 8 日	スキー部員、銭函ーヘルヴェチア、奥手稲ーヘルヴェチア、パラダイスー奥手稲の指導標設置。
1930	昭和 5	3 月	ハンネス・シュナイダー来日。各地でスキー講習。
1930	昭和 5	4 月	理学部設置。
1930	昭和 5	8 月 6 日	「山とスキー」最終号（99+100号）。
1930	昭和 5	10月	朝里岳ヒュッテ建設（現在はない）。 加納一郎ら「山と雪」創刊。
1930	昭和 5	12月	奥手稲山の家建設。
1931	昭和 6	3 月11日～20日	徳永正雄ら 4 名、カムイエクウチカウシ、エサオマントッタベツ、札内岳冬期初登頂。
1931	昭和 6	9 月18日	満州事変、日中戦争へ発展。
1931	昭和 6	10月18日	長門ヒュッテ建設（現在はない）。
1931	昭和 6	11月 3 日	無意根小屋建設。
1931	昭和 6	11月	奥無意根小屋建設（現在はない）。
1932	昭和 7	1 月16日	大倉シャンツェ完成。
1932	昭和 7	7 月	アーノルド・グブラー帰国、後任はヘルマン・ヘッカー。
1932	昭和 7	12月18日	右股小屋建設（現在はない）。
1932	昭和 7	2 月 4 日～13日	第 3 回冬季オリンピック大会（レークプラシッド）開催。 山田勝巳（複合・飛躍）ほか出場。
1933	昭和 8	1 月	ホルメンコーレン50周年記念スキー大会開催（大野部長、宮村六郎、栗谷川）。
1933	昭和 8	7 月 9 日	冷水小屋建設。1950年焼失、1952年北海道電力（株）再建。
1933	昭和 8	12月20日	東日ヒュッテ建設（現在はない）。
1933	昭和 8	12月28日～1 月 9 日	極地法による石狩連峰登破（ユニ石狩初登頂、山岳部徳永正雄ら10名）。
1933	昭和 8		白樺小屋・峠ノ小屋建設（現在はない）。
1934	昭和 9	12月	春香山銀嶺荘建設、1960年再建。
1936	昭和11	2 月 6 日～	第 4 回冬季オリンピック大会（ガルミッシュパルテンキルヘン）開催。 廣田戸七郎（団長）、伊黒正次（ジャンプ 7 位）ほか参加。
1937	昭和12	12月	湯の澤小屋建設（現在はない）。
1939	昭和14	8 月 5 日	マックス・ヒンデル帰国を前に来道、ヘルヴェチアヒュッテ行。
1940	昭和15	10月	マックス・ヒンデル帰国（ドイツへ）。1963年 1 月ドイツ、レーゲンで死去。
1941	昭和16	4 月	スキー部、山岳部は報国会鍛錬部スキー班、山岳班と改称。
1941	昭和16	12月 8 日	太平洋戦争始まる。
1943	昭和18	1 月 5 日	今村昌耕・佐藤 弘、ペテガリ岳冬期初登頂。
1947	昭和22	4 月	法文学部設置。
1947	昭和22	10月	北海道帝国大学が北海道大学になる。
1949	昭和24	2 月	高松宮殿下・三笠宮殿下、無意根小屋に宿泊。
1950	昭和25	2 月	三笠宮殿下、空沼小屋に宿泊。
1951	昭和26	10月13～14日	パラダイス・ヒュッテ大修理。

年	月 日	事 項	
1951	昭和26		白井岳ヒュッテ建設。
1952	昭和27	4 月	獣医学部設置。
1952	昭和27	10月	冷水小屋再建。中山小屋建設。
1953	昭和28	6 月13～14日	空沼小屋大修理。
1954	昭和29	9 月25～26日	無意根小屋大修理。洞爺丸台風来襲、各山小屋周辺の倒木被害甚大。
1955	昭和30	5 月29日	ワンダーフォーゲル部創部。
1955	昭和30	9 月	パラダイス・ヒュッテ大修理。
1956	昭和31	1 月	第7回冬季オリンピック大会（コルチナ・ダンペッツォ）開催、猪谷千春回転2位。
1956	昭和31	8 月	テレビ塔設置のため手稲山頂まで自動車道路できる。
1957	昭和32	8 月 1～10日	無意根小屋大改修。
1960	昭和35		春香山銀嶺荘再建。
1963	昭和38	1 月	マックス・ヒンデル、ドイツ、レーゲンにて死去。
1963	昭和38	4 月	パラダイスヒュッテの管理、スキー部山班からワンダーフォーゲル部へ移管。
1963	昭和38	10月	スキー部、競技スキー部と山スキー部に分れる。
1965	昭和40	11月16日	万計山荘建設。
1971	昭和46	3 月24日	奥手稲山の家、国鉄から北大へ譲渡（ワンダーフォーゲル部管理）。
1972	昭和47	2 月 3～13日	第11回冬季オリンピック大会（札幌）開催。
1976	昭和51		パラダイス・ヒュッテ、薪ストーブから石炭ストーブへ。
1978	昭和53	7 月	パラダイス・ヒュッテ使用危険のため閉鎖。
1982	昭和57	7 月21～24日	奥手稲山の家大改修。
1983	昭和58	10月	無意根小屋大改修。
1985	昭和60	8 月	ヘルヴェチア・ヒュッテ大改修。
1988	昭和63		ヘルヴェチア・ヒュッテ、さっぽろ・ふるさと文化百選に選定。
1988	昭和63		パラダイス・ヒュッテの管理、ワンダーフォーゲル部から山スキー部へ。
1989	平成 1	3 月	ワンダーフォーゲル部、奥手稲山の家周辺に指導標設置。
1989	平成 1	6 月17～7 月 2 日	無意根小屋大改修。
1990	平成 2	3～4、9、10月	奥手稲山の家大改修。
1991	平成 3	3 月、6～7 月	奥手稲山の家大改修。
1994	平成 6	3 月	テイネ・パラダイス・ヒュッテ積雪のため倒壊。
1994	平成 6	12月	手稲パラダイスヒュッテ再建（1995年 4 月再建期成会から北大へ寄贈）。
1999	平成11	3 月	ワンダーフォーゲル部、山スキー、山岳部、搜索活動に対して「北大エルム賞」を共同受賞。

2. 参考文献

(1) 公刊資料

単行本

著者	題名	書名	発行年	発行所
井田 清、坂本直行		北海道の山岳	1931	
一原有徳	消えた山小屋	さっぽろ文庫48 札幌の山々	1989	札幌市教育委員会
伊藤秀五郎		北の山 続編	1976	茗溪堂
大野精七		北海道のスキーと共に	1971	私家本
大野精七	札幌・スキーの歩み	さっぽろ文庫16 冬のスポーツ	1981	札幌市教育委員会
大野精七伝記編集委員会		大野精七の歩み	1981	大野精七先生顕彰会
加納一郎		我が雪と氷の回想	1969	朝日新聞社
加納一郎		山・雪・氷 霧藻庵雑記	1981	岳書房
加納一郎		北海道のスキーと山岳	1927	北海道山岳会
札幌スキー連盟		宮様スキー大会50年史	1979	札幌スキー連盟
高澤光雄		資料 近代登山の歩み		
高澤光雄	北海道登山史年表	山書研究 37号 (北の山と本—その登山史的考察)	1992	日本山書の会
高澤光雄	『山日記』に掲載された戦前の山小屋—駅通、営林巡視小屋などをめぐって—	北海道山岳	1999	日本山岳会北海道支部
武居哲太郎		武居哲太郎遺稿集	1941	武居哲太郎遺稿集刊行会
鉄道省編		日本案内記、北海道篇	1936	鉄道省
常盤開基百年記念誌編集委員会		常盤二百年への出発	2002	記念誌編集委員会
中浦皓至		スキー技術の歴史と系統—ターナーへの挑戦	1991	北大図書刊行会
中浦皓至		日本スキー—もう一つの源流—明治45年北海道	1999	北大図書刊行会
橋本昌浩	札幌近郊の山小屋	さっぽろ文庫48 札幌の山々	1989	札幌市教育委員会
細井吉造		伊那谷木曾谷	1937	故細井吉造遺稿集刊行会
宮田 泰	スキー登山			

パンフレット

著者	題名	書名	発行年	発行所
		スキーへ	1933	札幌鉄道局
		雪・スキー北海道	1936	札幌鉄道局
		スキー北海道	1938頃	札幌鉄道局

著 者	題 名	書 名	発 行 年	発 行 所
		ニセコと奥手稲	1938	札幌鉄道局
		銀嶺の起點 定山溪	1937	定山溪鉄道株式会社
		新スキー北海道	1947	日本交通公社札幌支社
		スキーの楽園HOKKAIDO	1963	札幌鉄道管理局
		銀嶺荘へ	1935頃	北海タイムス社
		Winter in Hokkaido	1935頃	Sapporo Grand Hotel

雑 誌

著 者	題 名	書 名	発 行 年	発 行 所
山口 透	北海道の山小屋(1)(2)(3)	北海道の山 No.1、No.2、No.3	1959	清水孔版社
編集部	スキー地・山小屋資料一覧表	北海道の山 No.11	1962	清水孔版社
石島 忍	北海道の山小屋	北海道の山 No.16	1962	清水孔版社
花田健二	道新銀嶺荘	北海道の山 No.8	1961	清水孔版社
角 幸博	建築春秋ー近代の人と技を 探る・その5「北の地に 新風を送った建築家マッ クス・ヒンデル」	住宅建築	1995. 1	建築資料研究所
中浦皓至	スキー史研究の醍醐味、ハ ンス・コラーと日本のス キー発祥	日本スキー学会誌 第15巻第1号別刷	2005	
山崎英雄	札幌近郊の山小屋とヒン デル氏	心のひろば 第59号	1994	札幌市精神衛生協会
	誌上談話會	札幌 第2号	1930	札幌鉄道局
		昭和5年度年報	1931	札幌鉄道局
木曾凡九郎	變な男	運輸月報 第18巻1月号	1937	東京鉄道局
細井吉造	スキーびつこ宣傳	登山とスキー 1935年11月号	1935	アルピニズム社
渡辺公平	鉄道とスキーと山(中)	鉄道ピクトリアル 293号	1974	鉄道図書刊行会
		旅 1931年12月号	1931	日本旅行協会
	「奥手稲山の家」 使用規 定、取扱細則	札幌鉄道局報 第1118号	1930	札幌鉄道局
		札幌スキー連盟現況 昭和10年度	1936	札幌スキー連盟
	ていねスキー物語	広報 さっぽろ(手稲区版) 2月号	1994	札幌市

新聞

発行日	新聞	内容
10/23/1925	北海道帝国大学新聞	北大スキー部創立15周年記念、小川玄一
2/20/1928	北海道帝国大学新聞	謹奉迎秩父宮殿下御来学
3/5/1928	北海道帝国大学新聞	白雪に装いを擬して秩父宮を本学に御迎え奉る
9/3/1928	北海道帝国大学新聞	空沼岳に秩父宮ヒュッテ、本学に建設方御下命
1928/2/10、3/5、9/3、1929.2.4	北海道帝国大学新聞	秩父宮殿下御来道関連記事
6/7/1932	北海道帝国大学新聞	思い出を残して三外人教師帰国
2/4/1929	北海道帝国大学新聞	高松宮殿下雪の山脈を御征服
11/14/1929	北海タイムス	スキー座談会(3)、北海タイムスと大野博士の座談会
12/25/1930	北海タイムス	献上の「空沼小屋」
5/23/1930	北海タイムス	模範ヒュッテを鐵道省が建てる 五千五百圓をかけて 奥手稲のユートピアに
10/23/1930	北海タイムス	七ヒュッテの王座に一木造三階建ての堂々ぶり
11/8/1930	北海タイムス	山小屋ながら電話も湯殿も 本道一の「星置小屋」
12/19/1930	北海タイムス	山に精しくソシテ親切 スキー上手の小屋番試験
1931/1/16夕刊	北海タイムス	奥手稲の『山の家』 十七、八日兩日 盛な小屋開き
1/19/1931	北海タイムス	山の家 タンネの森かげ 夜のまどろ
1931/1/20夕刊	北海タイムス	薪は三里の麓から 寒さ知らぬ家

山とスキー

掲載号	著者	題名	発行年
47	中野誠一	コラー先生を憶う	1924
77	斉藤文吉	写真：ヘルヴェチアヒュッテの建設	1927
78	山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの建設	1928
79	山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの建設(承前)	1928
80	小川玄一	秩父宮殿下をお迎えし奉りて	1928
	村本金弥	台覧北大スキー競技	
	警備隊	記憶の中より	
89	小川玄一	秩父宮殿下ヒュッテの竣工に当って	1928
90	宇都宮 高	記憶の中より	1929
92	井出 生	中山峠スキー小屋	1919
93	平間 章	ヘルヴェチアヒュッテへ	1929
96	K 生	空沼の思い出	1929

山と雪

掲載号（発行年）	著者	題名	発行年
2	編集部 宇都宮 高	秩父宮家御用空沼小屋 空沼付近のスキー生活	1931
3	編集部	旧ヒュッテンブーフから	1931

日本山岳会 山岳及び会報

著者	題名	書名	発行年
山崎春雄	ヘルヴェチア・ヒュッテと秩父宮殿下	第48年	1954
伊藤秀五郎	北海道の山小屋	第49年	1954
伊藤秀五郎	追悼 山崎春雄氏	第57年	1963
藤島敏男			
山崎春雄	瑞西だより	会報10号	1931
山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの二十五年祭	会報159号	1952
北大スキー部			
掲載号	著者	題名	発行年
創立15年記念号	佐々木政吉	新設記念ヒュッテに就いて	1926
	坂本彌直	ティネ・パラダイス・ヒュッテ	
部報 1	三浦義明	長門ヒュッテに就いて	1931
	五十嵐勝蔵	楽しいパラダイス合宿の憶出	
部報 2	向井四郎	ティネパラダイスヒュッテのことども	1933
		「山の記録」：「長門ヒュッテ1931年10月18日竣工（費用の半は大野部長、同21－23日ヒュッテ開きの記事。同14-15日無意根小屋開き）」の記事あり	
班報 1	松山茂忠	パラダイス小屋に住み慣れて（古日記断片より）	
		山小屋管理報告	1941
		大野先生	
		ヒュッテの建設－大野部長長夢の実現－	
	大野精七	希望	
	佐々木政吉	新設記念ヒュッテに就いて（上記再録）	
	鈴木重雄	無意根小屋	
スキー部70年史	三浦義明	長門ヒュッテに就いて（上記再録）	1982
	松山茂忠	パラダイス小屋に住み慣れて（古日記断片より）（上記再録）	
	安藤政三・伊藤信康	ヒュッテを利用するスキークースに就いて	

北大山の会会報

掲載号 (発行年)	著 者	題 名	発 行 年
1 (S10)	豊田春満	Helvetia Huette	1935
6 (S12)	西村 正	ヘルヴェチアヒュッテ十周年記念祭	1937
25 (S26)	山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの二十五年	1951
	渡辺千尚	ヒュッテ建設の思い出	
28 (30)	集会	グブラー氏を囲んで	1955
30 (35)	渡辺千尚	グブラー先生のことども	1960
35 (39)	川道武男	ヘルヴェチアア昨今	1964
38 (S45)	橋本誠二	ヘルベチア植樹祭	1970
41 (48)	会員消息	グブラー先生からの手紙「第一信、第二信」	1973
52 (S57)	会員消息	グブラー先生の近況	1982
55 (S58)	佐々保雄	アライトの水ーグブラー先生の思い出	1983
	和久田弘一	グブラー先生の思い出	
	小平俊平	グブラー先生を憶う	
57 (S59)	朝比奈英三	正雄さんとのヘルヴェチアヒュッテ行 ー五十年前の追想ー	1984
59 (S60) 号外 (S60)	上野八郎	ヘルヴェチアヒュッテ改修の呼びかけ	1985
	杉野目 浩	ヘルヴェチアヒュッテをめぐる現況	
		ヘルヴェチアヒュッテから	
60 (S61)	朝比奈英三	ヘルヴェチアヒュッテ改修工事の終了に当たって	1986
	杉野目 浩	ヘルヴェチアヒュッテ改修報告	
	西 安信	改修工事の経過と概略	
	上野八郎	会計報告	
	会告	今後のヘルヴェチアヒュッテの利用について	
	山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの建設 (再録)	
	西 安信	ヘルヴェチアヒュッテに記念の銅板	
78 (H 7)	駒沢欣一	グブラー夫人からの礼状	1995
	鈴木弘泰	ヘルベチアツアーの報告	

79 (H 8)		ヘルヴェチアヒュッテー危機に瀕した周辺の環境	1996
80 (H 8)		ヘルヴェチアヒュッテについて	
82 (H 9)		ヘルヴェチアヒュッテ周辺の環境整備について	1997
87 (H12)		ヘルヴェチアヒュッテについて	2000
90 (H13)	杉野目 浩	ヘルベチアヒュッテ修理資金カンパのお願い	
91 (H13)		ヘルヴェチアヒュッテーご醸金御礼と修復完了ご報告	2001
		ヘルヴェチアヒュッテの永久保存に関する懇談会	
92 (H14)	山崎英雄	ヘルヴェチアヒュッテ覚え書き ー思い出すままにー	
	高篠和憲	ヘルヴェチアヒュッテの運営・管理について	2002
93 (H14)	山崎英雄	ヘルヴェチアヒュッテ覚え書き ー思い出すままに (承前) ー	
94 (H15)	相川 修	ヘルヴェチアヒュッテを語る (「アルプ」第50号、1962年4月号より)	2003
	三角 亨	ヘルヴェチアあれこれ	
97 (H17)	アーノルド・グブラー(訳吉田恵治)	回想ヘルヴェチアヒュッテ	2005

山岳部創立50周年記念誌

著 者	題 名	内 容	発 行 年
山崎春雄	ヘルヴェチアヒュッテの25年	会報25号より再録	
アーノルド・グブラー	ヘルヴェチアヒュッテ建設おぼえ書き	建築家ヒンダー、山崎春雄教授、イ・オスカー・ワーゼル博士、グブラー、北海道帝大の学生ら小屋建設に尽力した人々の略歴など	1979
金光正次	グブラーさんと私	教師として、山の先輩として、小屋の建設者としての思い出	

北大ワンダーフォーゲル部

掲 載 号	著 者	題 名	発 行 年
道標 27・28・29号	古浜義男・北山邦彦	奥手稲山の家修築の話	1986
OB会報 1989	小田島一典	「奥手稲小屋指導標」について	1989
OB会報 1990	奥手稲山の家改修委員会	奥手稲山の家改修経過報告	1990
OB会報 1991	奥手稲山の家改修委員会	奥手稲山の家改修経過報告	1991
	富山久之	奥手稲山の家の沿革	
道標ー創部50周年記念誌	千葉誠哉	奥手稲山の家”1991”	2005

北大山スキー部

掲 載 号	著 者	題 名	発 行 年
むいね (山スキー部年報)	吉村昌浩	無意根小屋改修工事を終えて	1989
	丸谷聖一	設計者の弁明	
	阿部幹雄	無意根小屋改修への道程・改修からの道程	
	根岸邦典	改修工事現場から・お世話になった方々の横顔	
	榊山祥子	小屋改修のこと	
	高橋郁雄	無意根小屋の歴史	
山とスキーの会会報 14		座談会「無意根小屋の歴史を語る」	1989
	阿部幹雄ほか	無意根小屋改修工事報告	
	パラダイスヒュッテ問題研究会	テイネパラダイスヒュッテ再建問題について	
山とスキーの会会報 15		テイネパラダイスヒュッテ現地調査報告書	1990
	出村吉雄	よみがえるか手稲パラダイスヒュッテ	
山とスキーの会会報 16	脇田政嘉	無意根小屋60周年祭	1991
山とスキーの会会報 17	手稲パラダイスヒュッテ再建準備委員会	パラダイスヒュッテの再建について	1992
山とスキーの会会報 18	柳生 修	手稲パラダイスヒュッテの再建について	1994
山とスキーの会会報 21	久能弘道	手稲パラダイスヒュッテ近況報告	1997
山とスキーの会会報 25	編集委員会	特集無意根小屋70周年祭	2001

地形図

資 料 名	発 行 者	発 行 年
札幌小樽附近スキーコース圖 (其の一)	札幌鉄道局	1934
札幌小樽附近スキーコース圖 (其の二)		
奥手稲山の家を中心としたるもの		
定山溪及札幌附近のスキーコース圖	定山溪鉄道株式会社	1931頃
札幌附近のスキーコース圖 (改訂版)	北大スキー部	1935

(2) 未公刊資料

北大図書館北方資料室

資料名	内容	発行年
退職者履歴資料8	ハンス・コーラー辞令と履歴書	1924 (大正14) 年
退職者履歴資料13	アーノルド・グブラー辞令と履歴書	1931-32 (昭和6-7) 年
北大アラルバム 5、7、88、101、103/1、138、139		
北海道大学学生部「奥手稲山の家について」		1971

未公刊論文

著者	題名	書名	発行年
森本光彦	学士論文 北海道大学工学部建築工学科	Berg Hütte と Ski Hütte について	1952
角 幸博	博士論文 北海道大学大学院工学研究科	マックス・ヒンデルと田上義也ー大正・昭和前期の北海道建築界と建築家に関する研究ー	1996
中浦皓至	修士論文 北海道大学大学院教育学研究科	北海道における近代スキー発達に関する歴史的研究	2001

3. 札幌周辺の山小屋一覧（一般開放された山小屋のみを掲載）

小 屋 名	現 状	建 設 年	現所有者／連絡先	設 計 者	施 工 者	出 資	建設者、管理者	宿泊 人数	沿 草、旧所在地、他
ティネ・パラダイ ス・ヒュッテ	有	1926（大正15）年	北大学務部学生支援課 011-706-3353	マックス・ヒンデル	藤川万吉→留目熊吉	北大、大野精七、 北大有志	北大スキー部	30	1995年移転復元
ヘルヴェチア・ ヒュッテ	有	1927（昭和2）年	北大学務部学生支援課 011-706-3353	マックス・ヒンデル	大工：水本小判治	ヒンデル、グブ ラー、山崎春雄	ヒンデル、 グブラー、山崎春雄	12	昭和9年建設者より 北大（山岳部）へ
空沼小屋 （秩父宮ヒュッテ）	有	1928（昭和3）年	北大学務部学生支援課 011-706-3353	マックス・ヒンデル	伊藤豊次（伊藤組）	秩父宮	北海道帝国大学	30	1957年スキー部から山岳部へ
中山ヒュッテ （旧）	無	1928（昭和3）年				北海道山岳会	北海道山岳会	30	中山峠付近、約10年で廃屋
朝里岳ヒュッテ	無	1928（昭和3）年					小樽スキークラブ	20	朝里峠付近
萬計小屋	無	1929（昭和4）年				帝室林野局	帝室林野局	20	万計沼
二股小屋	無	1929（昭和4）年			伊藤組	帝室林野局	帝室林野局	15	空沼入沢
奥手稲山の家	有	1930（昭和5）年	北大学務部学生支援課 011-706-3353	札幌鉄道局近藤校		鉄道省札幌鉄道局	鉄道省札幌鉄道局	48	1971年国鉄から北大 （ワンダーフォーゲル部）へ移管
無意根小屋	有	1931（昭和6）年	北大学務部学生支援課 011-706-3353	北大営繕課太田延雄	沖津組（沖津熊次郎）	武藤山治・ 大野精七	大野精七／鈴木重雄	30	
長門ヒュッテ	無	1931（昭和6）年		既存廃屋利用		無意根小屋建設 の残金	北大スキー部	7	豊羽鉾山の奥
奥無意根小屋	無	1931（昭和6）年				芳賀スキー店	有原・芳賀スキー	25	中岳中腹
天狗山ヒュッテ	無	1931（昭和6）年					小樽山岳スキー倶楽部	8	小樽天狗山山麓
白樺小屋	無	1932（昭和7）年				樽定バス（株）	樽定バス（株）	80	ヘルヴェチア・ヒュッテの近傍
右股小屋	無	1932（昭和7）年				道庁頂望会	道庁頂望会	25	手稲山永峰沢
峠ノ小舎	無	1933（昭和8）年				小樽定山溪 自動車（株）	樽定バス（株）	15	朝里峠付近

小屋名	現状	建設年	現所有者／連絡先	設計者	施工者	出資	建設者、管理者	宿泊人数	沿革、旧所在地、他
冷水小屋（旧）	無	1933（昭和8）年		宇都宮 嵩		定山溪鉄道	定山溪鉄道	40	北大スキー部管理 1950年焼失
東日ヒュッテ	無	1934（昭和9）年				東京日々新聞	札幌スキー連盟	30	砥石山麓
銀嶺荘（旧）	無	1934（昭和9）年				北海タイムス社 （現北海道新聞社）	北海タイムス社 （現北海道新聞社）	50	社会部長・事業部長河合操石 氏が尽力。戦前に倒壊。
北海製罐 ヒュッテ	無	1937（昭和12）年				北海製罐倉庫（株） 健康保険組合		20	塩谷円山
湯の沢小屋	無	1939（昭和14）年頃？						50	定山溪滝ノ沢
冷水小屋（新）	有	1952（昭和27）年	北海学園大学学生部 学生課 011-841-1161			北海道電力		30	北電により再建され豊平町へ 寄贈、1953年北海学園大学に 管理委託、1960年北海学園大 学へ譲与
白井小屋	有	1952（昭和27）年	札幌医科大学学生係 011-611-2111内2193	山崎春雄		北海道林務部		13	1953年の札幌医大へ管理委託 までは余市岳ヒュッテと呼称
中山ヒュッテ（新）	有	1952（昭和27）年	北海学園大学 学生部学生課 011-841-1161	栄米治北電設計課長？		北海道電力		30	北電が移転復元し、豊平町を 経て北海学園大学に譲与
銀嶺荘（新）	有	1960（昭和35）年	北海道東海大学 札幌事務課 011-571-5111			北海道新聞社		50	1974年北海道東海大学に移管 管理人が常駐
万計山荘	有	1965（昭和40）年	石狩森林管理署／ 万計山荘友の会 090-5220-7446			定山溪営林署		20	1995年から友の会が委託管理

（注）太字の小屋名は現存する山小屋で一般開放している。

あとがき

北海道大学が所有する5つの山小屋は、1926（大正15）年から1931（昭和6）年の数年のあいだに相次いで建設されている。その後、札幌近郊では山小屋やヒュッテの建設が盛んになり、往時には20棟ちかくを数えた。

5つの山小屋が建てられた経緯や由来を辿ってみると、そこには、地の利、天の配剤、そして人の和が感じられる。地の利とは、雪国北海道である。札幌の西に連なる石狩湾から定山溪温泉、支笏湖周辺にかけての山々では半年にわたってスキーを楽しむことが出来る。天の配剤とは、大正末に、北大予科生に初めてスキーというものを教えたドイツ語教師ハンス・コーラー先生（1881年生まれ）、その後任者のアルピニストでもあるアーノルド・グブラー先生（1897年生まれ）、スイスの建築家マックス・ヒンデル氏（1887年生まれ）、そしてドイツ留学から帰朝した大野精七先生（1885年生まれ）と山崎春雄先生（1886年生まれ）が札幌に集まったことである。さらに、そこにはスキーの楽しさやその舞台である山の素晴らしさを知り、新しい部の創造に熱意を燃やすスキー部や山岳部の若者たちがいた。彼らの人の和が山小屋の輪（Hütten Kette：山小屋の鎖）構想を生み、実現したのである。

札幌近郊に建てられた20数棟の山小屋やヒュッテのうち、10棟は現在も健在であり、様々な形で活用されている。札幌のような大きな都市の近くにこのように多くの山小屋があるのは、我が国はもちろん世界的にも稀なのではないだろうか。

物質文明の行き詰まりが云々されている今日、我々は人類が生まれて来た自然にときどき帰り、そこに浸ることも必要であろう。山小屋がその自然への入り口になれば幸いである。

山小屋をそして自然を未来の人々に伝えて行きたいものである。

謝辞：

「北海道大学の山小屋」展の開催および本冊子の作成にあたって、資料の蒐集や提供、展示の協力などについて、以下の個人および法人の皆さまに、ご援助・ご協力をいただきました。ここに銘記して感謝申しあげます。

個人：

東 重俊、池上重康、井手上恵子、太田幸夫、貝瀬真緒、菅 建彦、佐藤美智男、高澤光雄、徳丸 明、中浦皓至、中西洋也、中野 務、西 安信、野呂武司、古内 昭、茂木雅憲、山崎英雄、山谷和正、吉井 洋、吉田恵治

法人：

伊藤組100年記念基金、株式会社きのとや、株式会社秀岳荘、株式会社地崎工業、株式会社ドーコン、札幌ウィンタースポーツミュージアム、札幌市立常盤中学校、ニッカウキスキー株式会社、北海道建設業信用保証株式会社、北海道旅客鉄道株式会社

総合博物館企画展示「北海道大学の山小屋」展実行委員会
北海道大学総合博物館

総合博物館企画展示「北海道大学の山小屋」展実行委員会

青池民雄（ワンダーフォーゲル部OB）・在田一則（山スキー部OB）・
大塚英典（ワンダーフォーゲル部OB）・小澤丈夫（北海道大学大学院工学研究科）・
角 幸博（北海道大学大学院工学研究科）・神前 博（山岳部OB）・
下村太一（ワンダーフォーゲル部OB）・高篠和憲（山岳部OB）・
徳田昌生（山スキー部OB）・永野拓也（スキー部OB）・中村晴彦（山岳部OB）・
平沖敏文（ワンダーフォーゲル部OB）・柳生 修（山スキー部OB）・
山本幹雄（山スキー部OB）

小屋模型制作グループ

制作指導

小澤丈夫・角 幸博

コアスタッフ

池村菜々・瀬野 徹・宮部芳宏

制作スタッフ

石橋圭一・大田雄介・大脇慶多・角 哲・

笹岡 歩・佐藤大樹・野澤直之・原 朋教・

三浦友美・山崎ひとみ・横地 進・

ノーマン・グレード・ドリアン

地形模型制作グループ

大塚由夏・大塚巴由里・大塚英典

北海道大学総合博物館第33回企画展示

北海道大学の山小屋

執筆者	在田一則	北海道大学総合博物館資料部研究員
	小河建伸	ふらの農協
	佐々木尚三	森林総合研究所北海道支所
	下村太一	北海道大学大学院法学研究科博士課程
	中村晴彦	北海道大学山岳館
	樋口和生	NPO法人北海道山岳活動サポート
	平沖敏文	北海道大学大学院工学研究科
編集者	松枝大治	北海道大学総合博物館
発行日	2006（平成18）年6月30日	
発行所	北海道大学総合博物館	
	〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目	
	Tel：011-706-2658 Fax：011-706-4029	
	http://www.museum.hokudai.ac.jp	
	e-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp	
印刷	北海道大学生協同組合 情報サービス部	



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM



北海道大学総合博物館